



# アランと共に (II)

高村昌憲



エトワールの凱旋門からパリ市街（エッフェル塔方面）を望む

## 五十一 ディアボロ遊び

一九〇六年頃からフランスに流行した遊びにディアボロがあります。中央部分がくびれた鼓を細くしたような独楽（こま）で、糸の上に置いて糸の両端に付けた棒を交互に上下して空中で回転させます。我が国でも明治末期に学生間で流行しました。アランも実際にこの遊びを良くやっていたようです。常に独楽を一定に安定させてうまく回転させ、垂直に空中へ投げ出し、そして受け止めることが何故出来るのかアランはすっかりと全てを理解していない、と一九〇七年八月五日のプロポに書いています。そして、ディアボロと宗教が似ていることを述べながら、宗教についての本来の姿を明解に言及していますが、その書き出しは次のとおりです。

「ディアボロ遊びは本当に宗教に似ています。一本の糸の上で回転する二つの独楽を合わせたようなものは、回転すればする程バランスがとれます。それは宗教のことについても、人が望めば望む程考えることが出来る喜びのメカニズムと似ています。...（中略）...それを理解するように成るためには少しはディアボロをやって楽しんでみたり、ディアボロをやって楽しんでいる人々を観察しなければなりません。私はこのディアボロ遊びという宗教の神学者です。

しかし、この遊びを実際に行う人々は多くを考えませんし、自分たちの楽しみをそんなにも遠くにまで探しに行きません。彼らは克服して楽しみを手に入れる困難を知り上達していきます。彼らは順々に系統だって練習します。自分で新しいやり方を考え出し、もっと難しい遊びを行います。彼らは隣の人と比較します。彼らは自分自身とも比較します。彼らの中で一番よく考えた者たちは、ディアボロを上手に投げるための練習方法を書き留めます。その新しい宗教における彼らは、神学者というよりもモラリストです」。

ディアボロ遊びは、まさに新興宗教です。遊びに興じる人々はその遊びのことを考えずに興じるだけです。しかし、その遊びのことを考える人々はその遊びを上達させる練習方法を考え出したり、より高度な技術の習得に努めようとします。宗教も同じです。心の安らぎを求める人々の宗教は、その宗教のことを多く考えません。誰もがその宗教の存在理由や社会的機能を考えませんが、誰もがその宗教で喜びを見出しているのを知っています。皆が信じるから信じるのです。信者たちは、ディアボロ遊びのように平凡に遊びます。決して上達しませんし、新しいやり方も求めません。時間をかけて費やすのが十分に楽しいのです。

ところがその宗教について一番よく考える人々は、その宗教以外は全てに無知です。その宗教の中で人々と接触するだけで思想も訓練も暇つぶしも全てがその宗教が存在するためのものとなり、新しい人々との接触が無くなればやがて一つの集団を形成することだけが喜びに成ります。彼らはその集団の聖遺物に触れることしか望まなくなります。その集団の聖遺物とは国王のものであったり、天皇のものであったりします。決して二つとないものですから絶対君主制の思想に似た思考形態を辿ることになります。国王が与えるものに喜びを見出します。国王が定めた制服を身に付けて悦に入ります。それは譬え完全なものでなくても十分に嬉しいのです。宗教が与える喜びも同じです。或る絶対的なもの、喜びでも楽しみでもそれに夢中に成ればそれが全てですから、半分に壊れたディアボロでも十分に楽しいのです。

「...（中略）...私（アラン）は昨日或る少女に感心しました。彼女は紐も棒も持っていませんでしたが、半分に壊れたディアボロの独楽だけで大変熱心に遊んでいました」。

宗教とは壊れたディアボロです。神が完全なディアボロであるなら、人間は壊れた独楽でしかありません。しかし、国王が与えた完全なディアボロで楽しむことよりも、自分にとってのディアボロを見付けることです。一つの集団の中で完全なディアボロで遊ぶことよりも集団を出て、この少女のように独りで遊ぶことを覚えることです。何故ならばその行為が真の心の安らぎを与えるからです。集団が与える安らぎは決して心を夢中にさせるものではなく、不安や恐怖からの逃避であり権力への依存でしかないからです。そして、不安や恐怖について人は決して思考しません。それらは感染していくだけで、決して心からの新しい交流を生みません。不安や恐怖は新しい創造も生みません。何故ならそれらは集団を志向するばかりで、独りに成ることを拒否するからです。しかしながら創造とは独創でしかなく独りで行うしかない営みであり、交流も一つの集団に拘泥しない強い独立心とともに心を開放して、不安や恐怖や絶望に打ち勝つことによって初めて成就するものであるからです。「私たちが突然に神になれるのは、決して恐怖や絶望からではありません。その反対です、何故なら恐怖や絶望は絶対に負けるからです。期待して待つことと反対であるからです」とアランは一九一一年七月一七日のプロポの最後にも、創造の本質について書いています。

私たちの現実も、一つの集団によって成立しているわけではありません。多くの集団があり、一つの集団を出ることによって初めて新しい交流が生まれ、新しい創造が生まれます。新しい交流や創造は平和の礎です。それに対して、一つの集団の中に固まれば、何時か必ず他の集団との戦いが始まります。そして、神は完全であるかもしれませんが、私たちの現実には壊れたディアボロであっても、〈少女〉のように夢中に成れる機会に溢れています。宗教とは抽象化されたもののように完全なものが与えられる営みではなく、不完全な現実の中でも喜びがあり、楽しく安らかに成れるものでもある筈です。（完）

## 五十二 学生は書くことです

権威主義者は現状を変えようとしません。過去の主義主張が全てですから、現在の疑問に答えようとしません。〈故（ふる）きを温（たず）ねる〉ばかりで〈新しきを知る〉ことがありません。過去の知識の量が多ければ多い程、優れた学者に成ります。知識の量が現在の学説を決定していくが如くです。権威とは、知識の量が多い者の意見に過ぎない筈ですが、そういう者の意見が優れた意見に変身して、それ以外の意見や思考を否定し葬り去ります。思考そのものを知識と見做しませんから否定するようになります。思考上の独裁者が生まれる危険性が増してきます。二十世紀前半頃までのフランスのリセ（高等学校）や大学で最も権威があった知識とはラテン語でした。死語であるラテン語の知識を多く所有している者が、優れた人間として社会のリーダーに成る道を進める条件の一つであったと言えます。

しかし、一九六八年の五月危機以後の教育改革によって、現代の〈生きた〉フランス語で考える教育が見直されるようになりました。自分で思考することは、権力者や王たちにとっては不都合なことです。健全で公平な民主主義社会や共和制の国を確立していくためには必要なことと考えます。思考することによって、毎日の自分の体を洗う必要があります。洗わないと不潔になり、やがて権力者の垢で汚れた体になります。アランは一九〇七年八月六日のプロポで、ラテン語の権威に染まっていない学術の例として工業、スポーツ、衛生を挙げています。幾らラテン語をよく知っていても、実生活では余り役に立ちそうもありません。外国語の知識も同じです。我が国の教育も英語の知識が進学に有利に働きますから、自分で考える前に英語の知識を丸暗記します。丸暗記も、自分の思考を英語で表現する場合は大切ですが、それよりも先ず日本語を正しく覚えて表現することが肝要です。アランは次のように言います。

「教育においても同じ状況をみる事が出来ます。実用的な知識が望まれております。そして、人は最も容易なことには直ぐに夢中になります。流行に合致したシルエットの服を大急ぎで作ります。子供たちは外国語の助手と親しくなって英語やドイツ語を教えて貰います、確かにそれは役に立ちます。しかし、何よりも役に立ち実用的なこととは先ずそのものを良く知ることであり、次にそのことについて話すことであり、母国語で正確にそして明瞭に書くことです。その外の事は独りで出来ることであり、取るに足りないことです」。

ジャン・ジャック・ルソーも『エミール』の中で、子供が外国語を勉強するのはどんなに早くても十二歳からでよい、と書いていますから、我が国の小学校も昨今言われているように英語教育に早いうちに着手しないと世界に遅れを取るなどと性急に結論付ける必要は無いと私は考えます。それよりも正しい日本語で毎日日記を書く方が良いと思います。あるいは手紙を書くことです。一人ひとりの思考や感情が表出されない社会は、やがて批判することも否定することも認められず、人々は結果ばかりを求める精神構造で営為することに成るでしょう。真の革新とは権力に対して反逆することであり、隷属と特権と戦争を否定することを望み、更にもっと良く思考するならその否定は歴史の一瞬であり、否定と肯定を和解させる何らかの意見でなければならず、結局それが〈社会〉における〈自由〉を準備する、とアランは一九一一年四月一四日のプロポでも言っています。就中、教育とは自分から思考する方法を手に入れることであり、入学試験に

合格することが主な目的ではありません。この目的を見間違えるから、或る私立学校の教師のように、推薦入試に有利となる英検テストの問題を早く開封して生徒に事前に教えたりするのです。恐らく、その学校の教育方針が結果ばかりを求めるものだったに違いありません。金額になった利益ばかりを追求する精神構造の企業経営者が同じ手法で教育に当たっているからに違いありません。人に勝つ喜びしか知らなくなり、学ぶ喜びや創る喜びを知らずに何時かは人生の敗者に成るでしょう。前者の喜びには必ず敗者の悲慘が内在されています。しかし、後者の喜びには敗者が一人もおりません。戦争を否定する者だけが手に入れることの出来る喜びです。そのためには〈シャワーを浴びた後には下着を変えるように〉、毎日新しく考えなければなりません。そして、才気に満ちた者であっても実際に書く訓練をしなければなりません。何故なら、考えることは隷属や特権や戦争を否定する唯一の方法であるからです。アランは次のように書いてこのプロポを結んでいます。

「その後、才気に満ちた学生が苦勞して父へ手紙を書きました。この時はフランス語でしたが、愚かな文章であり、出来が良くありませんでした。でも、それは洗った下着です」。

汚れた下着を着てはなりません。私利私欲と戦いの匂いが染み付いた悪臭を放つことになります。思考することによって、公平と平和の精神を取得することが出来ます。戦場の兵士は敵を殺すことだけを思い、余分なことを考えません。敵と同じように公平でなければならないなどと決して考えません。つまり戦争には如何なる正義もありません。何故なら、〈正義〉(Justice)とは〈公平〉のことでもあるからです。(完)

## 五十三 戦争における平等

一九〇七年八月一八日のプロポで、アランは人類にとって最も不公平な結果を齎すものと思われる戦争について、興味ある面白い意見を述べています。悲惨な戦争の結果とは裏腹に、その行為の中に隠されている平等の精神について書いていますので、その全文を引用してみます。

「死刑は暗殺者たちを怖がらせないとよく言われています。断頭台や切断された首を見て、殺人犯たちが或る種の野蛮な英雄主義のようなものをそこに見て、厳粛にその未来に影響を与えることはよくあることです。

言葉は余り力がありません。世界中の人々は気高さがが必要です。一人ひとりの人間が各々意見を持っており、規範に従って判断します。従って名誉とか不名誉は到る処にあり、監獄の中にも同じようにあります。そして、人殺しは何でも悪と見做すようになる人々はごく僅かになります。或る人々は戦争で人を殺すことがありますし、その外の人々は決闘で人を殺すこともあります。ですから重要なのは方法です。裁判には一つの方法しかありませんが、それは平等ということです。

少なくとも決闘にはルールがあり、相手も自分と同じ武器を持ちます。私に許されていることは相手にも許されていることになります。私が相手と一緒に行動したいと思う時は、相手も私と一緒に行動することを私は強く望みます。戦争においても同じで、戦闘を行うには二つの国民がいるということ、個人は各々に違いがあっても最早全体の一部でしかなく、あらゆる策略や武器を用いて自分なりに自由に戦いますが、限界が無い訳ではありません。戦争という偶然によって、平等が回復するようになります。私が今日一人に対して二人で戦いを始めれば、明日は二人に対して一人だけで戦います。私は砲弾の雨の中で、大砲を持たない敵の隊を粉砕します。もしも私が大砲だけを動かして撃たないでいたなら、卑怯者になるでしょう。同じ時間に多分、他の場所でも大砲は使われていました。そこには英雄主義を生むものがあります。その時、理性は野生の本能に同意し、人間は全身全霊で臨みます。

殺人者にもこの感情があります。彼が、殺す機会がめったに無かった殺人者でなく、プロの殺人者なら尚更です。彼も罊が幾つもある戦争に参戦します。攻撃し、背後を襲われ、逃走し、身を隠します。しかし、至上の正義が一つの意義と気高さを全てに亘って与えます。敵は策を弄し変装して治安を守りながら、背後からも攻撃します。敵には死刑台もあれば、死出の支度となる拷問もあります。最も勇敢で荒々しい者でも、背筋が寒くなることなく考えることは出来ませんし、正しく平和を望む市民と首にネクタイを巻いて彼の処へ行くエスパドリーユの靴を履いた人々には、平和が回復することになります。結局のところ武器は平等であり、それこそが戦争です。私たちは敵を殺すが死ぬことも知る、と彼らは言います。回りくどい言い方になりますが、恐怖は勇気を強いものにしてくれます。というのも私たちの情熱は、チェスの歩に似て些細ではないからです。本能そのものは単純ではありません。馬の鼻をつついてご覧なさい。馬は後ずさりします。馬の胸をつついてご覧なさい。串刺しにされます」。

現代の我が国では決闘が禁止されていますが、二人の人間が同じ武器を持って戦う決闘は、相手を殺すかもしれないし殺されるかもしれないから、その意味では平等の制度と言えます。それが国レベルの戦いになれば戦争になりますが、奴隷がいる国が戦勝国に成るかもしれないし、王様がいる国が敗戦国に成るかもしれないから、やはりその意味では平等と言えます。戦争とは、国と国とが平等を目指して戦う制度でもあります。それでは平等ではない制度とは何でし

ようか。

個人レベルの例で言えば、先輩と後輩、親と子、教師と生徒、上司と部下そして顧客と従業員の関係などがあります。いずれも前者は後者よりも優位な立場にあり、一般的には前者が後者の言うことに従属する状況は殆どありません。つまり平等ではありません。そのような状況で平等を主張しようとするれば、不快感や諍いが生じることを覚悟しなければなりません。そういう意味で平和とか外交とは或る意味で不平等な状況のことであり、国レベルの平等を主張しようとするれば、やはり個人レベル同様に戦いになることが考えられます。勿論、性急に平等を主張すれば、という前提条件があつてのことです。従って平和と平等を両立させていくには、根気強い長い時間が必要であると私は考えます。恰も、動物が環境に合わせて進化していくためには長い時間が必要であるように、平和を維持しながら平等を志向する精神にも〈時間〉が必要です。決して、時間を無視して図式的に性急に二次元的に思考してはなりません。時間は、平和や外交の味方です。

決闘も戦争も、お互いに両者が平等であることに相違ありませんが、ネクタイを巻いて、縄底で布製の靴であるエスパドリーユを履いて時間をかけて〈馬の鼻をつつく〉ことを覚えなければなりません。〈馬の胸をつつく〉ことになれば酷い目に会うでしょう。武器を取って戦えば平等になりますが、決して平和を回復することにはなりません。まして戦いそのものが志向する処も、勝者と敗者という不平等そのものです。そして、戦争に勝って平和を手に入れるには、殺人者と同様の感情を持った英雄が必要です。戦争をしないで手に入れる平和には、一人ひとりの忍耐強い勇気と理性が必要ですが、それは決して力の弱いものではないだろうと私は考えます。（完）



「物事に無秩序を取り戻す素晴らしい発明である」とアランが言うルーレットは、人間の労働とか予測というものを受け付けません。いくら労働したからといってルーレットで勝てる訳ではありません。王様でも労働者でも条件は同じです。ここにも平等があります。そして、偶然を期待する遊びは全てが心地よい狂気を与え、私たちに神々や詩人の時間を連れてきてくれるとアランは一九〇七年八月一九日のプロポに書いています。その書き出しに「ルーレットの館に這入る人々は、皆少し頭がおかしくなるのは自然です」と書いて、ルーレットについて分析していきます。

「私たちは、賢明になることが出来れば出来る程予想します。つまり原因や法則を認識しようとし、農作物の収穫を上げるためには祈るのではなくて、種子を蒔かねばならないことを私たちは知っています。そして、それはタイヤが回転して速度を上げたり、ブレーキをかけて方向をかえたりするのであり、悪賢い能力ではありません。従って私たちは、結局のところ考えながらそれらの方法を愛することを学びますし、大きな苦勞を避けるために小さな苦勞を受入れて行くことを学びます。これが理性というものであり、理性はこんな風にして私たちが働き、貯蓄をするように教えてくれます。

しかし、人間は何時もこのようにして生きてきた訳ではありません。というのも原因と結果の連続は、次から次へと原因が交錯しているために、時として眼に見えません。人は種子を蒔くことが出来ますが、何も収穫出来ないこともあり、余りに慎重であったために死ぬこともあり、酷く軽率であったために難から逃れることもあります。アルコールは堪え難いことを治しますし、煙は人間を窒息させますが、ハムを長持ちさせます。人間たちは長い間、夢の中に生きているのではないかと私は想像します。その理由は、夢は夢でしかないことを人間たちが認識することは出来ないでいたからです。つまりその理由は、人間たちに死が蘇り、欲望の力によってあらゆる物事が次から次へと行われると信じていたからです。彼らは欲望との戦いであるこの世を理解していました。そこから詩が生まれ、倦怠が生まれ、祈りが生まれます。

この無垢で純真な人間は、現代の私たちとは遠い存在ですが、私たちの裡にはそっくりその儘生きています。というのも人生は何も忘却していないからです。人生とは糸がくるくる巻かれていく糸巻きのようなもので、今日の糸は昨日の糸を隠して仕舞います。そうして英知とは時として退屈することです。何時も退屈している、と言うことさえ出来ます。数えたり量ったり待つことは退屈なことで、それは馬が轡を齧るような我慢した人生です。同様に、私たちは詩や素朴なイメージを愛しているのです。そして私たちが運勢の星に従うことを理解する時、それを望まなかったことに後悔します。お伽話というものは私たちを大胆にします。

...(中略)...人は分別をもってあらゆることを心配したり、期待することが出来ます。最後にルーレット館に這入った労働者でもその外の人々と同じようにチップを受け取りますし、それ以上のチップを受け取ることさえあり得ます。慎重であることは結局のところ軽蔑されます。公平さは結局のところ追い払われ、人間たちの上には新たに微笑する〈希望〉が君臨しています」。

ルーレットという遊びは、一人ひとり誰でも勝つ可能性がありますが、同じように負ける可能性も等しくありますから、純粹に民主主義と同じです。ルーレットの世界に差別はありません

から、ヒエラルキーのない公平な小さな世界が存在しています。従って組織を維持していくための秩序や地位の無い自由を手に入れることができます。ルーレットではありません。トランプ遊びのポーカーやパチンコや競馬に興じる人々は、自分の意志で勝負しますから自由そのものです。そういう意味で民主主義も本来は自由そのものの制度ですから、その結果責任も全てが自分にあることとなります。正確に言うなら、何の確証も無しに判断し決定しなければならない状況であっても、全ての責任は自分にあるのですから、逆に全ての情報も自分が把握すべきです。勿論、情報を沢山所有していても、ルーレットに勝てる可能性は同じかもしれませんが、例えばルーレットに勝った者が何人いたのか、その人数を知っていれば、賭けを止めようとするかもしれません。勝つか負けるかの判断の外に、賭けないという判断の選択も追加されることになるでしょう。右か左か、一か八かの判断の外に、勝負をしないという三つ目の選択肢が生じてきます。つまり勝つことはないかもしれないが、決して負けることが無いという判断でもあり選択です。それは勝負をする興奮も無く、退屈に違いありませんが、それを英知とか良識と呼んでよいとアランなら言うに違いありません。（完）

「樹木への信仰を取り戻さなければならない。樹皮の下には神が隠れている、と昔の人々は言っていた。そこには美しい伝説がある。何故ならそれらの伝説は有益であるからだ。今日では、一本の樹木は金蔓になっている。浪費家は、次々に現金を手に入れるために、莫大な金利の割引を受入れているのである。彼は山の斜面にある森をすっかり破壊して仕舞い、そこよりも高所では雨水が窪地を作り、平地では洪水を生んでいる。樹木が愛されるようになるためには、学校でこれらのことを繰り返し言わねばならない」と地理学者は言いました。

哲学者は答えて言いました、「宗教は誰も実際に信じていないのですから大して役に立ちません。決まり文句を繰り返して言うこと、儀式ばかりをやることは難しいことではありません。愛や怒りがやってくると、宗教は波の上の浮きのようなものになります。何世紀もの間、人々は繰り返し次のように言ってきました。〈お互いに愛し合おう〉。だが、それでも人々は殺しあうことを止めませんでした。絶えることなく信じられてきた宗教もその波を巧妙に作り続けてきたのです。あなたは子供の記憶を決まり文句で固めて、習慣と感情と象徴を作り出して新しい宗教を生みます。〈共和国万歳！〉〈アルコールとの戦いだ〉〈樹木を大切に〉。しかし、これらの言葉は、詩というものがそうであるように効目がありません。

別のことをやってみなければなりません。それが何か知らねばなりません、詩篇であることはないでしょう。実際の現実のことを理解し説明しなければなりません。

そんなに昔のことではありませんが、或るロシア人が私に語ってくれました。彼の国では何故か肥沃な平原には一人も住んでいないと言うのです。その冬は厳しく、大地は雪で被われませんが、春は突然にやってきます。ところが森が平原の中の一部に残っている限り、人の気配がします。雪は樹木の下にも静かに積もり、蒸発し、再び降り、根まで降下し、樹木を支え、割れた大地にしみ込み、静かな泉となってより遠い処から湧出してきます。もしもあなたが樹木を伐り倒したならば、雪は大変に早く良質の腐植土を大河にまで運んでいく多くの急流を生むことでしょう。あらゆるものは生まれると、残されたものも太陽が乾燥させて、埃となって風が運んで行き、撒き散らします。泉は干上がります」。

以上は、一九〇七年八月二日のプロポの冒頭です。アランは二十世紀初頭において既に、地球環境を大切に考える思想家でした。人間同志が競争して野放図な社会機構を作って乱開発を行えば、泉は干上がります。「するとあなたは森や穀物の平原になっている場所にサハラ砂漠と同じように誰一人いない不毛なものしか最早見ないでしょう」と地理学者の言葉を通してアランは書きます。

アランは既に、地球環境について理性と経験を使って予測していましたが、信じることと予測とは別物であると言います。信じていても実現するとは限りません。しかし、予測にはメカニズムの明晰さで原因と結果を分析し思考していくことが必要です。「銃は人を殺すことが出来るから危ない、とあなたは子供に言います。子供はあなたの言うことを信じているようです。それでもやはりあなたの眼が届かない日には、子供は自分の弟を狙って殺すこともあり得ます。恐らく、弾丸、火薬、雷管、撃鉄のことを理解して知っていれば、そのようなことを起こすこともあり

ません。信じて予測しても何の役にも立ちません」とアランは書きます。信じることは、神を信じる如くメカニズムを超えた感情であり、眼に見える現実を否定しようとし、しかし、信じられないことが起こるのを想像することが予測でもあります。樹木を伐採すれば、大地がサハラ砂漠のようになるのを想像することです。そのことを信じようと信じまいと問題は別です。サハラ砂漠化しないためには、欲望に従って想像しないことです。つまり樹木を伐採して金儲けをしたいという欲望によって想像しないで、理性と経験に従って想像せよ、とアランは言います。この行為を最も苦手とするのは子供であり、愚か者であり、野心家たちであり、理想主義者たちです。

例えば日本国憲法第九条を改正しなければ平和が守れると信じる人々は、やはり平和でありたいという欲望から想像する人々かもしれません。理性と経験に従って想像すれば、唯一の被爆国である我が国が二度と被爆されないために、そのための法整備が必要であると主張する人々がいるのも自然です。勿論、そのための国際社会の理解は不可欠ですが、軍事力は決して戦争のためばかりに有効ではないようです。アランが日本について言及したプロポは極めて少ないので大変に珍しいのですが、そのアランが「日本の軍事力が産業の進歩と平等の精神を同時に示したという事実」に注視して下さい」と、我が国が被爆国になる以前の一九一二年二月五日のプロポで述べています。我が国の心の大地がサハラ砂漠のようにならないためには、やはり我が国の固有の美しい樹木と平等の精神が伐採されないように、政治においてはメカニズムの明晰さで予測することを忘れてはならない重要なことであると私は考えます。（完）

日常を見直すために旅は有効です。旅に出ると、日常の生活の中で忘れていたものを思い出します。詩人の心が生まれ、画家の眼を取り戻します。「見詰めることを覚えなければならないだけです。そのためには旅が役に立ちます。私たちが毎日見ている人々の顔付は、殆ど見詰めていないことをよく教えてくれます。重い荷物を運ぶのに慣れる如く、人は見ることに慣れます。従って眼に馴染んだよく見る光景は、最早私たちを目覚めさせてくれません。最早私たち大人は、子供のように感動を生むことはありませんし、持ち運ぶランプの光だけを両眼で追っていただけです。すっかり眠って仕舞っても、まだほどほどに見ることが出来ます。しかし、私たちが事物を最早意識外に取り出せなくなると、内省的な話や思い出や計画の中に通じていき、一つの言葉からも情熱の感情へ通じます。というのも、全てが何かを望み、悔やむからで、これらのことを考えさせる観念が胆汁をかき回して感情を生むからです。それ故に人は劇場の催し物を調べたり、演技の内容をあれこれ調べるのです。土地が変わればそれだけで良いものになります」とアランは一九〇七年八月二四日のプロポで、旅の新鮮なものの見方について書いています。

しかし、初めて海を見た者は、それが海であるという確信がありませんから、それが海であるということを理解するために人に聞いたり、何回も見て経験を積んでいきます。そのうちに海であることを理解しますから、海ではないものも分かり注意力が目覚めてきます。そのようにして海や山をちらっと見ただけで分かれば、やがてそれらをよく見ないというリスクを負うようになります。

勿論、それは日常の中の出来事に限ります。旅に出れば海や山をよく見詰めます。波を見て〈気晴らしの要素〉を無理やりに考えてから、人は自然と平凡な日常に戻り、感動して同じ問題を再度発見します。「このようにしてたどたどしく読んだ後で、人は本を読むことを覚え、アルバムの中も手紙で厚ぼったくなり彩色されたようになっていきます。それ故に自分の裡で幸福になることを学ぶためには、旅をしなければならない、ということは信じられないかもしれませんが本当のことなのです」とこのプロポを結んでいます。

少し飛躍しますが、自殺しようとする旅に出る者は、多分、幸福を探ることを可能にしているようにも思われます。悲しい時、苦悩の中にある時に旅に出る者も、その日常から逃れるためでしょうが、逆に幸福になるための正しい方法のように思います。日常には息も詰まりそうな規則や人間関係が溢れています。それらを遵守して生活していく力を求心力とするなら、旅に出て自由に行為させる力を遠心力に譬えてみます。求心力だけですと小さく縮こまった生き方をするしかなくなるでしょうし、やがてはノイローゼのような精神的な健康を害することになるかもしれません。反対に、遠心力ばかりになると勝手気儘な根無し草のような人生になり、やはり自分の本当の生活を喪失して仕舞うに違いありません。従って安定して充実した生活には求心力も遠心力も必要です。この譬えは日常と旅ばかりでなく、同じように我が国のサラリーマンにも言えることです。仕事ばかりの人生は、何時か破綻が生じてくるように思えます。仕事以外の楽しみや趣味のようなものも必要であり、両者のバランスが大切です。遠心力が強ければ、その分、求心力も強く働いた人間になるに違いありません。〈休まず遅れず働かず〉の人生では、求心力ばかり

を恃むつまらない生き方になり、不平不満だらけの生活になるでしょう。

そういう意味からも旅に出るのは、遠心力にとって良いことです。旅行が立派な趣味になる所以だと思います。

「不思議で異常なものを見るために、人は大変に遠くへ行きます。花崗岩の絶壁、雪の山、急流です。注視すべきものや美しいものにはこと欠きませんし、何処にもあります。よく見ると全てのもものが美しい。小麦の平原、飛翔する燕、空に浮かぶ雲、星々、そしてそれらのものが全て刻々と変化します。サルビアの花に蜂が這入ると、極めて繊細な小さなシーソーで遊んでいます。二本の雄蕊は花の兜から出ており、花粉で一杯の刷毛となって昆虫の翅の上に塗っていきます。これは私の家の直ぐ近くで見かけた素晴らしい光景です」。

以上はプロポの冒頭の部分です。殆ど散文詩のようなアランの文章です。モルターニュ・オ・ペルシュ生まれのアランが初めて海を見たのは、二十歳の時だったとのこと。その時のアランには「眼にとっての処女性があり、それはそんなにも早く失われることはないに違いありません。普通の人なら四歳になれば既に海や山を見て知っていますから、それらをよく見詰めないというリスクを負っています」。それ故に、アランは海岸の油彩画を描いたのだらうと思います。アラン博物館の壁を飾っているそれらの油彩画は、決して上手ではないのですが、日常を離れた不思議で異常な美しい絵画であることに間違いありませんでした。（完）

## 五十七 労働者の服

如何なる思考や思想にも影響されずに、公正・中立の姿勢で裁く象徴として、裁判官が着用する黒衣があります。黒は何色にも染まらず、裁判官は公正・中立であるという意味から黒い服を着るとのことです。この様に職業によって服の種類が定まっていることはよくあります。制服の様に制度化されているのではないのですが、職業によって着る服の種類も決まってきます。次は、アランが市内電車に乗っている時に耳にした、小さなレストランの主人の話です。

「市内電車の中ではよく勉強させられるものです。私(アラン)は商売の上潮と引潮を隣の人に説明して教えている小さなレストランの主人の話を聞きました。彼は言いました、〈私の町内に大きな家が建って、沢山の石工や人夫たちが私の店と料理を気に入ってくれましたが、会社員たちはそれから来なくなって仕舞いました。会社員は労働者を軽蔑しているのではないのですが、会社員たちは黒い服を着ていて、屢々少し擦り切れていることがあっても、何時もよくブラシをかけてあります。それに引換え労働者たちは織畝のついたビロードの服を着ていて、モルタルや漆喰のしみが付いた儘やって来ました〉」。

例えば柔らかくて白い綺麗な手をしている者が、ハンマーや鶴嘴でざらざらとして褐色になって豆が出来て形も変形している手と握手すると、お互いに或る種の驚きを覚えます。しかし服装は多分、それ以上に重要で、その人の態度や容姿を決定付けているとアランは言います。カラーの襟をしている人は頭の毛も上品にめかしています。綺麗に輝いている靴を大切に履いている人は、慎み深い歩き方をします。彼は間違いなく裕福な人です。しかし、事務員の中でも最も貧しい者は、正に身なりも奴隷になっている人で、他人の意見というものを最も気にしています。このことは礼儀正しさや羞恥心のようなものを生みます。たまには事務員も酒に酔うことがあります。酩酊は事務員を大きく変えます。顰蹙を買い、真っ白なシーツを汚すことに成るとアランは書いています。そして、機関車を降りて自宅へ帰るのに市内電車に乗る機関士のことを、一九〇七年八月二八日のプロポで次のように書いています。

「... (中略) ...機関士は一寸した役人よりも沢山の金を稼ぎ、頭も良くて勇気があり、誇り高い性格をしています。石炭で真っ黒です。日に焼けた顔には汚れが赤くなって筋を引き、炎と太陽が更に顔を焼きます。彼は一晩中機関車を動かして、疲れて自分の部屋へ眠りに帰ります。傍らには可愛らしい奥さんが、不満顔で横にいる夫に言います。〈この人は酔っ払いよ！ 何て醜い人なの！〉しかしながら彼は疲れ切っていて眠るだけです。彼女が言っていることなど別に何も考えません。全てがそんな風で、だらしなく気儘な歩き方をしてだぶだぶの服の襷を見ただけで、あれは労働者よ、と言われます。

誰もが知っている階級闘争とは、多分、漆喰のしみの付いた作業衣と、よくブラシがかけられたフロックコートとの不平等な戦いでしかありません」。

労働者には労働者としての服があり、感情があり、思想があります。労働者は富の分配が公平であることを望みます。労働者同士が団結する目的もそこにありますから、作業衣を着る労働者とフロックコートを着る事務員は、各々が独自に団結します。その典型は石工職人たちの組織が、やがて近代フリーメーソンとしての秘密結社になったことです。この場合は同業者の組織から

、同じ理念の下に集まった人々の集団に変化し、理念というものに近代化されて、条件に沿えば誰でも入会することが出来るようになったことです。つまり近代化されたフリーメーソンとは〈兄弟愛〉〈救済〉〈真実〉という基本理念に賛同する者たちの集団であり、石工職人という同業者の集団内における富の分配が公平に行われることを目的にしなくなりました。彼らの目的は懇親であり、慈善であり、科学的思想の発展ですから、自らの組織内の充実を求めるものであって、決して他の組織との公平性を問題にすることがありませんから、その行動を公表する必要がなく密室化されていきます。そして、会員同志がお互いに識別出来るように服に代ってマークや合図などが定められていきます。上がコンパスで下が直角定規のフリーメーソンのマークも、決して外部に向って広報する必要がなく、会員だけが知っていればよいのです。横浜の外国人墓地に這入って歩いていると、このマークが記されている墓石に出会います。幕末に、横浜の外国人居留地内には我が国で最初のロッジ（集会所）が開設されましたから、このマークを誇りにしていた人々も多く、わざわざ墓石に記したのだと思います。因みに、歴史的にイギリス王室には会員が多く、アメリカも初代大統領ワシントン以下十五名の歴代大統領が会員だったとのことです。我が国の政治家としては鳩山一郎が有名であり、マッカーサーも会員だったそうですが、政治は複雑であり決してフリーメーソンが現代の我が国の政治を操作出来る可能性は少ないでしょう。何故なら、彼らは会員のことしか眼中にないからですが、私たちはユダヤ人陰謀説と同様に、風評や捏造には安易に惑わされないことが賢明だと思います。しかし只一つ言える事は、彼らは仲間意識が非常に強く、組織の人事なども含めて何事にも仲間を優先していることは間違いなく、決して裁判官のように公正ではなく、黒衣を着る資格は無いということです。（完）



『罪と罰』はドストエフスキーの小説ですが、理屈によって人間の行動を決定することは危険です。理屈や理論、或いはイデオロギーのみで行動を決定することの単純さや幼稚さは、健全なる市民社会を構築する上で毒に成ることさえあると思います。市民は一人ひとりが自由でなければなりません、それは決して自由に罪を犯してよいことではないのは明白です。まして王様が罪を犯せば大変な無秩序を齎し、非常に沢山の人が苦勞するとアランは書きます。嘗ての残酷な拷問に関して言うなら、憤激を正当に鎮めることを目的にしていると信じてはなりません。それは表面上の見せかけです。個人一人ひとりの怒りであると言える民衆の怒りは、恐怖の表れの一つでしかありません。十九世紀末から二十世紀初頭のアメリカ南部の黒人階級は、決して最悪ではなかったのですが、一八八四年から一九〇七年まで、何千人もの黒人がリンチを受けたこのことです。白人女性を強姦した黒人を生きた儘焼き殺す人々は、この方法で憎むべき罪の復讐を遂げ、法の正義を回復させられると信じていましたし、多分、彼ら民衆もそのことを信じています。何故なら、大部分の人々は自分の情熱を酷く間違っ理解しているからです。実際に彼らは黒人を脅えさせ、秩序を回復させることしか望んでいないと信じている、とアランは一九〇七年九月五日のプロポに書いています。

「精神病の医者報告書とその責任の問題について、若い医者が興奮して言いました、「少しは教育を受けた人ならこの世に自由意志があると信じる事が出来るように、もしも殺人を犯した犯人も自由意志を持っていたかどうかを調査した後に言ってくれるように私たちは頼まれている。それは大部分の人間が裁判官と同じで、長所と短所についての絶対的な観念や適切な罰というものになお支配されていることを証明している」。

健全な市民社会は、一人ひとりに自由意志が機能して一人ひとりが判断して行動を決定しなければなりません、殺人を犯した犯人にも自由意志があったと見做すことになれば、その罪も尚更重いものになります。つまり自由意志にはそれだけ重い責任が伴うものであり、その限りにおいて罪には公平とか不公平というものはないが、役に立つ罪と役に立たない罪はあるということです。何時の世でも罰は公的なものとして受け、そのことは或る者には脅えさせ、他の者には安心させる目的をもっているとアランは書いています。

被害者と同程度の苦痛を加害者に課す同罪刑法は古くからある考え方ですが、それは子供じみたやり方かもしれませぬ。誰かの権利の目をつぶした者のための権利の目というものは、子供じみて幼稚であると思ふ事が出来ます。しかしながら、それは常に不条理でもありません。他人に与えた苦痛を何らかのやり方で体験させることは、役に立つこともあります。小さな子供は弟の腕をつねって遊ぶことがあります、その子供の腕を同じ様につねっても、そのことはそんなに馬鹿なことではありません、と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

罪には個人的な考えや理屈、あるいは様々な事情や状況が影響してきますから、極めて個人的な出来事と思ふべきです。しかし、現代においてそれを償うための罰には公的な側面しかありません。リンチや敵討ちは禁止され、それに代って国が定めた法によって公的に罰を与えているからです。個人の出来事である犯罪を、公共性の規準に基づいて処理することが求められているの

です。公的であることは公正でなければならず、従って不公平という概念も消滅せざるを得ません。もしも罰が不公平であると考えたならば、その罰はリンチや敵討ちと同次元の私的なものに成って仕舞います。

それ故に戦争犯罪も私的な感情で行われた場合は論外ですが、公的な命令によって行われた場合は慎重に罰を与えるべきです。敗戦国の人々が犯した罪を戦勝国の人々が罰することはよくあることですが、逆に戦勝国の人々が犯した罪を敗戦国の人々が罰することは殆ど無く、前者の罰とは決して公平で公的なものではなく、正に個人的な仕返しと同じです。秩序回復のために行われるリンチと同じになります。勿論、国際裁判というものが行われて、公的なものの様相を呈しているかの如く演出されますが、実際は戦勝国が歴史という裁判官によって敗戦国の個人を裁く結果に過ぎません。私的側面が極めて稀薄な罪でありながら、恰も自由意志で犯した罪に対しての罰であるかのように扱われていきます。ここに戦争犯罪人という個人的犯罪者が生れていき、公的な罰と矛盾した、リンチに近い罰が加えられていきます。歴史的に見れば罪と罰は、権力者たちによって私的に変えられた残滓のようなものであり、決して絶対的な正義に基づいて説明され得ないものが数多くあり、歴史的評価は幾らでも変更され得るものであると見た方がよさそうです。その意味で中国が最近行った日本人犯罪者の死刑執行も絶対的な公正さの面で疑問であり、罪を憎んで人を憎まずの思想の本質を、我が国はもう少し誇りを持って主張すべきであると私は感じます。（完）

日本語は文字を持たない言葉でした。六世紀に仏教が伝来して漢字が移入され、音訓を用いて万葉仮名として日本語に当て嵌め、やがてひらがなやかたかなが出来ました。日本語とは、元々は文字を持たずに音のみで伝達され言葉ですから、耳で聞く言葉でした。眼で見る要素が無かったために筆跡学のような考え方も無かったと思われまゝ。勿論、その後の我が国には書道などの芸術が文字における美を確立しましたが、それらの源流は中国の漢字文化に遡るものです。

他方、西洋にもアルファベットの文字を直筆で美しく書く訓練も行われていました。学校の授業としても行われていましたが、ペン先がボールペンに代ってからは、すっかり廃れ、子供たちに与えていた教育的で精神的な良き効果を心配する教育者もいるようです。文字を美しく書くという行為は、文字そのものの機能として人間精神の発達に寄与する側面もあるようです。「もしもあなたが疲れていれば、あなたの筆跡もその影響をうけるでしょう。怒った人は、半睡状態のようになってサインするようには書きません。書くということとは、あなたが制限とか用心深さについて考え、あなたの手はそれに対応した動作を行うのであり、そこから線の停止とか終了を自分の筆跡の中で解釈出来るようになるでしょう」とアランは一九〇七年九月九日のプロポに書いています。

しかし、筆跡からそれを書いた人の精神状態を確認することは殆ど不可能であり、更にその人の性格まで分ることも不可能であるとアランは指摘しています。完全には不可能ですが、人間の性格とその動作の間に関係があることも確かですから、筆跡学を全く認めない訳ではないが恐らく大変に難しい学問であるとアランは言います。

それに反して手相を見る時の手のひらの線は、何を示しているのでしょうか？ 手のひらの線は、手を開いたり閉じたりして生じますが、その動作は何を示しているのでしょうか？ 手の動きには大変に多くのニュアンスがあります。馬車を動かす御者にお金を支払う人をご覧になって下さい。実直で正直な人がお金を持つ方法は爪を下にしますし、横柄な人は爪を上にして指の先で支払い、頭や背中や肩の動きも全てが同じ様な仕草になっているとアランは書いています。

しかし、そのことと筆跡は如何に結び付くのでしょうか？ 一方の動作は手の線をはっきりと見せますが、もう一つの動作は見えなくして仕舞います。手は犁やハンマーや鞭や拳銃を持って行為を生みますが、それらの動作は身振りの微妙な差異により上手に形を変えられるに違いありません。でも仕事というものは、人が細部まで正確に行えても殆ど人間の性格とは関係がありません。フェンシングをやる人の野心は、手相という同じ手のひらの線を見て、作家の野心と同じ印を如何にして示すことが出来るのでしょうか？ アランには手相が理解出来ず、自主的に正しく判断出来るように精神を強靱にして下さい、と言うしかないとアランは書いています。仮にアランが筆跡からそれを書いた人の性格が読み取れるという仮説を立てても、その仮説に関して何も分っていないのですから、何でもかんでも結論が下せるのでしょうか？ そんなことは出来ないとアランは明言してこのプロポを終えています。

信じることは闇雲に結論を下すことではありません。仮説を立てたならば、その仮説を説明していく努力が思考する力になり、信じる事が可能になります。従って思考する力のない処には

信じる力もなく、あるのは盲信だけです。占いも同じです。この世は何でも起こりますから、占い師が何か言えばそのとおりのことが起こることは幾らでもあります。一九〇八年四月一四日のプロポは「占い」について述べていますが、占い師の言ったことを記憶していた娘さんに不安が広がります。結婚する前にその占い師から「あなたは結婚します。子供が生まれます。その子供は亡くなります」と言われます。結婚もしていなかったその時は笑って済ませましたが、やがて実際に結婚して子供が生れると、心配で堪らなくなったということです。従ってアランは、遊び半分でも占いを見て貰ってはならないと忠告しています。最初は信じなくても、だんだんと不安になってくるからです。不信に対して仕返しされるからです。手相についても同じです。一人の人間にはあらゆる性格があります。陽気な時も陰気な時もあり、大胆になる時も細心になる時もあるから、性格について何を言われても当たっているのです。

しかし、筆跡は陽気な時も陰気な時も書く文字は似ていますから、占いや手相とは異なります。つまり筆跡鑑定のように同一人物か否かの判断が可能になり、科学的に証明することが可能と見做せるようになってきたのですから、十分に思考の対象になり得ます。それとは反対に手相占いは思考の対象になり得ません。何故なら科学的証明がなされた事はありませんし、手相占い師が占った結果を追跡調査することはまず無いからです。思考することとは科学的に推論することであり、自分以外の者にも納得させることですが、信じることは必ずしも科学的に考える必要は無く、自分一人が納得すればそれで良いのですから危険も沢山あることになります。(完)

## 六十 ルーレットに勝つ方法

理工科学校の学生といえばフランスではエリート中のエリートです。その優秀な学生の一人が、誰もが金持ちに成りたいように、ルーレットで賭けていましたが、少なくとも勝つチャンスを推論しようとして、次のような些細な話をアランにしました。「私が知る限り同じ色が連続して七回出るのは非常に稀です。ですから次のような法則があると私は言いたいのです。一つの色が続けて六回出ることにして私は何回も賭けます」。一つのルールを適用して、理性的なことから馬鹿げたことまでこのルールに従っていくことは全くお目出度いことであり、その学生は赤に六回賭けると、次は黒に賭け、黒に六回賭けると次は赤に賭けていましたが、皆と同じように得をする時もあれば損をする時もありました。

にこにこしながらも学生の後が続いて賭けていた仲良しの老人が、ついに彼に言いました、「何故そんなことをするのですか？ 情熱の感情なしでは誰も生きることが出来ませんが、間違った考えで自分の感情を身に付けることは最悪で馬鹿らしく、私は何時もそれを避けるようにしています。あなたは七回連続して赤に賭けないで、六回連続して赤に賭けてから次に黒に賭けますが、自分では大変に賢明であると思っています。しかしながら、もしもあなたが正しく推理したいならば、二回目に黒が出ることも同様にあり得ることで、あなたはそのこともよく分っています」。

理工科学校の学生はそこでルーレットを止めて、公園を老人の後について行きました。太陽は海に沈みました。二人だけがちょっとそれを凝視し、続いてあちらこちらに二人が見たのは太陽の形をした薄紫色の斑点でした。彼らは更に話をして、老人は賭けとチャンスの確率について話を戻しました。老人は言いました、「賭けをして遊ぶ人は誰もが自分で想像して一つの色を選択します。先程あなたがやったように間違った推理を推し進めていきます。しかし、あなたは何故そのような色を好んで思い出したくなるのでしょうか？ 創造力が重要になると、私たちが追っていくのは自分の眼です。あなたは太陽を凝視しました。あなたは薄紫色の斑点を想像することを止められません。賭けについても同じです。あなたが赤のことを過度に考えると、外の色のことについて考えたくなり、疲れてきます。習慣は一連の連続した賭けをその儘続けさせますが、疲労してその賭けを交代させようとしみます。かくしてあなたの賭けが続行していくことは、磨り減らすことと栄養になることの連続です。あなたが言うように一つの色に固執するのは、その色が当たって稼がせてくれると思うからで、実際にあなたがそのように信じているのは、勝った事の想像力がそこに止まっているからです。人間とはルーレットであり、そのルーレットが賭けているのです」。このように老人が言ったことを書いて、アランは一九〇七年九月一五日のプロポを終えています。

賭けを続けさせる原動力は、勝ったことを想像する力です。想像力は所詮、現実を歪曲して理解しようとしみます。薄紫色の太陽が沈んで黒い夜がくれば、赤から黒へルーレットの賭けも変えることになります。こんな些細な事象が賭けを決定していきます。しかし、人間の思考も似ています。思考の始めは、太陽が見せてくれた薄紫色の斑点のように原因も不確かです。つまり必然とは最初の原因のことではなく、赤を何回も続けて賭けていくことが必然になるのです。そのよ

うにして継続していくことが必然に代り、六回まで続けて赤に賭けることが必然になっていきます。最初のきっかけが重要ではなく、継続していくことが重要になっていきます。自分の服が黒であれば、ルーレットも黒へ賭け始めますが、二回、三回と続けて黒へ賭けることが必然となり、ルール化していきます。しかし、それは六回までで、七回目には赤へ変えることが人間の意志の力であり、人間が思考し見出した規律であり得るとアランは言っているように思います。

骰子の目も一から六までのように、月曜日から土曜日まで六日間の後に休日があるように、若い理工科学校の学生も「一つの色は続けて六回出る」という法則を見出したのでしょ。そして、それは決して科学的方法による法則ではなく、経験から見出したその学生だけが理解し得た法則でした。確かに同じ色が七回も連続して出ることは全く不可能ではありません。しかし、その学生にはあり得ないことと信じて、赤が連続して出るのは六回までであると決定して仕舞ったのです。賭けにおいてそのように決定すれば、理論上は負けて損をすることはありません。当たるまで二倍ずつ掛金を増やしていけばよいからです。つまり一回目に赤に百円を賭けて黒が出て負ければ、二回目には二百円を賭けます。それでも黒が出て負ければ、三回目には四百円を賭けます。そのようにして六回目まで負ければ、七回目も赤に賭けます。何故なら、この学生の法則によれば同じ色は七回続けて出ないことになっているからです。このような賭け方をすれば、七回目までに一回当たればよくて、絶対に損をすることはありません。勿論、この方法には同じ色が七回連続して出ることが絶対に無いという条件が必要ですが、その条件が絶対であることを証明することも不可能です。本当にこの世は何でも起こることを、念のため申し添えて置きます。

(完)

一九〇五年十二月のフランスにおける政教分離法は、国家における宗教からの完全な中立を確立することとなりましたが、ここでいう国家とは第三共和制であり、宗教とは主にカトリック教会を指していたといってもよいと思います。フランスの総信者数の殆どがカトリックであり、プロテスタントは約二パーセントに過ぎないといえます。国家とカトリックの関係は、フランス革命以後続いていた対立をナポレオンとローマ教皇ピウス七世が宗教協約（コンコルダ）を一世紀前の一八〇一年に結んで和解し、その後のナポレオン法典の完成へ導くこととなります。つまり宗教的支配から法律による統治へ進む近代国家の道筋として、政教分離は必然的な政策と思われませんが、イスラム教圏には未だ政教分離が十分浸透していない国々も現存しており、そのような事態を許容しているのは国家の問題というよりも、むしろ宗教の問題と思われる。

宗教とは本来、人間の心の問題であり、日々を生活する人間に心の平安を与えるものである筈のものが、何時の間にか人々の心に不安や恐怖を与えるものに変容しているものも多いようです。信者数を増やすためにマニュアルのようなものを作り、入信しなければ「あなたは三年以内に死ぬ」と脅すような新興宗教も実際にあったようですが、このようなものは宗教とは言えません。強引な押し売りよりも悪質です。お布施と称して限度額の無い非課税の寄付をさせて財力ばかり伸ばしていきませんが、親が子に財産を与えても贈与税という税金がかかるのですから、宗教法人への寄付も一定額以上のものには課税すべきであると私は考えます。国や地方公共団体へ寄付する時は、寄付する方も貰う方も非課税ですが、宗教法人への寄付は個人でも法人でも一定額以上は贈与税の対象にすべきであると考えます。何故なら高額な寄付金は、最早個人的心情に基づくお布施の範疇に無く、明らかに個人的心情や自発性を軽視した組織的な脱法行為に限りなく近いと思えるからです。しかもそのお布施で建設した施設は、殆どが一般に公開されていません。お寺や神社のように誰もがお参り出来るようになっていません。恐らく、一般の人に見られたくないことをやっているのでしょう。宗教法人の施設は本来、誰でも這入ってお参りして心の平安を手に入れることが出来るものです。そのためにお布施も非課税になっているのではないのでしょうか。決して一部の信者のために非課税になっているのではありません。

しかし、直ぐに政教分離が実現されなくても慌てることはない、とアランは一九〇七年九月二〇日のプロポで言います。「思想の変容、信仰や道德観念の変化は地崩れの前にあるのであり、次から次に続いて起きているのです。しかし、そこでは人間を変える亀裂が分からないのであり、旅行者は駅にいるから分かるように、地崩れの時にしか人間は自分に目覚めないのです」とアランは歴史の変化について地理学者へ語ります。

アランと地理学者は急流に沿った狭い道を進んでいました。地理学者は言いました、「どのような地殻変動が起きて、そこに書き込まれたのでしょうか。或る日、どうしようもない程の大きな力が地層を持ち上げて、急流の側面に立つ絶壁になったことは明白に分かります。この時、急流の水位は上がり、私たちの背後に大きな湖が生まれ、嘗て私たちの頭よりも高い処を流れていた急流が今は足元にあり、少しずつ掘り下げて行って、三百メートルの峡谷になりました。あるいは岩の間に滑り込んで行って、恐らく水はトンネルを掘り、ついにその天上は崩れました。水は

山に勝ちました」。

アランは地理学者に答えて言います、「あなたは映写機を余りに早く回しすぎると思います。嘗て、水はゆっくりと仕事をしていたとあなたは言いますが、今でも水は働いています。しかし、水よりも早く大地が仕事をしていたかのようにあなたが言いたいのは何故でしょうか？ 明らかに私は峡谷の歴史について確かなことは何も言えません。書かれたものよりも真正のものですが、私たちの前には多分それを解釈するのに更に容易でない記録というものがあります。そして、恐らく私はそれらの変化が今も進行しているように、何時も行われていたと信じるようになります。これらの巨大な岩石というものは、今でも私たちの前に立ち塞がっています。変化には幾つかのものがありますが、取分け海岸の変化は見るとよく分かり、その変化を仮定することが可能です。その運動は力強いがゆっくりしています。今よりももっと早かったとは思えません。大地は昔のように冷たく、表面の地層は昔のように収縮し、従って昔のように罅が入り、そして膨れ上がります。私の映写機はこんな風に調整され、急流が流れていく道を如何にして掘ったのか大変よく分かります。今、急流が自らの道を掘っているように昔も掘っていました。しかし、それはゆっくり掘っていましたし、地層が現れるのもゆっくりそのもので、翼をもった大トカゲの恐竜がこの変化を見ていましたが、今よりも早く地球の大異変が起こることはなく、あるいは小さな地崩れもめったに無く、雪解けの季節に見れるだけです」。

従って人間が書いた歴史の本の中でも、それを読まなければなりません。というのもあちらこちらで地崩れが幾つもあるからで、戦い、暴動、そしてバスチーユの奪回のようなことがあっても、事の本質は進展しており、ゆっくりと連続して切れ目の無い作用によって行われ、当事者たちにも気付かないものなのです。例えば政教分離法は地崩れの一つであり、当事者にも直ぐに気付きませんが歴史の必然である、とアランは指摘してこのプロポを結んでいます。我が国においても、政教一体を説く宗教家たちの偽善は、やがて歴史の必然によって暴露され朽ち果てていくことになるでしょう。（完）



教育功労勲章を〈紫色のリボン〉と言っていますが、〈紫色のリボン〉を持っていないから忌々しく思っている人々がいるのは確かです。インクの紙魚が付いたり皿が割れて怒っている人々もおります。ペンで生活する人々とか祈禱所で震える声を出して生活する人々がいることも知っていると思いますが、彼らは自分たちの仕事を下劣であると嘆いています。女性たちは仕立ての良くないブラウスにそれでも夢中になっています。湖で涙を流す詩人たちもおります。色々な人々がおりますが、皆が現在の境遇に不満を持っています。アランは一九〇七年十月十二日のプロポで、仕事を離れた工場労働者の女性たちと一緒に土曜日に旅行した時のことを記しています。

「... (中略) ...彼女たちのうちの或る女性が言いました、「まだ一週間が終っていないわ」。別の女性が言いました、「明日は日曜日で嬉しいわ。家の仕事が出来るわ」。そして、三人目の女性が「けれども寝る前に毎晩自分のために少しは働きたいの。でも何をすればよいかしら？ 昨日、少し縫物をしたかったのに眠って仕舞ったわ」と言いました。黄昏時の生活のことを考えて下さい。はっきりと分かる楽しみということについて考えて下さい。時おり赤い太陽のような楽しみが出てくる時があります。アルコールと恋愛です。

更に、陰気な人が私に言いました、「その楽しみが私の慰めになれば良いと、何故あなたは望むのですか？ 私の苦勞よりももっと辛い苦勞があります。それが私にはもっと悲しいのです。人間の精神状態とは既に幸せの中にいる私のようなもので、悲しそうにしながら私は自分の喜びを長引かせているのです」。

陰気な人よ、そんなことは言わないで下さい。あなたが多くの弦楽器や豎琴を持っているのを私は知っています。ですから私があなたに言いたいことは、それらの楽器を今までと違う弾き方をするのです。今のあなたが持っている幸福は僅かなもので、何も良いものは生まれません。炉辺でのんびりする時間、気持ちの良いベッド、ピアノ、書棚、コーヒーと狐色に焼かれた美味しそうなトーストパン、これら全てが休息も太陽もない労働の日々に結び付いており、私が先程話したことでもあります。女性労働者の彼女たちが単に今よりもほんの少し働かなければ、あなたは今よりも沢山働かなければならなくなります。飲む薬もない重病の人々のことを考える前に、あなたが重病の張本人であつたら、と考えて下さい。そうするとあなたには活力が生まれます。それは月の光に照らされて湖畔で涙を流すことよりもずっと健康的です」。

重病でないことに安堵するばかりでなく、現在の自分に満足出来ることが重要であり、湖畔で悲哀に暮れてばかりいる詩人が涙を流すことよりもずっと健康的であるとアランは書いています。現在の自分に満足出来ずに不満ばかりを言う人は、炉辺でのんびり寛ぎ、気持ちの良いベッドもピアノも書棚もコーヒーと狐色に焼かれた美味しそうなトーストパンにも満足出来ずにおります。日々の生活を楽しめないでおりますから、労働にも不満です。日々の生活を楽しめること、それによって始めて労働の困難にも打ち勝つことが出来ます。困難を克服するには、その困難を楽しめるか否かが重要になってきます。最初は苦勞が多くて苦しくても、やがて毎日繰り返して行いうちにそれが好きになり、楽しめるようになります。〈之を知る者は之を好むものに如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず〉と孔子も言っています。本当に心から楽しむ者は、

そのことを知識として知ることや好きになった者よりも、そのことを一番良く理解しているのであり、そのことが最も大切なことです、とアランも言っているのです。

スポーツ選手も同じです。記録とか勝敗というものがつきもののスポーツ選手も、厳しい辛い練習に耐える日々は苦しいものですが、新記録や勝利を目指して日々の練習に励むことが、やがて心からの楽しみを手に入れるようになります。本当の楽しみは困難を愛することにある、とアランも一九一二年八月二九日のプロポで言っています。新記録を樹立することは困難なことですが、自分に厳しくなってその困難を愛する人が本当の楽しみを知っている人でもあります。トランプ遊びをしている王様は、臣下がわざと負けて何時も勝ってばかりいたならば、直ぐに楽しくなくなります。本当の楽しみは困難の中にあります。スポーツ選手は皆自分に厳しいものです。何故ならそれが本当に楽しいことであるのを知っているからです。新記録を樹立するのは自分であり、他人ではないからです。従って他人に対しての不満も言いません。不満を言っても一向に新記録を樹立出来ないことを承知しているからです。

しかし、誰かが邪魔するから樹立出来なかったとしたら、やはり不満です。人間が決めることを可能にしているものに対しては、やはり不満を抱きます。例えば会社の人事というものは必ず人間が決めることを可能にしていますから、必ず不満を抱く者がいるものです。反対に、その人が自分が決めたことに対しては不満を抱きません。そして、〈自然〉が決定したことにも不満を抱きません。仕方が無いと諦めることが出来ます。諦観の思想が自然と共にある所以です。西行は桜の花の下で死にたいと思うのでした。〈願わくは花のもとにて春死なむその如月の望月の頃〉と詠んで、実際に文治六年（一一九〇年）如月の望月の翌日である旧暦二月十六日に亡くなっています。因みに、二月十五日は釈迦入滅の日でした。〈吾唯足るを知る〉という心が、日々の楽しみの基本にあると私は感じています。それは克己の精神にも精通した心であり、この逆説を理解している者だけが、自分に嘘を付くことなく日々の楽しみや充実を手に入れることを可能にしているのだと思います。（完）

「雨が降っているから、ディアボロをして遊びましょう」と言ってから、アランは優雅に空中で回る独楽から或る思考を披露します。それは文明人が自分の手を、最早自分で使う術を心得ていないようになっている点でした。文明人は身の回りの品物を殆ど自分で作らずに、完成品を購入してくるだけですから、食器もテーブルも椅子も靴も衣服も殆ど自分で作りません。ところが何か手の込んだ難しい訓練をやるように言われると、足元から頭の天辺まで体全体をこわばらせることしか出来ず、齒を食いしぼり、滑稽な姿に成って仕舞います。ディアボロを回すばかりでなく、初めて自転車に乗ったり、水泳やフェンシングやヴァイオリンやピアノやテニスをする時は、何時も同じ事で、最初は自分の筋肉を全て同時に緊張させて仕舞いますが、その緊張は何処から来るのでしょうか？ 少しでも不安があれば怒りだし、はりねずみのように怒りっぽい筋肉のパニックは何処から来るのでしょうか？

それは多分、無為な人生とか単調な労働だけの生活によって齎されるものですが、自然に起因するものでもあります、とアランは一九〇七年十月十四日のプロポで言っています。

人体は半ば鎖に繋がれたように関連し合っている動物たちで一杯の袋に譬えられます。もしも、あなたがその中の一匹をつねったならば、つねられた動物はびっくりして動き出し、他の動物が眼を覚まし、沢山の物音や驚きの声を伴って袋はびくびくと動き出します。

このようにして情熱に火がついて、犯罪が生まれます。難しい遊びに不器用に挑戦している男を観察してご覧なさい。彼は既に怒っており、唯単に震えて地団駄踏んでいるばかりではなく、彼の口も穏やかでいることが出来ません。彼は誰かに、あるいは物とか自分自身に罵詈雑言を言わねばなりません。声を張り上げて演説する人も、直ぐに腹を立てて怒るのも同じメカニズムによります。彼は怒っているから叫んでいる、とあなた言うのでしょうか。しかし、そうではありません。殆ど何時もの場合、彼は大声で叫んでいるから怒っているようになるのです。一番小さな部屋にいとすれば、大声が要求されることはまずありません。彼は最も穏やかな意見を述べるようになります。

このようにして私たちの情熱は駆け出します。肉体的な興奮は自らの手で増幅され、肉体はいわばそれ自身で鞭を打って刺激しており、私たちの考えは自分の情熱に従います。何時もそうならないのは、少しばかり足りないものがあるからです。

私は時々自分が嫌いなために自分を打ちますが、大抵の場合は自分を打つために自分が嫌いなのです。闘いは直ぐに人間をお互いに敵にして仕舞います。この様にして戦争がなくなることはありません、と書いてこのプロポは結ばれています。

打つから戦うのであり、打たなければ戦いにならないとアランは言います。正に戦争の初めは打つから始まるのです。自分の敵は打ってきます。自分を打ってくる者は敵に間違いありません。その時、打ってくる者を打ち返すから戦争になるのです。所謂自衛権の行使は戦争の開始です。真珠湾を打った我が国に対して米軍がとった姿勢でもありますが、この自衛権の行使を放棄した処に日本国憲法第九条の特色があった筈です。如何なる戦争も少なからず自衛のために行われてきました。真珠湾を攻撃されたから自衛のために戦ったのです。それと同じ論理で考えれば、

原爆を投下された我が国は世界で唯一の国ですから、自衛権によって原爆を所有出来る唯一の国であると言っても可笑しくありません。

しかし、その自衛権を放棄したと見做すならば、我が国は原爆を所有することも放棄しているのであると私は考えます。第九条は、自衛権だけは認めていると嘯く人々も多くおりますが、苦し紛れの法解釈のように感じます。従って、やるべきことは戦うことではなくて、当然のことながら戦うための準備ではなくて、平和の精神を世界に見せつけることです。我が国を真珠湾のように攻撃してきても、我が国は打つことを放棄しているのです。戦争を始めないことを世界に見せつけて、世界に理解させることです。そのための方法は幾つもある筈ですが、それは決して戦うための武器を準備するように単純で容易な方法ではありません。しかし、その方法は堂々と世界に胸を張って誇れる方法であり、こそこそと武器を作ったり買ったりする皮相な行為とも無縁です。勿論、国民の生命と安全は守らなければなりませんから、そのための科学技術の発展は必須です。つまり人を殺すための兵器の開発ではなくて、敵の兵器が使用出来なくなる技術や装置の開発です。嘗て、公害問題に対応して水や空気をきれいに浄化した科学技術のように、武器を打てなくする科学技術の開発は必ず可能であると私は考えます。

他方、人と人との交流や文化活動も戦いを無縁にします。一人ひとりを大切に思考する文学、美術、音楽などの芸術ばかりでなく、市民活動や教育、宗教、社会、科学などのあらゆる面における人と人との交流も、平和には必要な活動であり、重要な側面です。正にそれはアランの思想であり、国家や政党や集団を優先させずに一人ひとりの思考や活動を尊重する処から平和の監視人は生まれてきます。平和を守る精神は肉体と分離しません。肉体を打つ処から平和は訪れません。肉体を愛する情熱は、平和を守り監視する情熱でもあります。何故なら、肉体が打たれないための情熱は、一人ひとりに満足を与え充実した生活を約束する平和の精神を育てていくものであるからです。（完）

二十世紀初頭のフランス社会において、アランは如何に見られていたのでしょうか。一九〇七年十月十五日のプロポは、或る有識者の見方が紹介されていますが、アランはそれを否定しています。

アナキスト、社会主義者、同種の政治家のタイプのことを話している時に、或る有識者がアランに言いました、「真実のアナキストとは、あなたです、アラン」。

アランは答えて言いました、「あなたがそのように言うことに大変に驚いています。私は唯、単に税金を払うばかりでなく、税金を払うことが嬉しいのです。何故なら、そのことは私が人々と共通のものを所有しているのを思い出させてくれますし、道路や橋や灯台や堤防や学校や図書館や病院のように、非常に沢山の役立つものでもあるからです。更にその上、私は厳格に法律を守りますし、警官たちの業務に支給される俸給は不十分であると考えています。要するに私が感心していることは、他でもなく人間の行為における規律です。良き秩序を保持している制度は、見るのも嬉しい一つの見世物です」。

彼は言いました、「そうです、私はそのことを全て分かっています。というのも私は昔からあなたを知っているからです。それでもあなたはアナキストです。あなたは秩序とヒエラルキーの必要性を見分けますが、雨が降っていてもあなたは自分の雨傘を忘れるように、凡そ役に立ちません。あなたは自分自身のためにある雨傘が好きではないのです。あなたは知事と話すのと同じ調子で御者とも話します。それは驚くべきことです。あなたは御者に丁寧すぎて知事には丁寧でない、と私が言うべきことか分かりませんが、そうはいつでも結局のところ御者と知事とでは何らかの違いがあつてしかるべきです。あなたは服従することを知っていますが、敬意を払うことが出来ないのです。あなたは学位とか階級というものを信じていません。もしもアカデミー・フランセーズ会員の榮譽を象徴する緑色の棕櫚で身を固めた著名な教授が話をしても、あなたは小学生の話聞くように教授の話聞き、何時も間違いを探しています、それを見付けて喜んでいるのです。一言で肝心なことを言うなら、あなたには宗教心はありますが、信仰がありません。あなたは軍帽に付いている羽飾りとともにある社会を認めますが、それを必要悪として認めているのです。真面目な公務員が眼に涙を溜めて勲章を授与されても、あなたはそれを滑稽なことと見ます。実際に私は肯定しますが、あなたはアナキストなのです」。

このように言われたアランは、自分を分析して次のように結論付けています。

「私（アラン）は白状しなければなりません。何故なら彼が言っていたことは多分本当ではないからです。結局のところ、彼は信じていなかったのですが、私は大変な偶像崇拜者なのです。しかし、私はそのことを遺憾に思っています」。

アランは自分を偶像崇拜者であると言っていますが、その偶像が表しているのはソクラテスかプラトンかアリストテレスかデカルトかオーギュスト・コントかカントか、あるいは誰なのか定かではありません。しかし、神のような偶像を意識していたことは確かです。恐らく偶像であるためには神は眼に見えないものに違いありません。その神を前にしたアランは、知事も御者も同じ人間に映っていたに違いありません。何故なら、神の前では人間は平等であるからです。相対

的な現実の社会においては知事と御者は平等ではありませんが、絶対的な神の前においては平等です。その神を前にしたアランは、知事も御者も同じ人間に映りました。平等の思想とは正にこの絶対的なものを信じる精神が齎すものであり、神以外のものを崇めることが出来なくなって仕舞いますから、アカデミー・フランセーズ会員の榮譽や学位も、国が授与する勲章にも敬意を払っていないように映ります。しかし、アランはそれらをアナキストのように否定する者でもありません。真面目な公務員が勲章を貰って喜んで涙を流している姿は美しいと思い、アカデミー・フランセーズ会員の栄光も立派です。しかし、アランはそれらの不平等を求めないだけです。アランが求めているのは絶対的な神のようなものであり、平等です。名誉も勲章も平等ではありません。何故なら名誉のある人は名誉の無い人と不平等を生み、勲章を貰った人も勲章を貰えない人と不平等を生むからです。勿論、絶対的な平等はこの世にはあり得ませんが、平等の精神を生む思想はあり得ます。そのことをよく承知しているアランは、その思想を実生活の次元でも最大限に実践していった思想家であり、ジャーナリストでした。

名誉や勲章と同じ次元のものとして、官僚制度を維持し管理していくために昇進や懲罰があります。リセの教師であったアランも国家公務員でしたから、官僚制度と無縁ではありませんでした。しかし、〈専門化〉と〈世俗の力〉が寛大さと自由の無い官僚主義を生んでいるとアランは一九一二年十一月十六日のプロポで言っています。詳細や緻密さには限度が無く、小さなことに重要性を与えるようになります。直ぐに数字がものを言い、厳密に計量された社会科学となって、あらゆるものを比較して最後には〈道徳〉も支配します。その典型が世論調査であり、よく考えない判断の集積によって善悪が判断されていきますが、そこにも官僚主義の弊害が瞥見されます。(完)

紀元前八四一年頃から八三五年頃までユダヤの王位を奪い取って孫たちを虐殺させたアタリーの物語は、その後十七世紀にルイ十四世の寵姫であったド・マントノン夫人からサン・シール校の娘たちのために依頼されたラシーヌによって、五幕の悲劇「アタリー」（一六九一年）が書かれました。その文体は韻文で書かれた格調の高いものになっていますが、その中の台詞を引用してアランは一九〇七年十二月一日のプロポを書き始めています。

「〈夢よ！ 私は夢を心配するように成るのだろうか？〉。この様にアタリーは言いますが、誰もが彼女のように成ります。夢は霧や煙でしかありません。しかしながら私たちは夢によって定められて生きるのは難しく、完全に夢の様に生きるのも難しく、それは実際の生活を前もって生きるようなものです。例えば、もしも或る友人が現実眠りの中に何度も現われ、その顔付や態度が嫌悪とか偽善とか何か他に敵愾心の感情を表していたなら、私たちの友情に支障が生じるか否か、私には分かりません。その意味においては如何なる夢も現実の前兆に成って良いし、前兆に成ると少なくとも私自身の裡で変化が生じることになります」。

夢を信じる者は夢によって支配されます。夢が現実でないのなら、人間の理性はそれを現実のものにしようと努力します。しかし、夢の根拠を知ろうとしません。〈夢を持って〉と言われて子供たちは現実離れした理想の雲を思い描きますが、その根拠のことは余り語りません。何故なら、その根拠は余りに現実的理由である場合が多く、夢を語るには余りに世俗的であるからです。つまりお金持ちに成りたいとか、有名な人に成りたいことが根拠になっているからです。

「もしも夢を見て余り心を乱したくないならば、その原因を探さねばなりませんし、その原因は屢々本当に単純で自然です。或る朝、私は火の手を揚げる紛糾した戦闘に参戦した夢を見たことがあります。あらゆるものが燃え、傷口からは赤い血まで出ていました。ついに私は眼を覚まします。隣接した射撃演習場から聞えてくるのは、何発もの銃撃の音です。そして私の眼前には、閉め切った窓に半透明の赤いカーテンが引かれ、その上方には大空に弾丸が飛んでいるのが透けて見えます。これらの色と弾丸の音は、私の眼と耳から私の裡に這入ってきたのです。そのことによって私は中間色の羊毛でタペストリーが作られるように、夢を織っていたのでした。他にも何か反対のものがそれらを押し殺している夢を見ることがあります。全く単純なことです、自分たちの頭の上まで掛け布団を引っ張り上げています。もし思い出が蘇るメカニズムをこれらの原因と結び付くとするなら、夢を自然で平凡な出来事として容易に片付けるようになり、気が休まって今まで以上に具合が良くなります」。

この様にして人間が幽霊や神々を追い払うことを学ぶためには、何世紀もの時間を必要としなければならなかったとアランは続けて書いています。幽霊や神々は死者と会話をする、と長い間信じられていましたし、人間の敵は今でも脅しにやって来ます。人間を戦場へ送り出すのは、隣接した射撃演習場の銃声や〈赤いカーテン〉によって人間の裡に植え付けられていく夢のためなのです。夢の根拠は確認されなければなりません。真っ暗な階段に白いカーテンが揺れていれば幽霊を見たと思い、良く確かめもせずに自分で思い込み、その儘眠れば幽霊の夢を見ることになります。

同様に大量破壊兵器があると思えば、戦争を勃発させることにも成り得ます。夢が戦争を引き起こすようなものですし、人間を脅して宗教が幅を利かすようにも成り得ます。従って戦争と宗教は何時の時代も密接な関係がありました。平和を祈るための宗教が、何時の間にか戦争を行う当事者に成っていきました。キリスト教の聖地を守る目的で十字軍が編成されて戦いました。神国日本を守る目的で命を捧げて戦いました。あるいは現代においても聖戦のために戦っている兵士たちがおります。いずれにせよ闘いは夢によって行われているとアランなら言うでしょう。夢には根拠があると思って間違いありません。その根拠を確認せよとアランは言うに違いありません。

例えばキリスト教を信じたヨーロッパ中世の時代に、庶民は聖書の表紙を見ることが出来ても、読むことは出来ませんでした。聖書に書かれていることは、聖職者としての神父などが話して聞かせました。やがて教会は都合の良いように解釈し、聖書を独占していました。この様にして教会の権威が保持されていきました。

しかし、聖書を正しく読む運動が起こります。それが宗教改革でした。権威の崩壊が近世の始まりでもありました。権威を守ろうとすればする程、時代に逆行していきます。そして、権威を守ろうとする者は、決して正体を見せようとしません。〈神〉が眼に見えないのもそのためでしょうか。「最初の無神論者とは多分、決して夢を見ることのなかった人間だっただろうと思います」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。一九一二年十二月二九日のプロポでもアランは、人間の憎しみは心の中にあるのではなく、想像力が教会などにある燃えるようなフランボワイヤン様式の装飾と、人が憶測を働かせる中間の空間にあると言っています。そして、「人は宗教の戦争に驚きますが、その言葉の深い意味を言うなら、全ての戦争は宗教によるものです」と明言しています。

透明性は公平性にとっても必然と言えます。神の前では皆が公平であるのですから、神も透明でなければなりません。従って本当の透明性とは眼に見えないことだろうと私は考えます。何故なら、眼に見えるものは全てが不公平であることを証明しているに過ぎないからです。しかしながら見えないことは多くの不公平を生んでいるのも事実ですから、公平性とは見えないものを見ようとする努力であり、その制度であり、手続きであると思います。そして、見えないことと見ようとすることとは、大きな相違があることも重大なことであると私は考えます。敢えて見ようとしなない者は、夢の中を生きていくしかありません。（完）



土曜日の夕方になるとアランたちは、モンマルトルの市民大学を開催していました。労働者たちが集まる所で行われる公開講座は、学者が行う一時間の講演の後に色々な問題について討論が活発に行われていきました。市民大学そのものは、一八九四年から一八八九年に起きたドレフュス事件を切っ掛けにして、ドレフュス派の人々が国家主義や聖職者至上主義者たちの悪事を指摘するのを目的にして行われたようですが、アランはその創始者の一人でもありました。アランたちが開催した市民大学は一九〇七年頃にはモンマルトルで行われましたが、その後、イタリー広場へ場所を移して行われました。一流の学者が労働者や職人たちの前で行う講義は、決して学術的な内容ばかりでなく、時には特定の集団を糾弾する政治的内容になったものと思われま

す。「市民大学に見るように民衆討論は時々少しばかり疲労して仕舞うことがあるのは本当です。大声が飛び交う時に友愛の感情が目覚め、一時間の講演の後には和解する解決方法が導き出されることになります。というのも利益を共有することが最早問題でなくなると、討論は何時も雲の中にいるようにぼんやりとしてきて、抽象された観念は間もなく穏やかな静けさに支配されてくるからです」。

そして、多くの学者たちを一つの事実に結び付けるようになると、会話は直ぐに熱心に行われ、熱を帯びてきます。例えば、何故海水は塩分を含んでいるのか？ 何故独楽は回っている限りバランスがとれて倒れないのか？ 分かりきったように思える問題をよく考えてみて下さい、とアランは一九〇七年十一月二日のプロポで書いています。

彼ら学者たちが、もしも抽象的観念まで達したならば、その時は様々な言葉を使って言ったとしても、全く同じことを言っているのが直ぐに分かりますし、或る賢者はそのことに気付いて指摘し、彼らは抽象的な言葉についてしか討論しないと結論付けます。何事も全てが礼儀正しく決まり文句の挨拶で終わるようなものです。夜を過ごす気晴らしや、よく眠るための準備には打って付けです。

政治とか倫理とか宗教の問題になっても、更にまだ同じ様にやっています。何故ならアキレスのように不死身で傷付かない言葉があるからです。「私たちは皆同じ信仰を持っています。〈理想〉という信仰です」。その通りです。少なくとも一人ひとりが自分の理想を持っています。

「私たちは誰もが〈真実〉と〈正義〉を愛しています」。そうです。それらは純粋な大理石の立像としてそこに立っていますが、人々の注意を引くことはありません。「宗教しかありません。それは〈真〉〈善〉〈美〉という宗教です」。でも誰が敢えて反対のことを言うのでしょうか？

可愛い子羊たちがいるのに優しい鳴き声を出さない人がいるのでしょうか？ その後で、更に争えば利益があり何時でも噛みつく準備が出来ていると誰が信じるのでしょうか？

偏見が無く先入観も無く討論されなければならない、とよく言われています。それは明白なことですが、身も蓋も無い提案の一つです。そうではないのです。一人ひとりが素直に偏見や先入観を表わすことも良いことです、とアランは言います。偏見や先入観は、それを表わすことによって偏見であることを理解します。何故なら表明しない儘でいることは、真実であると理解した儘でいることであるからですし、「人がそれらを持って来ないで、家に置いた儘でいて欲しいと

思うことは、病人が居ないのに病院を建てたいと思うのに似ています」と書いてこのプロポを終わっています。

アランは現実世界と抽象世界の境界を厳正に判別して的確に処理しようとした思想家です。極端なことを言えば、抽象世界の真実は決して現実世界の真実ではないことを正確に判断しようとした思想家です。例えば学問領域の中において、最も抽象的なものは数学です。数学でいう直線を実際に引いて見れば、それは線ではなくて面であり、辺は曲がっていて、直線そのものは人間が抽象した観念世界のものであることが分かり、厳密に言えば現実世界で直線を眼で見ることは出来ません。正に、神のようですが、数学の次に抽象的な学問領域は天文学です。以下、順番に並べれば物理学、化学、生物学、社会学になる、とアランは抽象的なものから具体的なものへいく六つの学問領域について『わが思索のあと』（一九三六年）の中で述べています。

例えば生物学の中でダーウィンが言った進化論を、教育学や政治学や経済学のような社会学の中で当て嵌める傲慢さをアランは指摘するでしょう。教育制度において環境に合わせて変わらない者は生き残れないとか、政治制度においても社会のニーズに合わせて変わらない者は駄目に成る、と言うのは間違っているとアランは言うに違いありません。仮に進化論が正しく真理であったとしても、それは生物学の中での真理であり、数学の直線がこの現実世界には存在し得ないように、教育や政治や経済などの社会学の真理として語ることは、全てが正しい訳ではないのです。それを全て正しいことのように認識して話をする者は、「一種の専制を及ぼす」方法を利用している者であるとアランは明言しています。

同様に数字ばかりを過信して、数学の真理を社会学へ当て嵌めます。例えば、世論調査の数字のみで政党や総理大臣を評価することも、全てが正しい方法でないのは明白ですが、新聞が数字だけで評価する偏見も、偏見として表わしていることをもう少し正確に報道すべきです。例えば調査をした時間帯、地区、電話やインターネットなどの媒体の種類、相手の職業などです。在宅中の主婦ばかりを相手にした調査では困ります。最近の世論調査も、「一種の専制を及ぼす」方法であり、国民の良識は決して数字だけでは示せないことも正確に表わすべきであると私は考えます。

それにしても我が国の新聞の全国紙の数は少なすぎます。朝日、毎日、読売、日経を全国四紙というようですが、もう少し多くの全国紙が必要であり、世論調査についての討論が十分に行われない儘、偏見が恰も真実の如く報道されているのは、よくよく考えれば危険なことです。インターネットのニュースしか見ない者が増えているのも頷けます。全てのニュースが同質・同レベルであり、一面トップの記事が無いからです。一面トップを判別するのは読者でなければならず、それが本当の世論に繋がっていくものと考えます。（完）

嘘つきは真実を知らない人です。何故なら、嘘つきはよく思考しない人であるからです。よく知っていることや強く確信を持って思考したことをわざと嘘をつくことは難しく不可能でさえある、とアランは一九〇七年十一月二十八日のプロポに書いています。このプロポの結論を冒頭で言って仕舞ったようなものですが、そのような結論を書くまでにアランが思考する契機となったのは或る作家の記事でした。次のようにこのプロポは始まっています。

「私は最近、嘘について書かれた記事を読みましたがその中で、嘘つきは軽蔑されると同時に不器用でぎこちない、と実力がなくもない作家が言うておりました。その点は屢々説明もされてきましたが、その問題は解決されてはおりません。何故なら結局のところ嘘も方便ということがありますし、英雄譚の作り話の嘘もあり得ますし、過去にも色々と嘘があったからです。それに倣って言うなら弟子が下した結論は、嘘は自分自身の都合が悪いものではないとのことです。結果に意味があればその方が良いのですが、その作家が大衆の軽蔑にさらされることはよくあることです。そうなる大なり小なり不幸なことでもあります。その記事を読んでから私が自問したのは事実です。嘘の結果が、嘘つきや皆のためにあるのなら、嘘は良くないと反対して何になるのだろうか」。

それ以上に嘘は健康に良くないとアランは言います。嘘が自分自身や皆のためになるのなら反対することも無いではないかと言いたくなりますが、健康に悪いとアランは言います。人間の体にある自然な機能には、色々な活動や思考に対応していることがあります。雄弁家の動作にはそれがよく表われています。結局のところ、行うために思考することが行為の始まりでないとするなら、言葉とは何でしょうか？ アランが恐れ、逃げていくものは言葉です。アランが信用し、友情の気持ちに身も心も捧げて両手を広げて差し伸べるのは言葉です。子供が空腹になって、差し出された食べ物をさっと捕えるために頭で承諾を齎すのも言葉です。強い不安の後で最後に安心して、緊張が解けて私が溜息をつくのは、殆ど一言に過ぎませんが言葉です。話し言葉は、それ自体が肺と舌と唇の動きでしかありません。自然そのものの人間においては、肉体の動きにあらゆる思考が読めるように思えます。従って真実を言うことは呼吸したり消化するのと同じように自然である、とアランは言っています。嘘発見器が発明され得るのも当然でした。嘘をつく時は人間の体に反応があるからです。

嘘つきを観察して下さい。彼の嘘は肉体に対する闘いです。筋肉を鍛える努力は、ぎこちない姿勢を見せたり赤い顔になります。上手にやっても嘘をつくことは殆ど不可能です。殆ど何時も口ではノン（否）と言っても、体はウィ（肯）と言っています。ですから嘘をつくことは誰でも好きではない、とアランは言っています。

一つだけ十分に気をつけなければならないことは、何時も冷静によく思考することでもある、とアランは言っています。よく知り理解しないと、大変簡単に嘘をついて仕舞います。アランは自分が実際に嘘をついている間、自分が言っていることを考えますし、嘘にこだわらないでそのことを考える、と言います。そのようにして無益な嘘であるなら殆ど問題にならないのです。しかし、よく知っていることや強く確信して思考したことをわざと嘘をつくのは難しく、不可能で

さえあります。修道士たちはそれ故に、大変に重要な慣習の形式を生んでいます。肯定するものを、最後には信じようとせずに肯定することは大変に悲しく辛いことです、と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

自分につく嘘が一番辛いのです。例えば組織のために自分を偽って嘘をつくことは、神を信じていない修道士のように辛いことです。あるいは楽しくもない日々の暮しを楽しそうに偽ることも辛いことです。しかし、本当の楽しみは意志的な努力が齎す結果であると私は考えますから、如何なる楽しみにも訓練とか意志による行為が必須のようです。つまり好きであることと楽しみに成ることとは微妙に相違するようです。或る成功した実業家が私立高校の理事長に成って、生徒に向って「好きな事をやりなさい、好きなことは一所懸命やれる」と盛んに言いますが、若い時は嫌いなこともやり続けていくうちにやがて楽しく成れるかどうか試して欲しいと私は言いたいと思います。若い時は好きなことは黙っていても一所懸命出来ますが、嫌いなことに挑戦出来るのも若者の特権の一つです。例えば理解出来ずに嫌いな数学を意志の力で毎日勉強して、それを克服した時の楽しみは、恐らく好きなことをやる時以上に充実していて楽しくなることでしょう。嫌いとか好きという感情が、如何に気分的で曖昧なものであるかに気付く筈です。そして、その充実した日々の楽しみには決して嘘がつけません。そもそも若い時は何が好きなのかも見当がつかない場合が多い筈です。好きであるという感情からは色々な目的や成果が頭から離れませんが、楽しみには楽しみの感情が全てです。楽しみには楽しみの行為そのものが全てであり、その外の目的や成果は眼中にありません。正に日々を味わうことに成ります。旨くもない物を美味しいと言う嘘は、良きにつけ悪きにつけ気兼ねや下心があるものです。高雅で孤高の文化人が美食家である所以かもしれません。（完）

記憶力が良くて何でも知っている人がいます。一般的には知性があって頭が良い人であると言われるし、実際にそういう人は若い時から学校の成績も良くて高学歴の人と成り、組織や社会のリーダーになることが多いと思います。記憶力や知識において優れているのですから当然のことだと思います。しかし、人間の能力にはそれ以外のものも沢山ある筈です。もしかすると頭の回転が遅いこと、つまり記憶力が弱く知識も少なく、直ぐに言葉に出来ない人の方が優れている場合もある筈です。記憶によって受け売りされた知性ほど安易なものはない、とアランも一九〇七年十一月三十日のプロポで言っていますが、アランにとって良識ある精神は必ず働きが遅い精神です。この様に言うアランの言葉に反対したがる人々は多くの事例を示しますが、決して困ることはないと言います。

良い例が犬です。犬は正確に数を数えます。〈8〉と書かれたボール紙と、〈7〉と書かれたボール紙を犬に見せると、〈15〉と書かれたボール紙を見付けに行き、犬の飼い主である主人にそれを見せます。こんな犬に似た〈神童たち〉にはこと欠かないと言います。そして、〈15〉のボール紙を示す犬には角砂糖が用意されていました。

アランも三歳半の頃に韻文で書かれた寓話を朗読しました。「ガスコーニュ地方の狐とノルマンディー地方の狐がおりました」云々。アランは調子を合わせながら上手に朗読しました。三歳半だったアランは如何に朗読すれば良いのかを知りました。賢い犬が正しい数字の書かれたボール紙を銜えて来るように、上手に朗読することは大変なことだと思っていませんでした。その犬のようにアランは偉そうにしていました。そして、その犬のようにもっとはつきりと理解出来たことは、犬が貰う角砂糖もそこにあったということです。

そして、アランは体中に角砂糖を持つようになりました。それはバカロレア（大学入学資格）であったり、その他に色々なものであったりしました。しかし、それらはアランが自発的に言ったりやったものは僅かで、やらねばならない雰囲気があったのであり、どれもが同じやり方でした。しかし、アランが自ら大いに望んだことは、誰も決して追い立てたりせず、頭の回転を早くしないことだったのです。

「そして、一度ならず私（アラン）が自分の方法で限りなく続く苦しみとともに問題を解決させようとしていた間に、人間の顔をした賢い犬が私の耳に囁くのでした。〈だから悪あがきするなよ。もし砂糖が欲しいなら、ちょっと行って、ご主人様の処へ持って行かねばならないボール紙はそこにあるよ〉」。

このプロポはここで終わっていますが、人間にとって最も重要なことは頭の回転が早く、やるべきことに直ぐに気付き、気が利いて機敏に働くことが出来て、重宝されることではありません。気が利かない人間も立派に社会のために働くのは十分に可能です。機敏であることよりも、愚直に継続させていく努力の方が極めて大切です。錐のように筋道だけを付けて無責任にもさっと身を引いていく処世術に長けた者よりも、槌を打ってその場を長く確保している者の方が重要な役割を担い、立派な働きをしていると考えます。

勿論、より良い社会を築くための改革を行うためには、錐のように鋭い頭脳の持ち主による筋

道は必要ですが、実際の改革とは〈筋道〉のことではありません。机上の論理や計画が〈改革〉ではありません。改革とは常に人民とともに行われるものであり、人民が築いていく社会制度の修正でなければなりません。この様な思想には貴族よりも労働者が重要で、ブルジョワよりもプロレタリアが重要である、というのがアランの思想です。「本当の賢者は偉大な労働者です」と一九一三年六月十日のプロポで書いていますが、その前にアランは次のように書いています。

御機嫌をとるブルジョワや、雨が降ることを祈る農民よりも、人に好かれようと気を使わない靴屋は精神的独立を確実に保っています。靴の製造方法を知っている者は、お金を出す者の御機嫌を取る必要がありません。道具と事物で行うことが全てであるからです。この仕事には礼儀も気まぐれも無いからです。観察して克服しなければならず、敬意は要りません。それは事物への訓練であり、操作であり、そして神々の威信を奪うことです。だんだん勝利してくるのは英知であり、それは鍛冶屋や仕上げ工や運転手のものです。反対にブルジョワの仕事には奇跡があります。何故なら話し上手な人は、買うつもりのないお客の気持ちを混乱させるからです。しかし、労働者の仕事に奇跡は決して無いのです。ブルジョワは気に入られることが正しいことになり得るのですが、労働者は知ることが正しいことになり得る、とアランは書いています。

そして、「農民は待つことを覚えます。忍耐、それは農民の美德です。希望、それはブルジョワの美德です。意志、それは労働者の美德です。」とアランは結んでいます。近年の我が国には、為政者に強いリーダーシップを求める人が多くいるようですが、本当の強い意志は労働者になくはならないものです。政治家というブルジョワは希望を与える者のことであり、記憶力や知性よりも、人民に気に入られる努力をする者であることを忘れてはなりません。（完）

## 六十九 死を思考すること

人間は死ぬと二十一グラム程軽くなり、その重さは肉体から抜け出た魂の重さになると言ってもよい、と米国のユダヤ人小説家ポール・オースターは書いています。肉体から魂が抜け出た時が死であるとするなら、肉体の中に魂が存在している時は人間が生きている状態です。人間はその様な状態にいる時に、誰もが自分は死ぬことがないと考えるのはやむを得ないことです、何故なら死は全く不可解で想像することも出来ないからです、とアランは一九〇七年十二月三日のプロポに書いています。

それでもアランは自分が死ぬことを思考する時、自分が過去に見たもの、自我と言う何者かの話、そして自分に似たものを描くことによって想像します。瀕死の病人になり、死んで埋葬されるのを想像します。自分の葬儀に参列し、葬列に加わってついて行くのが分りますが、その状態は何らかの方法で再び生きている自分自身であることに気付きます。

アランはもっと遠くからこの状態を見ています。そして、この世をすっかり変えて仕舞います。人間が行った仕事の痕跡を地球上から全て消します。大気も水も無く、既に冷めた太陽の周りを回っているのを想像します。何時でもアランは目撃者です。或る星に住んでいて、何時も思考していて、それ故に何時も生きている自分を想像します。

死と似ているものとして眠りがあります。眠りは死の兄弟であると言われていています。眠っている時は、如何なる思考も生まれません。アランが子供の頃、眠っている時でもその瞬間を理解しようとしたことがありました。そんなことばかりしているアランは、一度ならず何度も目を覚ましました。眠っているのを認識するには、目覚めていなければならないのは明白です。ですからアランの眠りは、実際には自我の全てではありません。少なくともアランが眠っていたことを推測するには、誰か別の人の証言や客観的な外部からの徴によるものでなければなりません。

その後でアランがよく理解したことは、人間は死後に快適な暮しが保証されていると時々考えて、墓の周りをさ迷いながらあの世へ行く自分の姿を見ない訳にはいきませんでした。この幻想をよく理解した者は、魂が永遠であることを何故何時も証明してきたのかを同時に理解しますし、従ってその証拠が不十分な時は何も証明しないことになるアラン言います。アランの死は、自己にとっては何物なりません。もし死を考えたとしても、実際には自分とは別の人の人生しか考えられません。この様にして逃れられない幻想の自分をその鏡に見たと思っても、アランは自己を思考する瞬間に自分が生きているのであると考えます。それはもし地下室の中が真っ暗であったならば、ランプに灯を点けて見ようとする愚か者のカリーノに似ています、と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

ゴンクール兄弟の喜劇の登場人物である愚か者のカリーノはアラン自身であり、ランプに火を点けて見ようとしなない者は、人から言われた儘に理解した方が快適な暮しが保証されるのかも知れませんが、アランは火を点ける行為が愚かであっても、それが生きていることであると思えます。ランプに火を点けない者は眠っている者であり、ひいては死んでいる者と同じです。そういう意味でいくら快適な生活を送っていても、この世の真実を自分の眼で見ようとしなない従順な宗教法人の信者たちは死んでいるのも同然です。

実際にアランは一九五一年六月二日に八十三歳で亡くなり、同月六日にパリ二〇区のペール・ラシェーズ墓地に埋葬されましたが、当時はリセの生徒であり葬儀にも参列したというアラン研究所長のロベール・ブルニユ氏は、アランの魂を見た者の一人であろうと思います。アランの著作を研究し編纂し続けてきたブルニユ氏の仕事は、今でもアランは生きているように思えます。ブルニユ氏は自分の眼で見ているのであり思考しています。我が国がアランの思想を未だ十分に受容し切れていない面は多く残されていると私は考えます。真っ暗な地下室で火を点けずにアランを読んでいるのであり、その思想を論じてきたのだと思います。アランを死者にしないことが我が国の社会にとっては極めて有効であり、恐らく成熟した民主主義社会を照らす貴重な光になり得ると信じています。恰も十九世紀後半に日本の浮世絵の手法を受入れた西洋絵画に見るジャポニズムのように、あくまで個人の自主的な思考を尊重するアランの政治思考は我が国に最も不足している側面であると思います。

例えば旧国鉄のストライキを社会秩序にとっての弊害と見做し、民営化と称して株式会社の管理に押し込めて行き、個人の自由な思考の表現に制限を加えた政策がありました。あるいは組織や社会の秩序というものを余りに過剰に優先してきた結果、利益分配が極めて不公平になって格差社会が助長され、倫理的退廃が進展している現象が挙げられます。正義（Justice）とは公平のことでもあります。従って不公平を実感する処であればあるほど正義は不在であり、人々は公平を求めます。恐らく、公平を求めない者には正義も喪失しているだろうと思われれます。そして、そのような社会の中から死を思考することは誰にも出来るのであり、その行為は公平であり、正義の始まりでもあります。（完）



道は何故出来たのでしょうか。道は町へ行くために出来たのでしょうか。そうではありません。何故なら町が出来る前から道があったと言う人がいるからです。よく理解しなければならないことは、町が道筋に沿って形成され、沢山の人がいたという原因の結果として道が出来たということです。道を切り開いた最初の人々は、正確に目的地を定めていたのではなく、そのような場所へ行くつもりもありませんでした。彼らは災難や事件から逃げたのです。洪水とか火事に追いついて立てられていたのです。あるいは羊の群に付いてもっと遠くへ行き、牧草地を刈っていたのです。彼らは小川や大河に沿って行きました。時折り咽喉が渇いたからです。夜が来れば野営し、雨や風を凌げる場所を探しました。良い場所を見付けるために彼らが気を付けたことは、絶壁の上から石が落ちて来ないことであり、傾斜地を水が流れて来ないことでした。彼らはやがてその場所へ行くつもりになり、何度でもその同じ場所へ戻って来るうちに道が出来てきます。従って自然に出来た道は、町へ行くために出来たものではありませんでした、とアランは一九〇七年十二月十三日のプロポに書きました。

成功した起業家、優れた研究成果を残して有名になった学者、オリンピックや世界大会で優勝したスポーツ選手たちは、自分の好きなことをやれ、大きな夢を持って、目標に向って真っ直ぐに進め、と若者たちへ励ますつもりでよく言います。結果が良かった人が言うのですから、若者たちはその言葉や考えは正しいものと思って仕舞います。栄光は町にあるから、自分が歩むその道も町に行くためにあると錯覚します。確かにその道を歩めば町へ行けます。しかし、町はその道よりも後に出来たのであり、その道が出来た最初の原因は町へ行くためのものではありませんでした。何時でも水が飲めるように小川や大河に沿って道は出来たのであり、雨や風を凌ぐ安全な場所が原因となって出来たのでした。〈小川〉や〈安全な場所〉という原因のことを忘れてはなりません。道を進んで行く行為としてのプロセス（過程）を目的とすることを忘れてはなりません。つまり〈現在〉の目的が大切であり、〈未来〉の本当の目的はプロセスとともに新たに生れてくる側面もあるのです。それは文章を書く者にはよく理解出来る行為であり、独創的な研究を実践する者たちにもよく理解出来ることです。文章を書く者は、書く行為に従って新しい考えも創出されてきて、新しい作品に生まれ変わります。研究者の目的も当初から定められたものではなく、研究をしているプロセスの中から新たな発見が見付かるものです。取分け、基礎研究には何の役に立つかわからない儘に、〈現在〉の発見の積み重ねが〈未来〉の目的を作り変えていくものと考えます。新しい道が作られていきます。

「新しい道を残していきなさい。しかし、新しい道のことを私（アラン）は自問しました。新しい道というものは古い道に代るものですし、新しい道が出来るのは何時も理由があります。古い道が泥だらけの泥濘であったり、大変に急な坂道であったり、雪崩や地崩れにやられていたりしたために、新しい道が出来たのです。新しい道は平らにするために高低測量の方法で、道具も使用して作られました。何時も後を付いて行く者は、先行する者次第です。自分の穴を作るモグラは、石があると迂回します。モグラは技術者です。惑星が引力に引き付けられ、物体が落下するのも同じで、自然に沿っているのです」。

以上のように書かれてこのプロポは終わっていますが、アランにとって、結果ばかり見て原因や理由を探求しないことは、一般的には大変な間違いを犯すことが多く、直ぐに怠惰になると言います。そのことに気を付けるためには、自分自身の監視を多くしなければなりません。そうでないと他人へ注意を向けてばかりいて、充実とは疎遠の不毛という罫に落ちることになります。

競争には〈外なる競争〉と〈内なる競争〉があると私は考えます。結果ばかりが気になって他人と比べることばかりしていて確率的には五〇%が敗者に成る〈外なる競争〉と、結果が生れる本来の原因を忘れずに自分を少しずつ前進させるための努力に楽しみを見出し、そういう意味では決して敗者のいない〈内なる競争〉です。〈内なる競争〉は、正に生きがいを保証してくれます。私はそこに生活のコツのようなものを感じています。それは初めて自転車に乗れた時のように、言葉で人に教えたくても教えられないものです。自転車の乗り方は、いくら言葉で説明しても理解されないように、それは実際に自分でやって感じてみなければ絶対に理解されません。コツとはそういうプロセスを悉皆了知することでもありますから、道を歩く旅人の楽しみに似ています。そしてコツを掴むには、怠惰な儘で何もやらないという選択肢はありません。先ずは歩き出すことが大切です。（完）

短い言葉で国民性を定義することはよくあります。所謂ステレオ・タイプによる見方です。それが間違っているか否か、と問うならば、多くの場合は全てが正しい訳ではないと言うに違いありません。しかし、ステレオ・タイプは全てが間違った見方でもありません。ものの見方を整理するためには、大変に役立ちます。大きくて立派な赤いトマトを買うために、果物屋へ行く人はおりません。トマトには色々なトマトがあり、ミニトマトもあれば黄色いトマトや白いトマトもあります。それらをトマトという野菜に無意識にステレオ・タイプ化していますから、私たちは八百屋やスーパーの野菜コーナーへ直進することが出来ます。物事を一つの観念や言辞に抽象化することによって、物事を整理して見る事が出来ますし、思考することも行動することも可能になります。しかし、大きくて立派な赤いトマトを、他のトマトと識別しなければなりません。この努力も正しい見方や思考や行動にとって大切です。戦争を始めようとする者は、敵国をステレオ・タイプ化して、短い言葉で抽象します。一九四一年に米国は日本を八真珠湾を襲った卑怯な国Vと見做しました。あるいはそれ以前の日本も、台湾や朝鮮の言葉や文化をそのまま尊重することなく認めようとせず、日本文化への同化政策を推し進め、言葉や名前を日本語化し、日本語教育に熱心でした。いずれの場合も国民をステレオ・タイプに見る必要があり、見方も思考もそこに停滞させることで可能な施策であったと言えます。

二十世紀初めのフランスでは、アメリカ人は企業家、ドイツ人は軍人、イギリス人は植民地化する人、と言われていたようです。一九〇七年十二月十九日のプロポは、ステレオ・タイプの利点を超えて、個々の特性を理解しようとする急進であることの必要性を説いています。

「... (中略) ...私 (アラン) は理性的人間が如何にして国民の精神的な姿の肖像画を思い切って創り上げるのか分かりません。私はそれを個人のためには行うつもりは ありませんでした。キャンディー袋を開ける時のように、私が一番良いものを知っ ても、テーブルの上でその中身を広げて見せることが出来るのは一つではあり ません。或る日勇敢だった人間も、翌日は野兎のように臆病になります。人は物を 盗んではいけないとか、誓いに背いてはいけないとか、地位や出世のために決して 卑劣になってはいけないとよく言われます。そのことが言えるのは、そのことを信 じているからでもあります。しかし、そのことが絶対に正しいとは認めません。誰 でも余りに曖昧な感情を表すことは、科学のようにはいきません。誰が自分自身を 底の底までよく知っていると言えるのでしょうか。自分と同じくらいに隣人をよく 知ることも決してありません。知っているどころではなく、何も知らないのと同じ です」。

個人の本質を説明することは困難です。アランが言うように勇敢な時も臆病な時もあるからです。しかし、少なくともフランスは個人の権利のために逸早く戦った国であり、一七八九年のフランス革命当時は本当にそうであったと言えますが、ナポレオン皇帝軍がイタリアやスペインやドイツに進軍し野営しに行った時代は、物事を大筋で見ると違ってしまうように見るとアランは言います。ドイツの社会主義者たちは、権利やユマニテ (人間性) について全てをフランス人と全く同じように考えましたし、書きもしました。国が平和になると乱暴者、野心家、けち、高利貸、浪費家、詐欺師、憂鬱症患者、狂人たちが出るようになります。平和になれば人間も善良に成

る訳ではありません。又、地方によっても違います。スコットランド人とロンドンの住人とは違いますし、トゥールーズ地方の人とルアン地方の人も違うとアランは想像して言います。家族の中にも、けちと浪費家、内気な人と情熱家がおります。それなのに家族の精神とか家族魂を敢えて定めるのは誰でしょう、国民の魂を語る人々はそれ故に事物や人々を見るのに如何なる霧を通して見ているのでしょうか、とこのプロポを結んで、アランはステレオ・タイプの見方に疑問を呈しています。

自己開示をするためには四つの側面（窓）があると言われていています。自分が知っていて他人も知っている側面（開放の窓）、自分が知っているが他人が知らない側面（秘密の窓）、自分が知らないが他人が知っている側面（盲点の窓）、自分が知らないし他人も知らない側面（未知の窓）の四つです。〈ジョハリの窓〉と言いますが、やはり盲点の窓と未知の窓に気を付けて、自分が知ることに努力し、そのための思考の訓練を継続していく必要があると私は考えます。何故ならもしこの訓練を怠った時は偏見を生むことになり、差別が行われることになって、正義を喪失した不公平な国になっていくからです。アランが国民性の譬えにキャンディー袋のことを書いていますが、ポストモダン以後の社会の特性として〈メルティングポット（坩堝）からサラダボウルへ〉と言われていています。キャンディーやサラダが各々の味を失わないこと、つまり個々の特性を保持し続けていくことが現代社会の優れた側面でもあります。アランの先見性と急進性に私は改めて瞠目するばかりです。（完）

## 七十二 小猫の努力

如何にしてドアが開くのかを小猫は知ります。誰かがドアを開ける前に、一寸したことが先ず行われるのを小猫は気付きました。ドアのノブに腕が近づき触りました。そして次に錠が軽い音を発して、ドアが開きました。これで小猫も台所で悪戯をしに行くことが出来ました。

小猫は如何にしてドアを開けるか知りませんでした。少なくとも錠の小さな音を立てることは出来ました。ドアへ飛んで行ってはこの音を立てていました。そうして或る日、小猫はドアが開くのを期待してドアのノブの方へ飛びつきました。何時もの音がして、ドアは開きました。

それ以後、小猫は何度もドアのノブの方へ飛びつくと殆ど何時も同じ音がして、ドアが開きました。そのことを見たり聞いたりしていた人々は、それは何かの前兆ではないのかと思いました。

しかし、もっと良いことがありました。田舎にいる小猫は台所のドアの掛金を下から上へ跳ね上げていました。その日も下から上へ跳ね上げていましたが、全くの偶然から直接そのことが分かり、人間のようにドアを開けました。そして、もう当然の様子をしていました。子猫はドアを開けさえすれば良く、その方法については悩んだりしませんでした。鉄の掛金と同じように銅の掛金も跳んでドアを開けます。

以上は一九〇七年十二月二十二日のプロポの前半の内容ですが、小猫にとって大切なのはドアが開くことにあります。ドアが開いた偶然を自らの努力の結果として自慢することもなく、目的は他にあります。台所で悪戯をすることが目的でしたから、他の方法でドアを開けることを考えようとしません。ところが人間は、色々な方法を選んでいきます。選ぶことから科学が生まれたとアランは言います

「このようにして恐らく人間は色々な機械を知り、梃子というものを知る前は、時折は折れた枝を上手に使って物を動かしていたのでしょう。それは少なくとも奇跡でしたが、うまく成功しても余り満足しないで、色々な方法を選んでやっていました。この選択するということから科学が生まれ、人間は今まで猫を支配し、馬やライオンを支配していますが、それはこの些細な考察をやってきたことが原因です。成功は、物事の全てではないといえます。何人もの人間が小猫のようにやっておりますが、ドアが開きさえすれば最早長い時間をかけて探求しません」。

この思想は終生アランを変えることはありませんでした。ドアが開けば、その成功が全てになって、他の方法を探求しない小猫の努力は、小猫のレベルで停滞します。新しい叡智も生まれません。人間に進歩というものがあるのなら、やはり多くのことが選択出来る処にあります。そこからあらゆる可能性が生まれてきます。一つの成功は、他の成功を生まねばなりません。

入学試験というものは、この〈他の成功〉を生まれにくくしています。多分それは入試というドアが開けば、他の方法を思考しなくなって仕舞うからでしょう。長年アランが哲学の教師として教壇に立っていたリセ（高等中学校）のアンリ四世校は、高等師範学校への進学者数がライバル校のルイ・ル・グラン校より少なくなっていたようですが、そんなことでアランの思想や授業内容が変わっていくことはありませんでした。アランの教室には何時も近所のソルボンヌ大学の学生までも聴講しに来ていて一杯でした。面白い授業は必ず人気があります。何故なら、新し

い考えや見方を知ることには感動があり、自らの思考に選択の道が増えることは楽しいからです。

楽しいことの醍醐味を知る者は、決して結果が全てでなくなりません。譬え結果が良くなくても、そのプロセスが充実していますから決して後悔や挫折がありません。入試のための勉強が楽しくないのは目標や目的が決定していて、更に解答も決まっている場合が多く、決して選択する方法が無いか、あるいは少ないからです。選択することが無ければ自分で思考する必要も無く、従ってドアが開けられなかった小猫のような受験生には苦渋と悲惨ばかりが残ります。しかしながらアランの教室の生徒たちは、入試に失敗しても生きて行く知恵が身に付いていますから、沢山の選択を見出すことでしょう。高等師範学校へ入学して、リセの教師に成るだけが人生ではないと気付きます。

私は最近、伊藤喜之著『バカでも年収一千万円』（ダイヤモンド社）という本を読んで、痛く心に残りました。自分をバカと言う者はそれ程バカでないのは明白ですが、決して高尚とはいえないこの本が、人間の幸福について実に多くの選択の幅を与えてくれています。アカデミックな知識だけが感動を与えて人を動かすのではなく、精神の姿勢とか態度が人々に共感を与えて信頼を勝ち取っていく事例を幾つも教えてくれています。極めて独創的な思考であり考え方だと思いました。一例を挙げれば、尊敬する人から海外旅行に誘われたら、何処へ行くのかも分からないのに即決して承諾する、とのこと。一見、軽薄そうですが決してそうではなく、深い考えがあつたことでした。つまり時間をかけて考えた挙句に後日承諾しても、誘ってくれた人には嫌々行くように感じられて余り面白くないでしょうし、逆に断われれば、時間をかけて考えた挙句に断わるのですから、誘ってくれた人との人間関係は決定的に疎遠になります。いずれにしても人間関係における選択の道が少なくなりますから、即決して承諾するのが良いとのこと。本当に都合が悪ければ、正直に事情を説明するそうです。大概殆どの人は納得してくれるようです。小猫のように結果のことばかり考える人には、余り生まれてこない発想のようです。（完）

モリエールの戯曲「人間嫌い」の主人公アルセストは、潔癖であるがために正義感も強く、何時も不平を呟いているようですが、そういう人は今は健康でも、やがて将来は胃の病気になります。不平を何時も言っている人間は、ストレスも溜まってやがては病気になって仕舞いますから、自分の意志で不平を解消しなければなりません。先ずは強情にならずに、緊張の糸を切ることです。本質を究明する判断力は人間に穏やかさを与える、と哲学者たちが言っているのは多分本当です。しかし、終始一貫した考察は穏やかさというものを取り除くことによって開始します。それは多分、行為において理念を失わせている激しい欲望に執着します。そして、あらゆることが複雑で、直ぐに全てのことを疑うので現実に戻って強情になり胸が締め付けられます、と言うアランは、譬え話を言っているのではなく、本当に胸が締め付けられるのです。何故なら、冷静で慎重で物ともしない人間の視線は、頭の中で本を読みたがって、現実に行くことを妨げるからです。全身が緊張して息が切れると自由でないのも同じです。十分に消化が行われなかったならば、言葉や態度や行動においては多くのことに無頓着にならなければならないとアランは一九〇八年一月四日のプロポに書いています。

フェンシングが下手な人は、床に立つと筋肉が強張って硬くなり、歯を食いしばります。自分自身に不利に働き、その結果非常に疲れるようになって何も出来なくなり、更に攻撃は重くなって不器用です。フェンシングの老先生はその人に適切で見事なことを言います、「あなたの手は小鳥のようになって欲しい」。この教訓は床の上での行動や心構えについて極めて壺に嵌った言葉であり、水兵たちも思慮深く言っているように、仕事によって忍耐強くなった者たちや海上ではあはあ息をついているようでは駄目なことを良く知っている者たちが、よく言っていることでもあり、放って置かねばなりません。

従って疑念を持って微笑して手を差し出して、握手をするのも悪くありません。彼にとっても相手にとっても良いことです。しかし、その生徒はアランをそこに立ち止まらせて叫びます、「いいえ違います。嘘を付いてはいけませんし、偽善者であつてもいけません！ 私はあなたと同じ様に無邪気だった年頃が残念です。でも何でも私に思考することを教える必要はないということです」。そして、アランは最後に次のように言います。

「もう一度、もう少し沢山考えて下さい、友よ。もっと遠くを見て、もっと良く吟味して下さい。人間には美しいものと醜いものがある、混じり合っていることを考えて下さい。人間は自分しか愛さない、とあなたは言いましたが、それであなたは何が分かるのですか？ そして、彼があなたにそのことを言う時も、彼は何を知っているのでしょうか？ あなたと同じように彼の中も全てが闇です。あなたの光は或る小さなものを見せてくれますが、闇の儘です。よろしい、もしあなたが真の懐疑に到達したなら、愛することも微笑むことも出来ます。雷を鳴らすジュピターを罵ってはいけません。あなたは彼が何をやるのか知りません。彼も自分が何をやるか分からないのです」。

この様にしてこのプロポは終わりますが、実は核心を今まで触れずに置きました。それは冒頭の一行目に書かれています。つまり「挨拶は健康法の一部になります」。人間には美しい部分も

醜い部分もありますから、何時までも変わることのない不変の本質というものは闇の中です。何時も本質を曝け出して本心だけを言っていれば、ぎこちなくなつて何時も緊張していなければならなくなります。フェンシングの下手な人と同じです。正義感の強いアルセストが、何時も不平を言うのと同じです。何時かは胃の病気に成って仕舞います。

そんな危険な目に遭わないために、挨拶が必要になります。気軽に声を掛けることが大切です。何を考えているか分からない、と言われることは危険ですから、挨拶をして、健康やお天気や食べ物のお話をすれば殆どの場合、人となりを理解して貰える筈です。そして、〈小鳥のような手〉に成れば、緊張も無くなり胃の病気に成ることもないでしょう。本質とか本心というものは自分でもよく分からない場合が多いのですから、先ずは健康のことを考えることです。そして、幸福に成ることも同じです。自分自身の裡で幸福のことを考えてばかりいても、決して幸福に成れません。幸福とは考えることではなく、行為の裡にあるというのがアランの思想です。死の恐怖を「神の恩寵として待ちうけていた者の隠者たちが、百歳まで生きたことは、ぼく（アラン）にとって驚きでもなんでもない。...（中略）...この長寿の原因はおそらく、彼らが死ぬ恐怖を感じなくなったからであろう」（神谷幹夫訳）と一九二一年九月二十八日のプロポに書いているように、挨拶をして無邪気であることが健康の秘訣でもあるようです。「騎手は怖いと思ってかたくなると落馬する」ようであり、落馬しないで生きていくためには〈無頓着〉になることをアランは勧めています。（完）



公式のレセプション、視察、わざとらしくて退屈な会話、コーヒー、演劇そしてトランプ遊びについて、無駄に人々が大変苦勞しているの言うことは極めて容易です。暇な時間を使って規則正しい仕事をするには、多少なりとも賢明であると理解しなければなりません、と一九〇八年一月八日のプロポをアランは書き始めます。

人は何時も働くことが出来ません。そんなことは十分に分かっています。最も強く集中した注意力が、十分間だけでも新しい問題に行使すると、直ぐに鈍くなります。ですから賢明であるためには、休みをとらなければなりません。でも如何すればよいのでしょうか？ 私たちの思考は、街路のガス灯のように鍵を回して消す訳にはいきません。思考を止めたいと思う時は籠の中のリスのように、前進しないで正にくるくる回り続けている時です。

幾つもの行為の次に続く無益で果てしない討議や熟考を、世界中の人々は経験から分かっています。全てが行われて仕舞うと、エンジンを切りたいのですが、容易ではありません。動機を言い反論し、その解答が列をなしてやって来て、通り過ぎ、又やって来ます。同じ議論が頭の中で鳴り響き、屢々眠って仕舞うまでになります。休む場所もなく、岩を絶えず持ち上げていくシシユフォスの拷問が思い出されます。そのような想像力の行使は健康に悪いのですが、それだけ益々その拷問を宣告される個人は、豊かで教養のある精神の持ち主なのです。

ですから本当の休息をとらなければなりません。労働したら眠らなければなりません。そして、面白くもない天気の話や多くの政治の公式見解が余儀なくそれらに従っていきさえすれば、想像力を少しずつ眠らせるには大変に打って付けです。そして、それらの儀式で演じられる役が私たちにあるとすれば、礼儀正しく野心を追うことです。もし不作法でなく、いい加減でないことを望むなら、注意深く聞いて物分かりが良くなければなりません。それは難しいことでもなければ、疲れることでもありません。それはたっぴりと時間を使って、次から次へと瞑想することを予防して守ってくれます。それ故に眠るためには、小さい時にやったように橙花油の香りを嗅ぐことよりも、寧ろあなたはちょっとの間ですが、一時間位は駆引きの巧みな外交官になることです、とアランは書いてこのプロポを終えています。

〈駆引きの巧みな外交官〉は心理的やりとりを止めて、会話や食事を通して相手に余分な警戒心を解き、緊張させません。安心と信頼は人を休息させてくれます。気が置けない友人との会話や食事が健康に良いように、警戒心や緊張の無い会話や食事も、新しい健全な関係や協定には有効であり、猜疑心や検討や疲労感の無い休息と同じものを齎します。

従って、人は何時も働き思考していることが最良ではありません。余分なことを考えずに行うことが大切な時もあります。幾ら考えても正しい結論が分からない時は、〈礼儀正しく野心を追う〉ことが最善の方法になります。決して大声で怒鳴らないことです。決してあれやこれや批判したり、推測しないことです。母親の愛を批判したり推測しても、決して母親の本心そのものが理解出来ないように、休息の奥義も決して理解されることがありません。何故なら休息には思考も言葉も要らないからです。それらの思考や言葉が行使されると休息にならないからです。意識することなく自然に行うことは礼儀正しさの特徴の一つでもあり、無駄な言葉を使う必要

も無く、余分な緊張を湧出させることも不要です。つまり自然な会話、自然な物腰、自然なユーモアが休息に必要です。妄想や瞑想に明け暮れる頭脳の持ち主には、ユーモアの精神が欠如しています。真理の糸が絶えず張り巡らされて、気が休まる時がありません。蜘蛛の巣に掛かる餌食を待つ蜘蛛のように、絶えず成果を待ち望む者たちに休息はありませんから、自分以外には誰にも信じて貰えません。自分だけを信じる者は周りを見ようとしません。自分の力を信じて全速力で疾走するランナーは、前方のみを見るだけで周りを見る余裕がありません。走るのを止めてみてください。すると応援する人々や周りの状況がよく見えてきます。相手の気持ちや思いを理解するためには、自分は走るのを止めて休息することです。籠の中のリスに成らないで下さい。

毎週、日曜日や土曜日に休む意味もそこにあると思います。肉体的疲労回復も目的の一つでしょうが、それ以上に休日は共に生活する家族の声を注意深く聞く機会を持ち、家族の意見を理解して〈物分かりが良く〉ならなければならない日でもあります。そういう機会を失うと、お互いに何を考えているか分からない断絶が生じて、家族が家族でなくなります。そんな時は〈たっぴりと時間を使って〉旅行へ行くとか、家族と一緒に食事をする事で、〈次から次へと瞑想することを予防して〉くれます。それはフェンシングが上手な人の手のように、無駄な力を抜いて自然に素早く動かせることであり、難しいことでもなければ疲れることでもない、とアランは言っています。(完)

## 七十五 電灯の明かり

フィラントという魔術師の男性は仕事部屋に這入って、電気のスイッチを回し、部屋を明るくします。続いて本棚から本を選んで、机の前に座ります。そうかと思うとクリスタル・ガラスできらきら光る天井から照らす大変鮮やかなその光を消して、それと同時に緑色の傘でぼんやり光るランプの火を点けます。こうして魔術師の能力を試す前にアランに言いました。「私は現代が好きです。現代の産業が好きです。全てがすっきりとして綺麗で単純です。今まで使っていた古いカルセルランプは今、屋根裏部屋にあります。軋むような音やぜいぜいという音は、もう聞かないで済みます。カルセルランプの傍にいなくても良くなるや否や、鼻先で嗅いでいた不快な煙ともおさらばです。こんな風にして室内での仕事は今まで以上に早く片付き、本も読めるようになって、落ち着いて考えることも出来ます。今の光は、自分が移動しなくても何処でも明るくしてくれます。やる事が迅速で素直で無口な奴隷が私に在るようなものです。私にも構うことなく、奴隷も耐え忍ぶことがなく、食べることも眠ることも必要ありません。進歩の結果、私はより幸福になり、不愉快なことが少なくなりました。私は主人になりますが、決して奴隷を持ちません。最近の生活は快適です」。

アランは彼に言いました。「フィラントよ、あなたが在る此処は劇場みたいなものです。あなたは舞台装置より向こうへ行きません。舞台の下で働く道具方の人々のことは知りたくないのです。でも私は彼らのことを考えざるを得ません。電線はすべて彼らがいる所から来ていません。最近、私は火花を出した事故で二本の指を失った電気技師のことを知りました。何人もの人々が配線のために働いており、それらを点検して修理するために毎日働いております。電線の端まで見に行ってください。蒸気機関車が力強く働いているのが分かりますし、それは五百メートルの豎坑から採掘されて、やっとの思いで此処まで運ばれて来た石炭を使用しています。ハンドルや巻きわくが回って中にいて、或る人は恐ろしい火に照らされ、他の人は火花やベルトや歯車装置によって四六時中危険な目に遭っています。明日の夜明けには約百人位の人が、そこで操業される機械を作るために、煙や埃にまみれていることでしょう。フィラントよ、電灯が点いている時は、眼に見えないが多くの人々があなたを支えているのです。彼らは犬のように、いや犬よりも優れてあなたの行いを助けています。しかし、神経質といえる技師長は、あなたと彼らの間に壁を幾つも設けました。あなたにはそれらが見えませんが、聞けませんし、その存在も忘れません。しかし、あなたが満足感を抱くには大切なことです。何故なら、あなたの心が優しいのを私は知っているからです。もしあなたの家庭がランプを使っても申し分のない生活が成り立つのであるなら、あなたは十分前にその技師長へ電気の使用を節約するように言うに違いありません。〈パブティスト派の人は、眠りに行きなさい〉と」。

以上は、一九〇八年一月九日のプロポの全文ですが、アランの思想は無駄使いを決して認めないものでした。東日本大震災後の我が国が節電や節約を呼びかける一世紀前に、アランは電気が如何に多くの人々の力によって成り立っているかを指摘していました。それは現代のエコロジーの思想に似ており、社会全体とか地球全体を前提として考えるものであり、決して景気対策とか国際競争力を前提に思考するものではないようです。

利便性は一時の幸福を齎すかもしれませんが、何時までも続きません。何故なら次の更なる利便性が必要になってくるからです。それは際限がなく継続が不可能であるからです。逆に、利便性を求めず、あるいは利便性を必要としない幸福は、その継続を可能にするための満足感や充実感が湧出してきます。機械を使わない農作業にも満足感があり、自力で登る登山にも充実感があります。電灯の明かりを消して節電に努力したり、利便性を求めない生活にもそれに似た満足感や充実感があります。つまり何時までも消えることのない楽しみが保証する幸福感があります。

〈外なる競争〉に明け暮れる者には分からない感情で、正に〈内なる競争〉を行う者のみが満喫する幸福で、内需拡大とか国際競争力へも直結しないものようです。それは宗教家であれば理解出来る特異な経済理論になるのかもしれませんが、創意工夫の無い劣悪な平等主義者たちの理論とは異なるものであると言えるのは確かだろうと思います。（完）

もしもアランが勲章を授けられる年齢になって、皆がお祝いに来てくれたならば、何故なら何でも起こるのですから、アランは次のように言うだろう、と書いているのが一九〇八年一月十四日のプロポですから、賞についてアランは如何に考えていたのか、少し長いですが引用してみます。

「名誉とは大変に重い言葉で、大変に偉大なことです。でも私は公共のために血を流してきませんでした。ですからあなた方は、私が本当に弱くて欠点だらけであるのに、純粹に内なる英雄主義や稀有で貴重な美德を見たがっていると私は思います。私にも良心の呵責があることを敢えて言います。私の人生とはそういうものであり、そのことをあなた方が知らないことを私は知っていますし、私の人生は完璧ではありませんでした。一度ならず私は感情の勢いから花咲く小道へ足を踏み入れ、暗黒の絶壁の淵まで行きましたが、そこへ落ちませんでした。本当です。しかし、私は保持していたこの中庸の美德の計算書を作るのは誰でしょうか？ 私の美德に混淆していた恐怖の量や怠惰の量を切り離して量るのは、どんな化学者でしょうか？

私の記録に基づいて決定するのは高貴な審判者であるとあなた方は言います。しかし、それは信頼出来ません。もしも私はその重さを判定したいと思ったなら、私は打ち明け話を話してよくあるような罪の懺悔をしなければならないでしょう。しかし、大変に高潔な人間によって与えられた罪の許しは、私にとって有難いものにならないのを告白します。不幸なことに、あなた方が言う審判者たちは、大変に高潔とは見倣せません。彼らを傷付けないで言えることは、彼らもあなた方や私と同じ様な人間であり、喜べない記憶なら幾らでも自分の人生にあるということです。もし良心的指導者や名誉ある審判者を探したならば、私は告白しますが、彼らは私が考えていたような人々ではありません。

私はあきれ程物事を大袈裟にしています、問題としている名誉とは大変に物静かで善良で小さな美德であり、何時も定刻通り決まり切ってやって来ることはなく、国家業務に疲れることも傷付けられることもない役人どもを毎日受勲しているとあなた方は言います。よろしい。でも、そうは言っても、レジョン・ド・ヌール賞の赤い略章を持っていないフランス人が、何故そんなに沢山いるのだろうと私は自問します。それというのも中庸の徳を持っている人々は、取分け大きな悪徳とは無縁であり、私はそんな人を自分の周りの至る所で見ているからです。中庸の徳は舗装された道に生えているようなもので、郵便配達人や門衛や市内電車の運転手は、私にとって大変に大切な人々です。実際に勲章もない知り合いの多くの人々にこの中庸の徳がないと思わせて置くのは我慢がなりません、そしてその中庸の徳からあなた方は私のボタンホールにそのバッジを付けたがっているのです。そこには嘘があります、私は決して共犯者になりません。」

アランが何故、賞や勲章を固辞し続けたのか、アラン自身の内面が吐露されているこのプロポは、ある意味で人生における根本的な見方や信念や思想というものが含まれているように感じます。何が一番大切か、賞や勲章を固辞し続けることによってはっきりと見えてくるのです。賞や勲章は、家族や郵便配達人や門衛や市内電車の運転手などのように、自分と最も関係した人々とは無縁の代物であり、世間という殆ど関係の無い人々への名誉に溢れております。それは毎日

充実している本心から楽しいと思う日々の生活から遊離していき、強いては自分自身の虚栄心や功名心の増長に一役買うものに変身します。快樂や怠惰を友にします。従ってそれは、自分自身ばかりでなく自分と関係の深い人々も不幸に陥れる可能性も生まれます。何が大切かが分からなくなってくるのです。アランにとって一番大切なものは毎日書くことでしたから、自然と賞や勲章を固辞し続ける生活になっていきました。そのことを考えて、このプロポの続きを読んでみて下さい。

「その時、賢者は私に言うのでしょうか。〈何故そんなに話をするのですか？ 習慣が大切です。ですから習慣を理解しなさい。ミサへ行く人々のように振舞いなさい。あなたは、パンと葡萄酒からキリストの肉と血に変わったという実体変化の緻密さを彼らが考えていると思いますか？〉その通りです。しかし、正確に言うなら、私はミサへ行きません。」

この様にしてこのプロポは終わっています。緻密に考えないで習慣に従って、本人の名誉となる勲章を貰えば良いと考える人が多いと思いますが、アランは固辞し続けました。授賞式へ行く時間も無駄に出来ない位に毎日が充実していて、もったいなかったのです。毎日書き続けたアランの人生がそれを証明しています。第一次世界大戦へ参戦した時も、戦闘中でない限り書き続けました。人と話をしても頭の中に音楽が鳴っていたモーツァルトが作曲していたように、戦場にいたアランの頭の中も言葉が聞こえていたに違いありません。ミサへ行かないアランですが、ミサへ行かないことが大切なのではなく、ミサへ行けない位にミサよりも大切なものがあったのです。そしてアランは、ミサや宗教や習慣を馬鹿にすることも認めませんでした。そのことを次のように書いています。

「十字架を想像するや否や馬鹿にすること、十字架を持っていないと分かるや否や詰まらない言い訳を付くことは余りに滑稽です。私は人間の心理を分析するこの若い商人を気の毒に思います。レジョン・ド・ヌール勲章は宗教的な制度です。祈りや儀式を果たすことになります。それを拒否することも出来ますし、その理由を言わないことも出来ます。しかし、それを馬鹿にしながら祈ること、そして聖人という聖人を馬鹿にした仕草をすることも、弱い人間です。」

弱い人間は虚勢を張ります。賞や勲章を固辞したことを強調しようとします。しかし、強い人間、人が何を言っても気にしない人間、毎日が充実している人間は、固辞した理由を言う必要は無いとアランは言います。行動が全ての時があっても良い筈です。（完）

## 七十七 変わらないもの

人には喜びも苦しみもあります。何時もそれらの重さが違いますから、量りたいと思います。それが自然であり、出来れば喜びは重く、苦しみは軽い方を望みます。ところがこの世には変わらないものがあります。アランは一九〇八年一月十六日のプロポを次のように書き始めます。

「チェスのゲームは変化しませんでした。国民の一般的な家も変化しませんでした。そのことは全てのものが進歩と重なる訳ではないことをよく理解させています。私たちは電気で動く列車を運転させていますし、利己主義にも愛他主義にも磨きをかけています。しかしながら、モーやどんな町にもある城壁で出来た通りに門が閉じられた家がありますが、この家にはポリネシアの人間と左程違わないで未開で残酷な人々がおります」。

彼らは現代の私たちと道徳論的にも程遠いと人々は言うのですが、そんなことはなく、恐らく彼らは現代の私たちにより近い人間である、とアランは書いています。其処で生活しているのは、動物のように仕事をしている奴隷たちです。そこでは着飾った女たちが金のためにあなたにサービスし、他の所では骨付きあばら肉をサービスすることもあります。奴隷や奴隷商人たちは、地下の囚人のように、何時も自由や愛や家族や名誉のことを考えており、まるで地獄に落ちた人々が天国のことを考えているようなものである、と純真な心を持ったあなたは思います。でも、全然違います。彼らも人間の生活に変わりありません。彼らには調子が良い時もあれば、笑うことも泣くことも喧嘩をすることも仲良くなることもあります。力尽くで管理する奴隷の主人と、口で説得して管理する主人がおります。彼らの裡には狂気と英知があります。道理にかなった格言があります。名誉の規範があります。侮辱もあります。無礼もあります。崇高な情熱と下劣な情熱があります。一方ではけちなために軽蔑され、他方では嫉み深くて嘘つきとして知られています。別の人は大変に優しく、心からの本当の涙を流して、愛に死ぬこともあるとアランは言います。

しかし、他方では日々の仕事が情熱を眠らせています。暇な時はお喋りをして過ごします。人生は修道院の中にいるようなものです。院長は恐れられますが、心の中で少しは愛されていて、クリームケーキの周りでガラス器を上げながら祝祭を行います。その時人々は一瞬にして忘れ、仕事とは秩序あるもので、情熱は無秩序のもので、話という話が似たようなものであっても、我を忘れていきます。

アランは主人と奴隷の関係に無い、外国人の口を借りて次のように書いています。

「そのことを聞いた外国人は、快樂を売る哀れな商売人たちに、恐らく叫んで言うでしょう。〈ですからあなたがやっている仕事のことを考えなさい。あなたを雇って、あなたを道具や食料のように売り飛ばす野獣のような人のことを考えなさい。そういうことを全て判断しなさい。そういうことを全て断ち切りなさい。そうしてから次に、ガラス器を高く上げなさい。〉その外国人は笑わせます。習慣に対して理性を持ち出すために、外国人は何時も少しばかり滑稽です。不意を食らって驚いた人間を私たちは笑いますし、私たちの礼儀正しさ、正義、表向きの話、美德そして喜びと苦しみを、〈理性〉という秤で量りたいと思います」。

量ることは思考することでもあります。何故なら大切なものの重さを量り、大切にないものの

重さと比べて、判断する材料に出来るからです。つまり人間が思考し判断するには秤という道具が必要になってきます。哀れな奴隷は、主人との関係しか見ようとしません。力尽くで管理する主人と、口で説得させる英知のある主人と比べることもしません。何故なら、彼には秤が無いから比べられないのです。外国人のように自らを客観的に見れば、大切なものが見える筈です。それは何時でも変わらないものです。礼儀正しさ、正義、表向きの話、美德そして喜びと苦しみも変わらないものです。苦しみよりも喜びの方が何時も重いのです。〈理性〉という秤で量ってみれば分かります。

しかし、哀れな商売人たちは量ろうとしません。奴隷と主人の関係の中で見るしかなく、それが全てになっているからです。奴隷の悲劇は、一人の主人との関係の中でしか生きられないことにあり、決して多くのものの重さを量る機会が与えられていないばかりに比べることが出来ず、延いては自分にとって一番大切なものが分からないことにあります。悲しいかな、そのような状況は現代の我が国にも見受けられます。

例えば、企業の中でよく見受けられます。私の経験から言うなら、大企業よりも中小企業によく見受けられます。社長の息子などが、社員やアルバイトに罵声を浴びせたり虐めたりしています。住宅ローンを毎月払い続けている社員は正に現代の奴隷であり、会社を辞めることも出来ず、社長の息子の言いなりです。苦しみよりも喜びの方が重いと自ら判断出来ずに、理性の鏡が曇り始めます。何が大切かが分からなくなります。

第一次世界大戦へ志願して参戦したアランは「一緒に前進し、一緒に考えないこと」を勧めています。参戦中の一九一六年一月二二日に書いています。つまり行為は、組織の中ですから〈一緒に〉行動しなければなりません、思考は外部から強要されてはなりません。考えることは、あくまで個人の頭で納得する英知が必要であり大切です。日本の企業は、社員の考え方まで強要し、同じ言葉を強制的に言わせて売り上げを伸ばそうとします。私は、朝礼で社訓を言わせる企業がどうしても好きになれません。売り上げを伸ばすためには、人間の精神まで変えようとしているのです。売り上げを伸ばすには、精神を変えなくても幾らでも方法はある筈です。アランは、同じ様なことをモンテーニュも言っており、「群衆に肉体を預けること、しかし精神は助けること」の言葉を紹介しています。当時のフランス軍にもその位の自由は必要で大切だったのであり、決して精神の奴隷を望んではいませんでした。従って当初は兵士が書いたものを検閲していたようでしたが、直ぐに廃止したとのことです。旧日本軍は元より、占領軍（GHQ）が日本人の私信まで開封した検閲の目的が日本社会の民主化にあったとしても、正にそれは精神の奴隷化に繋がる行為であり、民主化と矛盾する行為であることを見逃してはならないと思います。検閲は表現を歪曲させて〈一緒に考える〉ためのものであって如何に民主的でない行為か、何時の時代でも変わらないものであり、社会の隅々まで点検しなければならぬと私は考えます。もしかすると検閲と同じ様な行為が、今でも我が国の至る処で行われているのではないのでしょうか。（完）



物神論は、我が国の古代宗教の特色のように言われています。無生物である石や家具や道具などの事物の全てに魂があり、人間の意志や個性を与えるように〈神〉を感じる文化があります。それらの事物を大切に扱う点は長所と言えるかも知れませんが、反対に事物や自然現象を恐れるあまり、人間の行動を不自由にする結果にもなり得ます。それらの不自由な行動は、迷信や崇りとなったり、石や樹木や滝などを神として祀ったりして、我が国の現代社会にも影響を与え続けていますから、観念論として決して無視出来るものではないと思います。

アランにとっても物神論は、フランス社会にとって避けて通れないものの一つでした。テーブルや椅子にも神がいて、人間の行為に影響を与えます。一九〇八年一月二六日のプロポに次のように書いています。

「皆がやるように私には急いでいる時に椅子などの物を勢い良く動かす習慣があります。しかし、それらの物のうち一つでも私に激しくぶつかったならば、その時は自然な反動として馬が拍車で刺激を受けて動き出すように、私はそれをもっと速く大きく移動させますが、それは一人の証人が、私には具合の悪いものに罰を与えていると十分に信じることになるのでしょう」。

アランは子供だった時に、テーブルや本や椅子をよく人格化していて、半ズボンのボタンを兵隊にして何時間も動かして遊んでいたとのことでした。そして、これらの事実には魂が無いと決して信じなかったと書いています。子供であったアランは何人もの大人にボタンの兵隊のことを質問すれば、アラン自身が答えていたのと殆ど同じ答えを皆がアランにしていたとのことでした。

アランが質問するのは、事物に人間の意志や人格を付与する者たちが何時も遊びでやっていないかどうかを知ることが出来たからでした。しかし、歴史家はそんなにも長くそのことを考えないのが本心です。歴史家は詩を書くことを覚え、詩を文字通りに受け入れるとアランは言います。歴史にとっての史実とは何でしょうか。厳密に言うなら、この世に直線が存在しないように歴史に動かぬ証拠は無いのではないのでしょうか。時間というヴェールが過去の〈事実〉を隠匿します。現代においてそのヴェールを剥がすことが不可能である限り、歴史家が書くものは主観的な詩ではないか、とアランは言っているのです。勿論、歴史家にとっては不満であり、傍証に傍証を重ねて間違いの無い史実の把握は可能であると主張するのですが、そういう主張そのものが史実の不在を証明していることとなります。史実に主張は要りません。しかしながら歴史家には歴史という出来事を史実という事物に還元する仕掛けが必要になってきます。その仕掛けを信じるまでに実証精神というものを訓練します。その結果、事物を抽象して思考する能力と共に、それらを表現する詩人に成ります。迷信や崇りも事実である限り、史実になり得ます。従ってテーブルや椅子にも魂が宿ることになります。アランが書く文章も、歴史家にとってはアランのペンに魂が宿っていることとなります。

「その時から、質問は事物に人間の意志や人格を付与する者たちが何時もそれを遊びでやっていないかどうかを知ることになりました。しかし、歴史家の本心はそんなにも長くそのことを考えません。彼は詩を覚え、文字通りに受け取ります。例えば私に書いて寄こすのであれば〈我が親愛なる古きペン軸〉です。千年後に歴史家はこのテキストを発見して、アランは物神崇拜者で、

自分のペン軸が或る種の神と通じていると信じていたと言うのでしょう」。

事実とは現在のものであり、事実に基づくことが歴史の前提であるなら、歴史は過去のものでないという逆説を乗り越えられなくなって仕舞います。事実であったと思われることを史実と呼んで、〈時間〉のヴェールを除去したかの如く自覚しようとしませんが、事実の重みに耐えられなくなり自家撞着に陥る時、歴史家はその責任を事物へ転化し、他の事物には無い魂を見ることによって物神論を唱える者になります。アランが歴史家を信用しない所以です。そして、歴史家も詩人に成るしかないのです。ところが自己の感情の事実を表す詩人にとっては、事物の魂は望んでいないのが殆どですが、中には詩人の目的がアニミズムにあるという詩人がいない訳でもありません。（高良留美子という詩人は、そういう意味では歴史家に近い詩人であり、事実も気になって仕方ないのだと思います。）詩句と言ひ、史実と言うが、一体何処に相違があるのでしょうか。ホメロスの叙事詩『イリアス』が表しているトロイア戦争は史実であり、旧約聖書に書かれたノアの箱船もシナイ山も史実と見做すならば、史実は歴史家が書いたものだけに限定出来なくなります。歴史が重要であるなら、それは人間が上手に行動したり判断するためである、とアランは一九一四年四月十四日のプロポに次のように書きました。

「小麦や水車小屋やのこぎりや梔子のように、それは多分最も美しい発明品には歴史が要らないという隠された法則によるものです。その代わりに最も愚かな発明品である奇跡のお話や迷信やカリブ人の信仰は、何時も歴史に依存していて、そこには何でもありますが重要なものも除かれていて、私が理解するのは上手に行動するか判断するための法則です」。

そして、〈上手に行動するか判断するため〉には、そういう技を身に付けるためには〈覚えることは忘れることである〉とアランは言います。事物に宿る魂を忘れることによって、現代に生きる歴史が自分のものになるのです。（完）

## 七十九 池の蛙

一八六八年生まれのアランは、子供の頃にフランス革命前の旧政体時代の絵画を見て、びっくりしたことが幾つありました。その中で特にびっくりして何時までも忘れずにいた絵画があります。それは領主が眠っている間、農奴たちが池の水を打ち続けているものでした。領主がよく眠れるように池の水を打って、蛙が鳴き出さないで静かにしているようにしている処の絵画でした。こんなにも多くの人々が苦勞しているのに、領主の喜びはこんなにも小さいのです。アランが領主でその時代に生きていれば、農奴たちに次のように言ってあげたいと一九〇八年一月二七日のプロポに書きました。

「寝に行きなさい。あなた方がぐっすり眠っていると思うと、私は蛙の声が気に入って楽しくなります」。

もしアランが金持ちに成って、豪華なホテルで非生産的な生活を送っていたとしたら、その時からアランは進歩を考えて自分を慰め、そして農奴たちがもう池の水を打たないで済むことを考えます。しかし、アランにとって役に立たない勞苦でなく、自分のためになるもっと良いものを見たならば、ほんの小さな喜びであっても逃しはしないのでしょうか。具体的にアランは次のように想像します。

もしアランが金持ちであったなら、恐らく家に電話を設置したくなって、数日後にはベルが鳴って嬉しくなり、電話で質問する誰かと会話を始め、鼻声でビールとか子牛の肉を一キロ持って来させます。一九〇八年当時は、まだ電話は左程普及していなかった筈です。しかし、ベルの音、黒い受話器、壁に取り付けられた緑色のコード以外に変わったことは何もないとアランは思います。勿論、もっと良く見て下さい、鉍石からは銅が抽出されて運搬されて来ます。銅は坩堝の中へ流し込まれます。コードは伸ばされ焼き直されて、再び運搬され巻かれて、空中や地下で解かれて敷設されます。壁という壁を通して行き、僅かな亜鉛は電池の中でも使われます。電話交換手は、電話加入者の通話時間を計ることになっています。全てがそうしたもので、ベルが鳴れば、五月蠅くて邪魔な人間や軽率な人間からのものであっても、彼らを呪う代わりに結局は平和を守るために、アランは受話器を取ることになります。それに反してアランの家人は、三個のクロワッサンと一ダースのオレンジを手に入れるために頻繁に電話をします。それは毎日を生活するために何時も用心している注意力と、それと巧妙に関係してくる努力の結果であり、アランにしてみればそういう労働のために莫大な時間を使うのですが、直接的に自分の利益になることは殆ど無いと言います。労働とはそういうものです。自分の利益のために行う労働は殆ど無く、習慣や模倣が必要悪を生んでいき、他人のために行うのが労働ですから、その労働による満足感によって本当の喜びは手に入れられないとアランは言います。

「この様にして習慣や模倣が必要悪を生み、その満足感は何時も本当の喜びを与えるものではありません。人々は言います、〈かくして、ほんの小さなことを変えるためにも多くのことを変えなければならないでしょう。何故なら全てはお互いに関係していて結ばれているからです〉。従ってまさしく王制の時代には領主の言うことが正しいのです。今も、何も変わっていません。私（アラン）はそのことが良く分かりますし、蛙を静かにさせるために農奴たちは何時も池の水

を打っているのです」。

このプロポはこの様に書かれて終わっています。池の水を打つ行為は小さいものかも知れませんが、その行為を止めるためには王制を廃止しなければなりません。王制である以上は〈領主の言うことが正しいのです〉から、農奴たちは習慣を止められません。つまり農奴の労働を止められません。自分に本当の喜びを与えない労働ですが、王制の時代にはそれが正しい労働であるとアランは言います。何故なら労働は自分だけの喜びではなく、全てに関係しているからです。領主が蛙の鳴き声に邪魔されないで安眠出来れば、翌朝に目覚めた領主は政治に正しい判断を下せることが可能になるからです。

民主主義の時代も同じです。大統領や首相が政治に正しい判断が下せるように警備が付きます。池の水を打つように、大統領や首相が安眠出来るようにします。警護する者たちは、警護するその行為が本当の喜びではありませんが、労働としては正しいのです。如何なる時代にも労働は必要です。何故なら自分の本当の喜びだけの生活には、社会との関係が稀薄になり、独善に陥ることが多いからです。

「この世ではあらゆる事件が起こり、絶対だと信じていたことが揺らぐことは幾らでもあります」と一九〇八年四月十四日のプロポでアランが言うように、社会が安全であるためにも労働は必要であり、その安全は人々が独善に陥らないことによって生まれます。（完）

## 八十 離婚

フランス人の総人口の約八〇%以上は、カトリックの洗礼を受けているとのことですから、フランスは現代もカトリックの国と言えます。カトリックは離婚を認めませんから、カトリック教徒が結婚すると、二人は原則として死ぬまで添い遂げることになります。法律的にも一八八四年まで、ナポレオン法典により離婚は禁止されていました。第二次世界大戦後も、離婚するには手続きが大変でしたが、離婚世帯は八世帯に一世帯でした。この数字はやや古い調査時のものですが、その後一九七五年に新しい離婚法が施行されて手続きも簡単になったので離婚件数は増加し、大都会では年間婚姻件数に対する離婚件数は約三〇%（一九八四年）になったとのこと。更に二〇〇五年にも離婚法が新しく施行されて、フランスにおいて離婚件数は年々増加しています。ところが正式に婚姻届を役所に提出しない若者のカップルが、一九六八年の五月危機以後年々増加しています。彼らのことをコアビタシオン（同棲）とかユニオン・リーブル（自由な結び付き）と言っています。一九八〇年代末の大都会の若者では三分の一に達したそうですが、最近のパリではカップルの半数がコアビタシオンとのこと。フランスの社会保障等が、正式に結婚した場合と同じであることも要因として挙げられていますが、やはりカトリックの教えとして離婚を認めていないこともコアビタシオンの増加に繋がっていると思われれます。

サルトルとボーヴォワールの結婚は、二年間毎に「契約」を更新するコアビタシオンであったことは有名ですが、アラン自身もマリー・モール＝ランブラン夫人と正式に結婚しない儘、一九四一年に夫人が亡くなるまで添い遂げました。その後、アランは一九四五年に二十歳若いガブリエル・ランドルミーと結婚しますが、アランは七七歳で初婚ということになります。蛇足ですが、アランが眠るパリのペールラシェーズ墓地には、妻のガブリエルや姉のルイーズはアランと共に眠っていますが、モール＝ランブラン夫人の名は見当たりません。アランには離婚の経験がありませんが、内縁関係については教会も認めているとアランは一九〇八年一月三十一日のプロポで言っています。アランは、或るカトリック信者の言葉を次の様に紹介しています。

離婚は神が生むものでなく、人間が行うことに違いなく、アル中、遊蕩、裏切り、二枚舌、ペテン、盗み、暴力が人間に余儀なくされた時、カトリックの神が絶対的意志によって禁止しても、無くなることはなかったのです。離婚も無くなることはないに違いありません。しかし、この世のあらゆる人々にとっての道徳は同一であり、アランにとっても皆にとっても同一ですから、カトリックの人が従うのも「情熱が許容する限りの良識」でした。カトリックの人は次のように言っています。

「宗教を持たない人間は離婚が許されていると思っており、結婚には離婚がつきものだが、賢明で品行の良い結婚にすることも出来る。勿論、カトリック教徒の私は離婚が出来るとは思えないし、信じない。離婚をして結婚するなら内縁関係しかない」。

これに対してアランは次のように答えています。

「.....もしも私（アラン）が〈教会〉の真の教理を良く知っていたなら、〈教会〉は内縁関係を絶対的に容赦なく禁じたりしないでしょう。本当のことを言うなら、〈教会〉は容赦なく決して禁じたりしません。心の底に隠された動機が最後に救われて、煉獄後に誠意ある冒瀆的な懐疑論

者まで救済してくれることが可能であると何時も〈教会〉は認めて許しています。

ねえ、モラリストが恰も、神も不要、主人も不要であるとするなら、何を言うのでしょうか。離婚は必然的に許すことが出来ない間違いではないと言うでしょう。離婚後に別の人と結婚することは、有益で合理的な契約が生む結婚で美德がない訳ではないと言うでしょう。少なくとも不幸や悲しみや病気にも拘わらず、誠実な心は何よりも美しいとさえ何時も言うでしょうが、離婚することは良いとは言わないでしょう。単に、場合によっては離婚が許されると言うだけでしよう。そして、離婚しないことが最良であると何時も言うでしょう。世界中の人々がそのことについては意見が一致しています。神は何も生みませんでした」と書いてこのプロポは終わっています。

離婚は、アル中や遊蕩などと同じ様に神が禁止しても、実際にはあり得る人間の営為ですから、間接的に内縁関係つまりコアビタシオンを認めることになり、多くの若いカトリックの人々も現代のフランスにおいては正式な〈離婚〉から逃れていることになります。

しかし、離婚の問題の核心は統計上の数字ではなく、個々人の心の問題であり、自分だけは離婚しないと決意していることが大切であり、全世界同一のモラルであるとアランは言っているのです。従って、離婚は統計学上の問題として捉えるばかりでは問題の核心を逃して仕舞い、延いては離婚と不幸を乖離させて理解するという愚行を演じることになります。現代の社会学者たちの陥穽も、まさに人間の感情や意志の領域の分析を余りに無視している処から生じているように私には思われます。（完）

「〈歴史〉は政治家たちと取巻き連中によって書かれてきました。一人の人間の計画が国民の運命を変えることが出来ると信じられているように見えますし、証明しようとしています。それは殆ど広く言われているかのようですし、一人の人間が七階から通りへ落下する時、彼が感じる恐怖とは速くなく、ゆっくりと落下して行くようなものです」と一九〇八年二月一日のプロポは始まります。歴史は客観的であろうとしても、七階から落下する人の恐怖と同じ様に、ゆっくりと落下するものであるとアランは言います。落下する人を周辺で見る人には一瞬の出来事でしょうが、落ちる本人が体感する時間は非常に長いとされています。つまり歴史には必ず主観が入ってくるものであるとアランは言います。勿論、歴史が歴史であるために、歴史を書く人は主観を排除しようと努める人も沢山おられます。しかし、過ぎて仕舞った過去の出来事は如何なる媒体で介在してもその全てをそっくり完璧に再現させることは不可能であり、不可能である限り多くの主観が介在して来ます。

「私（アラン）が〈歴史〉という大嘘吐きを全て本能的に嫌悪し始めた時、私は大変に若かったです。若い王や悪しき忠告者たちは間違いを犯します。老いた王はそれらに報います。宮廷を変えます。亡命者を取り立てます。大臣を更迭したり召還したりします。王朝として同盟を結びます。交渉があり挑発があります。実際にはこれらの意味の無いことが国民にとっての本当の歴史になり得るのでしょうか」と言って、アランは歴史を信用しないことを宣言します。歴史を信用するのは〈大変に強い幻想〉であると言います。何故〈幻想〉と言うのでしょうか。その原因は分かり易いもので、過去は今ではもう存在しないということであり、その上イメージは本の中にしかなく、このイメージも歴史家たちによって創られて来たからです。〈歴史〉は彼らの偏見を考慮して証明しています。何故なら〈歴史〉は偏見が創った話以外の何ものでもないからです。〈このイメージ〉は、アランの時代と違って今日では映像も明瞭になり大きな役割を果たしていますが、基本的には過去の全てを表す映像というものも不可能です。つまり〈歴史〉のもつ記録とは何でしょうか、との質問にアランは次のように答えています。

「それは言葉です。何時も言葉であり、一人の王の言葉です。一人の大臣の言葉です。戦に勝った將軍の弁護の言葉です。寵を失った家臣が書いた批判文の言葉です。これらの話の中で意志的に嘘の部分が創られると、更に高慢な嘘として残りますし、それは全くの本心なのが殆どです」。本心からの嘘が鑿められているのです。そこに柔軟な楽観主義者たちは事件の匂いを嗅ぎつけます。その後を追って嘘でないのを望み、その望みが自分たちの肉体よりも話の中に多く持っている信じます。彼らは偉大な肉体の中の脳のように、謙虚さを自分に与えますが、現代人は彼らよりも本を読みませんし話も聞きませんから、国民は何時も一人とか二人とかの人間に従って来た最後には信じて仕舞う、とアランは言っています。真の歴史は一人とか二人とかの人間のものではありません。賢明なのは地質学者たちである、とアランは言います。

「地質学者たちは地球上の今日的な変化を殆ど研究し始めていました。水の活動、地盤の隆起や沈下です。そして、現在の事象に過去の事象を蘇らせます。歴史家も同じことを行います。現在の変化がどのようにして生まれ、如何なる状況に依存しているのかを先ず理解します。その時、

少なくとも彼は古い文書や侍従の繰り言も公平に判断することが出来るのです」。水や地盤には王や将軍はおりません。しかし、それでも現代を形づくっているものは存在しているのであり、歴史においても現代を形づくっているのは一人の農民であり、一人の兵士である、とアランは言います。

「一人のノルマンディー人の農民を調査してご覧なさい。素直な頭で本を読もうとしてご覧なさい。彼らの愛情や興味や意見が行為と共に如何に満足し得るものであるかを見抜いて下さい。そこには現代の歴史の一頁があり、一人ひとりが一人の王同様に重要であることを良く知って下さい。一人の兵士の怒りが戦争を起こすのです」と書いて、このプロポは終わっています。

現代の我が国も竹島や尖閣諸島の領土問題が、テレビや新聞などで大きく取り上げられていますが、戦争を起こすのは〈一人の兵士の怒り〉であるとアランは言っています。戦争を起こすのは政治や経済の領域の問題ではなく、個人の領域の問題であり、文学や芸術や音楽の領域の問題でもあります。つまり歴史に重要なのは国でも社会でも政党でもなく、一人ひとりの人間の言葉が歴史を決定して行くのです。従って戦争を起こすことは悪であると思える者は、一人ひとりの心に怒りを助長させる言葉は吐くべきではありません。況して小説を生業として来た政治家が、その本分を忘れたように一人ひとりの心に怒りを掻き立てるような発言には大いに反省して貰いたいと私は考えます。文学者には気品が大切です。何故なら、文学者の本領は個人としても見知らぬ人々と心から交流出来ることが長所でもあり、気品はそのために必要な資質でもあるからです。そのような資質を喪失させた文学者は、既に見知らぬ人々との交流を放棄して、戦争を志向する政治屋に変貌したのと同じです。顔見知りの〈お仲間連中〉とお祭り騒ぎをしているだけなら良いのですが、マスコミが顔見知りの〈お仲間連中〉の拡大に一役買っているのですから、多少不気味で始末が悪いと感じているのは私一人でしょうか。（完）



二〇一三年二月末にベネディクト十六世がローマ法王を退位して、同年三月十三日に新法王フランシスコがコンクラーベにおいて選出されました。コンクラーベとは新法王を選出するための特別な選挙のことで、八十歳未満の枢機卿たちによって行われます。約十一億人と言われているカトリック教徒の頂点に立つ者の選挙ですから、色々と細かい規則や慣習があるようです。例えば、枢機卿たちは新法王が選出されるまで外部との接触が禁止されているとのこと。選挙によって決まればヴァチカン宮殿の煙突から白い煙が出るとのこと。因みに、決まらなかった日には黒い煙が出るとのこと。「注目すべきことは自由に関して最も長い経験を持つ国民が、まさしく従属の習慣というものを最も細心に持ち続けている者であるということ。恐らく、何らかの合理性があり、宮廷で着るコートの下には沢山の合理性が隠されています」とアランは一九〇八年二月三日のプロポで書いていますが、法王庁についても同じことが言えると思います。

選挙の時は他者との接触を断つことが健全であるとの判断が法王庁の枢機卿たちの間にはあり、それが合理性のある習慣となっているのです。判断するのは集団ではなく個人でなければなりません。集団には思考も苦痛も喜びの感情もありません。従って如何に判断するのも分からない筈です。集団は数学や統計学に基づいて選択するのですから、まさしく個人の健全な良識は置き去りにされて行きます。「まさしく従属の習慣というものを最も細心に持ち続けている者」が、集団を支えて行くことになります。それが有益であると判断します。しかし、この様にして集団が誕生させた王を如何にして国民はその力と富を手に入れるのでしょうか。この疑問に対してアランは次の様に書いています。少し長くなりますが引用します。

「私は或ることに気付いたのですが、人間が野心を持って高慢になればなる程、権威の徽章を軽蔑します。謙遜家たちは緋色の衣の下に隠れて、自分自身でない程に素晴らしいと思える服装で、子供のように陽気に散歩します。どんなに驢馬が聖遺物を運んで過ぎ行くのを私たちが見ても陽気です。余り笑ってはいけません。人が言う限りでは、彼らは驢馬ではありません。彼らは、自分たちの心の裡の感情に反して、外見を装っても尊敬されることを単に想像したいだけであり、恐らくそのことに少しは価値があると考えています。彼らの習慣は甲冑のようなもので彼らを支えています。結局のところ、恐らくそれは有害であるよりも有益です。

実際に実力があると感じている人間が、兎に角、習慣に何の義理立てもしたくないのは事実です。彼は徽章がなくても認められることを強く望み、素裸で喝采されることを強く望みます。ナポレオン一世は灰色のフロックコートを着ていました。もし栄華を公式に回復していたなら、その後の機構には匙を投げたくなっていたでしょうし、大変に良く糊の効いた昔の服装を着ていれば全く孤独になっていたことでしょう。今日でもあなたは、力があって計算高い人間が上着を着てポケットに両手を入れて、勲章を受けないのを認めます。

イギリスの栄華も、この様にして解釈することです。それは人間を苦しめながら機構を崇める方法であると思います。若い娘でも青二才でも老人でも誰でも構わないから彼らに与えてご覧なさい。彼らはその中で王になるでしょう。このコートは人間が隠れるには余りに豪華です。強い

国民は何時も偉大な王を持つとは、もう何もはっきりと言っていません。そのコートがそのことを示しています。お前は王であるから強いのです。灰色のフロックコートや小さな帽子は次のように言っているようです。お前は強いから王なのです。従って、宮廷のコートを着ないことは半分しか利口ではありません。力や富は国民から王へ行き、王から国民へ行くことはありません。〈イギリス〉は決して主人に喝采しません。自分本来の力に喝采し、劇場にいる王の両肩の上を越えて広がって行きます」。

アランは、〈自分本来の力〉が本当の栄華を生むことを指摘しています。人々から与えられた栄華は、自分をコートの下に隠して王になるが、やがては自分自身を失います。従って王の力と富も、自分本来のものではないのですから、国民へ行くことも不可能になります。

アランの思想は、物事を抽象的に思考して大局的な対象に向くことはなく、個々の現実の事象に働きかけていく行動の力を基調にする側面があります。例えば、知人の庭にある何本もの榆の木がヒゲナガハムシという毛虫の被害にあって全て枯れて仕舞いそうになれば、自分の力で出来る範囲で良いから毛虫を退治して、榆の木を二本でも三本でも良いから救うことが大切であることを一九〇九年五月五日のプロポで説きます。あるいは選挙制度においても、集団に投票するような比例代表制には終始反対しており、一九一二年二月七日のプロポで次のとおり書いています、「郡選挙の投票で、〈比例代表制〉に反対ですし、行政上の専制君主に反対であり、国家の秘密に反対するのは急進的平等のためであり、そして服従の代わりに予測、情熱、熱狂を猟犬の本能と同じ位に明確になるまで発達させます」。政治は、政党や組織という集団が権力を握るためにあるのではなく、集団は個人が豊かに安心して生活するためのものである限り、選挙においても個人が個人を選ぶレベルになくなくてはならないとアランは考えます。個人が集団を選ぶことは、すなわち一人の個人も不在の抽象的な対象を選ぶことになり、誠実な市民としての平等である急進的平等から人間を選べなくなり、延いては力や富は現実の人間へ〈行くこと〉が曖昧になります。

人間の評価は個人によるのであり、余りに所属する団体や家柄や学歴等に偏重すると、現実を正しく見る眼まで失って来ます。我が国の選挙も、力と富が人間へ行くためには支援団体とか組織票という考えから離れて、ローマ法王を選ぶように個人が個人を選ぶための選挙制度にもっと重心を置くべきであり、そのための制度の改正を行うべきであると私は考えます。（完）

「軍隊や戦争に関することは、憤然と議論されて来ました。誰かがその話を始めると、全体に広がって行きました。その途端に騒動を認識して、全体が沈黙します。彼らは微笑しながら、好感を持ってお互いに見つめ合います。何故なら人間を憎むのではなくて、少しずつ意見を戦わせることを覚えたからです」と一九〇八年二月十三日のプロポは始まりますが、当時のフランス社会はクレマンソー内閣によって対ドイツには強硬的な態度で臨み、国内の労働運動やモロッコの民族運動に対しては武断的政策をとっていました。従って軍隊の出動機会が増加し、戦争の脅威も増大していく中で、アランは〈賢者〉を登場させて次の様に言わせています。

「今は、誰も平和を愛していません。今は、世界中が戦争を愛しています。そうです、あなた方は皆良い軍人です。主義主張が正しければ、最早やるべきことしかないと皆が信じています。大變に強く心を打つこととは、板に釘を打ち付けるように、行為に思想を加えるためのものです。あなた方は平和と戦争に議論が分かれると信じていますが、そうではありません。実際には正義と不正についての議論をしているのです。あなた方は各人が理想を思い描きますが、それは何よりも良く生きる方法です。そして、あなた方の結論は何にでも理想に向かって走らなければならないことで、必要とあらば乱暴に押しつけ踏み潰して自分の胸で柵を作る人々もいます。テントの中で熟考する残酷な指揮官のうち、或る者は何時も征服することや何でも力尽くで手に入れるために西へ行くべきであり、別の者は東へ行くべきであると言っているのが私には聞こえるように思えます。或る者は軍隊を滅ぼしたがっていて、軍隊に対して軍隊を招集することを話しています。別の者は本当の原因があることを信じていると言いながら、軍隊を没収した人々の將軍になりたがっています。それに成功するために、軍隊を再び招集することを話しています」。

軍隊には個人の判断が求められません。何故なら個人がばらばらに行動することは敗戦を意味することになり、一人ひとりの不幸に繋がって来るからです。個人は自由を殺して幸福を手に入れようとします。従って、個人は自分の判断を保留して〈神〉の判断を受け入れるようになります。自分では判断できない〈神〉の判断であり、そのための説教は余りに長く続いているのです。あるいは「トランペットを鳴らしなさい。騙されたと気づきながらも人々が繰り返すのは、廢墟の上に建て直され始める蟻の執拗さのようなものです。神は眠っていて、その上空にいると恐らくあなた方は信じています。武器の音に目覚めて、最後にはその力をより大きな正義に与えることを期待します」と賢者は言います。しかし、賢者が言うには神はおりません。存在しているのは市民であり、市民が望むことは正義と平安であり平和であると賢者は言います。戦争を煽り志向するのは〈テントの中で熟考する残酷な指揮官たち〉です。市民たちは戦います。アランは後年の第一次世界大戦の戦場で書いた『文明国の戦争で真の原因になるもの』の巻頭言に、十八世紀のモラリストであったヴォーヴナルグの言葉「悪徳の人は戦争を煽り、美德の人は戦う」を記載しました。市民は戦争を煽る者に注意し、警戒しなければなりません。そういう意味で私は敢えて言いたいのですが、現代の我が国にも戦争を煽る行為は色々と見受けられます。北朝鮮の脅威ばかりでなく、中国や韓国との国境問題を憤然と発言する者にも警戒する必要があります。そして、それらの発言や行為を一方的に公表するマスコミにも責任が無いとは言えません。何

故なら、戦争を煽る者の発言だけを公表するのではなく、その都度冷静な市民の声も併せて公表すべきであると私は考えるからです。そうでなければ片手落ちというものであり、マスコミまでもが戦争を煽る者のお先棒を担ぐ結果になって仕舞います。

プロポの〈賢者〉も次の様に市民を励ましています。「経験は大変に長く続いて証明が行われる、と私（賢者）はあなた方に言います。決して神はおりません。上空は空白です。神の力は盲人や聴覚障害者のもので、眼に見えませんが聞こえませんが。神の正義は、そんなにも遠くにはありません。もしも神がいるとするなら、それはあなた方の心の裡にあります。それ故に人間でいて下さい。あなた方の観念を捨てることに慣れることです。正義は大空から、冠のように力を持った頭に降りて来ません。正義はどのように生まれるのでしょうか。私には分かりません。少なくとも私が知っていることは、都市は市民のためにあるということだけです。それ故に一人ひとりが働くのは、正義と平安が人に与えられるためであり、何よりも自分自身が正義で平安であることです。そこに身を委ねなければならない戦いがあります。やらねばならない革命があります」と言ってこのプロポは終わっています。

アランの実際の政治姿勢は、決して暴力を容認する過激なものではなかったのですが、〈戦い〉や〈革命〉は個人の思想として急進的現状を受容するものでした。従って、現状に対しての抵抗と服従は決して矛盾するものではありませんでした。ルアン時代のアランの教え子であったジャン・テキシエールは、次のアランの言葉を引用して、真の市民は決して権力の制御を放棄しないことを指摘しています。「抵抗と服従は市民にとっての二つの美德です。服従によって秩序を確かなものにします。抵抗によって自由を確かなものにします。抵抗しながら従うことは、全くの秘密ごとです。服従を破壊するのは無政府主義です。抵抗を破壊するのは独裁です」。無政府主義にも独裁にも現状の解決を求めなかったアランの政治思想は、あくまで国や政党や集団に自己の全てが組み込まれない健全な精神を所有する個人に対して向けられた思考であり信念であったと言えます。（完）

## 八十四 結婚

結婚は人間としての本質部分を形成するようです。職業が人間の世界観を形成するように、結婚は人間の人生観を形成し、人間の生活を変えるようです。「自分の結婚を考えると、人は先ず生活を変えます。そして、それは大変に自然です。不幸になることとは、言葉遣いや考え方や性格を殆ど同時に変えることで、何時も信じられない位に早く人間の本質を変えて仕舞います。上辺を取り繕うこと、つまり自分自身を半分騙し、屢々他人を全て騙すことも理解することです」とアランも一九〇八年二月二四日のプロポを書き始めています。

結婚はあるが儘の自分を、あらねばならない自分に変えようとしますし、反対に不幸は不幸という気分によって殆ど同時に言葉遣いも考え方も性格も降下させて行きます。それらを上昇させるには、不幸から抜け出すことです。それは実際よりも良く見て貰いたいと努力して演じることでもあります。私たちはこの喜劇を劇場などで何度も眼にしましたが、それは戦いではありません。もしもその時、相手を欺いて勝利を手に入れたなら、何時までも優位でいられます。でも結婚はそうではない、とアランは言います。「長い間、相手を欺くことは不可能です。給仕としては立派でも、人間としては偉大でないとするれば、そういう平凡な人間が口笛でやじられることなく、女性の前で悲劇の英雄を演じるのをどうしてあなたは望むのでしょうか」。二人の間に約束がありながら、約束以上のことを行うとするなら、約束は殆どする必要がないでしょう。

しかし、決して許されないことでも風習は生まれます。殆どどの家庭にも不文律があって、それに従って家族の一人ひとは家族を楽しませたり喜ばせたりするには嘘も付きます。思いやりで整えられた会話に真実の言葉があります。結婚はあるが儘の事実を言えば良い訳ではなく、ギリシア神話のイフィゲネスが女神アルテミスの怒りを鎮めるために父の命で人身御供になるように、どのようにすれば人生が変わるか誰でも良く知っているのです。しかし、男性も女性もお互いに何時までも相手のことは知らない儘でいます。ですから一年ごとにやり直すことになり、大変な試練になるとアランは書いています。

「従って、それは必然なのですが妻は夫を学び、自分の魅惑を少し失う度毎に経験を積むのです。神が金色の粘土で創られているのを女性が発見する間に、夫は経験に次ぐ経験で神の誕生を理解しますが、女性には無知であり、女性も自分を知りません。それ故に結婚というものは一年ごとにやり直すべきものです。そして、新しい婚約期間はそれまでよりももっと恐ろしい大変な試練となります」と書いてこのプロポは終わっています。恐らく、夫は妻のことは何も知らないと認識することが最高の理解になるのでしょう。何も知らないのですから、何が起こっても受け入れられる筈です。「そういう女なのだ」と言うことが最高の理解になるのでしょう。まさしく〈大変な試練〉です。

一九〇〇年、アランは三十二歳の時にルアンの民衆大学で、理系のリセの教師であったマリー・モニック・モール＝ランブランと知り合い、一九四一年十月二日にモール＝ランブラン夫人が七十三歳で亡くなるまで一緒に生活します。役所に結婚届を提出しない結婚であり、モール＝ランブラン夫人はアランが書いた草稿を整理したり出版者と連絡したり経理なども管理した秘書のような役割も果たしました。現代のアラン研究所のロベル・ブルニユ所長などがアランの未刊の

原稿を公表出来るのも、モール＝ランブラン夫人が果たした業績が大きいようです。例えば、第一次世界大戦に参戦したアランは戦場から手紙として毎日のように数々の草稿をモール＝ランブラン夫人へ送っていました。夫人はそれらをノートに書き写しましたが、赤いノートに書き写されたのがアランの死後の一九八八年にアラン研究所から刊行された『文明国の戦争で真の原因になるもの』（全面的に生前に書き直したのが一九二一年刊『マルス、又は戦争批判』）であり、青いノートに書き写されたのが一九一七年刊『精神と情熱に関する八十一章』として上梓されたものでした。

いずれにしてもアランとモール＝ランブラン夫人は、一九四一年までアランが草稿を書き、夫人が草稿を整理して出版したり経理を担当したりしていた共同経営者のような関係でもありました。従って、一九五一年六月二日に亡くなってパリ二十区のパール・ラシェーズ墓地にあるアランの墓に夫人の名はなく、一緒に眠っているのは一九四五年に亡くなった姉ルイーズと、同年十二月三十日にアランと結婚して一九六九年に亡くなったガブリエルです。ガブリエルについては別の機会に書きたいと思いますが、彼女はアランが高等師範学校在学中の同窓生の姪で、二十歳も年下でした。結婚した時はアラン七十七歳、ガブリエル五十七歳でしたが、アラン自身はリウマチが悪化していて殆どベッドから起き上がれない状態でしたから、ガブリエルはアランを介護するために結婚したようなものだったと思います。アランは、一九二九年にアメリカ合衆国のボストンへ出発したガブリエルのために、一九三二年までに約七〇篇の詩を創作しました。それらの詩は『ガブリエル詩集』（POÈMES À GABRIELLE）として二〇〇一年にアラン研究所から刊行されましたが、夫婦として完結される前の美しい詩句に溢れていて、幸福というものが如何なる資質を持っているのかを知ったような詩集です。私は、次のアランの言葉も思い出しています。有名な『幸福論』にはない言葉ですが、アランの幸福とは如何なるものであったのかが端的に簡潔に表されているように感じます。「イチゴにはイチゴの味があるように、人生には幸福の味があります。太陽は良いものです。雨も良いものです。あらゆる音が音楽です。見ること、聞くこと、味わうこと、触れること、それらは一連の幸福でしかありません。苦しみや痛みや疲れでさえも全てが人生の味わいです」。一九〇九年五月二九日のプロポに書かれている言葉ですが、味と味わいのように試練も幸福もアランにとっては個人のものであり、結婚によって夫婦も個人になったのです。（完）

## 八十五 ソクラテスの勇気

紀元前四二四年にアテネの人々がボイオティア地方のテバイの人々に敗北した時に、たった一人で隠遁生活に入ったソクラテスについて、アランはプラトンのように次の対話を創作しました。一九〇八年三月一日のプロポです。

「.....隠遁生活に入ったソクラテスの勇気を誰かが誉め称えました。ソクラテスはその称賛を聞きながら、笑い出して言いました。「私が勇敢であるとあなたは信じている。実際にはその時私は、逃げ回っていた人々よりも勇気があった訳ではない。それというのも私は、人が敵に追い詰められて背中を的のように見せる時、武器を捨てることは危険であり、酷く軽蔑されるに違いないと見做しているからだ。私にとっては、追跡して来た連中と正面から向き合って、両眼を開けて、眉をひそめ、最善を尽くそうとする時、恐怖が背中を押しているようだ。そして、自分の楯の背後で他の防御がないとしても出来るだけ良いものを隠している者を私は理解しないが、両眼を瞑って渦巻のように混乱した中に身を投じる者よりも勇気がある。彼ら二人のうち、一方の人の方が巧みな人であると少なくとも私は理解している」。

勇気についてのこの奇妙な話を聞きながら、若者たちは痺れたようにそこに残り残されて立っていました。彼らは何時もの観念が頭から飛び去って行ったように思われました。ソクラテスの微妙でとらえ難い話を聞くと、殆ど何時もそのような結果になるのでした。従って〈シビレエイ〉という異名が付けられていました。

しかし、生真面目な人間が立ち上がって、ソクラテスに拳を突きつけて叫びました。「あなたの行いが生まれる花々や果実を火に投げ入れる場所は、何処なのか。何故あなたは自分を最も恥ずべき最悪の徳に水準を下げるのでしょうか。だったらあなたは単純で素朴であるべきであり、あなたを褒める人々に話をさせて置くべきである。何故ならその町は、少なくとも善き行いを必要としていないからだ。熱狂的な話は、やはり彼には有益である。何故、洒落を言うのか。何故、裏の話をするのか。あなたは、人々が城壁の上で戦っている間、女や子供たちと一緒に地下室の奥に隠れに行く臆病者たちに対して、如何なる言い訳も理解しないのか。ソクラテスよ、あなたはその時逃げて、今日の話をしなかった方が良かったのだ。あなたの謙遜は皮肉っぽく、その勇気は私たちに与えた善よりももっと悪いものを生んでいる。あなたは何事も良き市民として行動するが、尊敬する気持ちがなく思考し、話をする。あなたの知性は、あなたの美德というものを悪くしている。あなたは神に従うが、神を信じていない。あなたには勇気があるが、勇気を素晴らしいと思っていない。あなたは祖国のために平然と死ぬだろうが、逆説の一つを主張するためにも一生懸命になるだろう。あなたは犬に骨を投げるように、愛もなく私たちに献身するのだろう。あなたの数々の美德は、その美德を無視している。〈神々〉の正しい怒りを恐れてくれ」。ソクラテスは底知れぬ沈思黙考に陥りました。既に、監獄の中では、奴隷が毒人参を粉に砕いていました」。

ソクラテスは自ら書いたものを残さなかった哲学者です。所謂〈対話〉によって 哲学を行っ

た哲学者であり、今日、ソクラテスの思想が理解出来るのは偏にプラトンが書き残したからです。恐らくアランもこのプロポで、プラトンと同じことを行ったのだと思います。但しプラトンのように、毒杯を呷る行為は神が人間に与えた行為と見倣すことはありません。アランは人間を神の奴隷と見倣すことを許さなかった哲学者であったとも言えます。歴史上、アランはソクラテスと直接会うことは不可能であり許されない行為ですが、アランにとってソクラテスの精神と出会うことは可能でした。自ら進んで毒杯を飲んだソクラテスの精神は、不滅の魂に対する自らの美德であった筈です。パイドンの口を借りてプラトンが記した『パイドン』を読めば解ります。死ぬことが勇気ある行為でなく、哲学者の勇気とは進んで魂の不滅を証明しようとした行為でした。詩人は詩を書くという不滅の行為によって自ら毒杯を呷る覚悟を決めた者です。そういう意味でアランは歴史家を認めていませんでした。歴史とは〈現代〉を生きる者のためのものであり、歴史上の人物を死骸としか見ない歴史家を軽視していました。「これは私（アラン）が考え出した歴史の一頁ですが、それでも真実です。ことの起こりはシシリア島で、その島の中の何処かです」と書いて、一九〇九年十二月一日のプロポではピタゴラスとプラトンとアルキメデスが一緒に旅をすることになります。「しかし、歴史家はその中に入っていません。何故なら、お互いが実際に歴史的に出会うことがないなら一緒にすることは出来ない、と歴史家は言うからです。でもお互いが出会う方法は沢山ある、と私は教養のない歴史家へ説明しなければならないのでしょうか。あゝ、年表なんか私は気にしません」。

歴史家は、三人の年表を調べるに違いありません。因みに、ピタゴラスは紀元前六世紀頃の人であり、プラトンは紀元前四二八年～同三四八年頃、アルキメデスは紀元前二八七年～同二一二年の人ですから、三人が一緒に旅をする話は出鱈目であると言って歴史家はこのプロポを読むことはないでしょう。しかし、「全ては数字である」としたピタゴラスの思想は現代にも生きているのではないか、「肉体は滅びる、しかし思想は何世紀も跳ぶように生き続ける。これが真実の歴史です」とピタゴラスの口を借りてアランは言います。例えば、統計学者は数字だけでこの世を理解しようとしています。経済学者も数式によって経済を理解しようとしています。この世に法則があるとするなら、その多くの場合、数字で表そうとします。つまりピタゴラスは現代に生きている、とアランは言います。ソクラテスの勇気を理解しようとすることも歴史です。真の歴史とは死者を生かす学問でもある、とアランは言っています。（完）



人間嫌いの人は、物事を見る時必ず二面性があるということに中々納得しないで、自分の見方や考え方が真実であり、それ以外は認めようとしめない傾向があるようです。取分け、利害が絡んで来ると自分にとっての利益が齎す見方や考え方は、より一層他人の利益や自分の損害に与しないものに同調して行きます。自分にとっての利益が〈正義〉に変身します。強国が出張することが正義であるように、社会的地位の高い人が主張することが正義であると錯覚します。それが正義でなくて不正であっても、「お金持ちや権力者や名誉を得た人間」になれば、罰せられていないこともあり得る、とアランは一九〇八年三月六日のプロポを書き始めます。

「不幸なことにも、不正は何時も罰せられていないと認めなければならない。市場で不正が広がっていることは大変良くあることだ。その同じ不正により正義が無視されている間に、お金持ちや権力者や名誉を得た人間になることも大変良くあることだ。少なくとも、正義が与える内面的喜びも斟酌しなければならないし、それは何か自分を満足させるものであり、不安にさせるものでもある。そこには不正には決して分からない感情がある」と言うモラリストの言葉をアランは書いていますが、不正は何処にでもあるでしょうし、何時の時代にもあるでしょう。孔子や老子を生んだ中国でも、現代では役人の不正が蔓延しているらしいとのこと。権力を持つ者や実力のある者はルールに縛られないで自由に行動すべきでありルールを守るのは弱い人間である、という考えがあるとのこと。私は、弱肉強食の動物の世界を連想して仕舞います。社会のあらゆる面で強者が優遇されるのであるなら、まさに悪しき進化論の再現を予想して仕舞います。あるいは病人という弱者を救済する医学というものを軽視する考え方に、私は思考の未熟さを痛感します。

弱者がいるから強者がいるのであり、強者が生まれれば弱者も生まれます。両者は比較したり競争することによって生まれます。強くなければ満足しない者、勝たなければ充実しない者の考え方は、何時までも本当の満足感や充実感を味わい続けることが出来ません。何故なら他者に必ず勝つ必要があるなら、その他者は限りなく存在するからです。それは進歩ではなく向上でもありません。徒な功名心の捌け口に終わる可能性が高い虚栄心の表れでしかない場合が多いでしょう。救いは連帯感によって生まれる仲間意識への興奮が育む高揚感でしょうが、満足感や充実感は少なく、やがて孤独であることを実感することになります。何故なら人間は独りであるからです。真の満足感や充実感、集団から離れて自分自身に還る時に生まれます。独りであることを実感する時に真の楽しみに気付きます。真の喜びを手に入れます。そして美しい孤独を手に入れることによって、他者との美しい関係が光輝いて来ます。そのためには先ず独りの感情を訓練しなければなりません。何故なら二人の感情というものはなく、三人の感情もないからです。正確に言うなら、集団に感情というものはこの世に存在しないからです。

感情を訓練するのは独りです。従って独りで表現する者は、感情を抑制しなければなりません。そうしなければ美しいものになりません。感情には三段階があるとアランは『定義集』の「情動 (ÉMOTION)」などに書いています。最も動物的で一時的な感情を〈情動〉として、喜び、笑い、恐怖、怒りを表します。それらの記憶を可能にする継続した一連の感情は〈情

熱（PASSION）として、愛、野心、吝嗇、恨み辛み、敬意などを表します。そして、最も高次の感情が〈情操（SENTIMENT）〉です。最も美しい感情であり、まさに人間が人間として必要な可能が情操です。定められた音を表すことによって美しい音楽を奏でることが出来ます。ルールを無視する者に美は宿りません。つまり不正を働く者に美は宿りません。美しいものは正しいものである、とアランは言っています。

「美しい詩句は、それによって表現されている思想も正しいに違いないとわれわれに告げる」（森有正訳）とアランは『定義集』の中の「美しさ（BEAU）」に書いています。従って、美しい感情も正しいに違いありません。情動でもなく情熱でもない感情です。まさに美しい感情とは情操です。愛でも野心でも吝嗇でも恨み辛みでも敬意でもないのです。愛するだけでは美しくないのです。尊敬する心も美しくありません。愛したり尊敬したりすることによって、自らの感情がモラリストとして守るべき正義を手に入れた時から美しくなるのであり、自らの感情を情操に高めることが可能になるのです。その様な感情の周りには自然と人々も集まります。その集まりは、恐怖や利害のために集まるものではなくて、美しい音楽を聴いたり、美しい絵画を鑑賞したり、美しい文学を知るために集まるのです。そして、正直で自然な感情そのものが魅力となっている主宰者たちの情操に自らを高めようとしします。アランはモラリストの言葉を借りて次のように書いて、このプロポを終えています、「……例えば嘘をつく嘘つきは決して信じられない。そして、もしも全世界の人々が何時も嘘をついていたとしても、最早誰も騙されている訳にはいかないのだ。それ故に正義には何時も友人たちがおり、信じられない位に誠実で率直である」。

勿論、友人たちのいる〈誠実で率直である〉正義の感情は、情動や情熱に止まらず、情操へと訓練された人の感情であることに間違いないのです。（完）

作家が表現することは、自分の思考や思想を搾り出すように外部へ押し出すことであると言われていています。それが創作になるのであり、模倣や転写と異なります。後者には基本的にお手本がありますが、前者にはそれが無いことが条件になるのは必定と思われます。その結果、前者には当然のことながら、何を表現しても良いとする自由がなければなりません。しかし自由であっても、自らその自由を規制して行くことも多く見受けられます。

嘗ての詩作には、押韻やソネット（十四行詩）のように色々な決まり事がありました。音楽にも和音やソナタ形式などのような決まり事があり、絵画にも構図や遠近法などの決まり事がありました。ところが現代詩や現代音楽や現代絵画は、これらの決まり事を全て放棄して、あらゆる自由を表現しようとする〈運動〉のように見えます。〈運動〉であるなら、違う運動もある筈ですが、この運動は変わることのない流れとなって大海へ注ぎ込み、あらゆる流れを包含しているようにも見えます。つまり伝統的な決まり事を削りに削って最小化したために、新たに自ら固有の決まり事を構築する才能が必要となりました。そして更に、自分自身で設けた決まり事の本質について説明する能力も必要になりました。説明するためには散文が最も分かり易いですから、言葉を駆使する能力も必要になって来ます。因みに、ボードレールは優れた美術批評家であり、『パリの憂鬱』のような散文詩も創りました。ランボーも、詩集『イルユミナシオン』に見るように多くの散文詩や定型詩を破壊して散文を行分けしたかのような自由詩を創り出しました。ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲には現代音楽を予感させ嚆矢となるような旋律があり、セザンヌにはサント・ヴィクトワール山や静物を描いた現代絵画の萌芽的作品が沢山あります。いずれもそれらの作品については自らの言葉にしる、自らの多くの作品を通した他者からの言葉にしる、作品を完成させる必然性や決まり事への説明が求められました。現代芸術においては、天才は天才である所以を説明する必要がありました。自分で自分なりの固有の決まり事を作っていくのですから当然の分析であり、天才であれば自然な作業でもありました。

ところが天才でない人が天才の真似をした結果、駄作ばかりの山が至る所に出来上がりました。もっとも、駄作だけなら生活を豊かにする楽しみとしてまだ救いはあります。しかし、自らの人生に名誉や財産が手に入れば、自らを天才と錯覚して仕舞う中世の領主のような精神の人が棲息して仕舞います。この様な反動的な人は一度名誉や財産を失えば最早天才でなくなり、不幸な人生の山ばかりが増えて行くこととなります。

「文明社会には精気と若い才能ある人々が不足している。あなた（若い才能ある作家）の本は感嘆され愛され読まれることだろう。あなたは結婚して、それなりにお金持ちになるだろう。冬になればエジプトで暮らし、春にはロンドンだ。若者たちはあなたのネクタイやチョッキを真似て身に付けるだろう。...（中略）...先ずは実践せよ。さすれば信仰はやって来る。信仰に値する敬意を全て良く理解するには、強くなる訓練をしなければならない。あなたは伝統とヒエラルキー（階級制度）を正しく判断する地位にいない。先ずは蜂蜜の味をみることだ。そうすれば、あなたは蜜蜂を愛するようになるだろう。やらなければならないことが分かったなら、良く生きることは良く考えることに通じているだろう。それは大臣以上の歴史になり、アカデミー会員全員

の歴史だ」とフランスの文壇で高い地位に就いていたアカデミー会員の老作家が若い作家に忠告していた会話の内容を、アランはその儘一九〇八年三月九日のプロポに書きました。思考する前に行動することは、幸福になる方法でもあります。〈先ずは蜂蜜の味をみること〉が、幸福を味わうことになります。そのためには老作家の忠告を受け入れることにあるのですが、それなりに不自由もある訳です。〈首輪〉を付けた犬のように生きねばなりません。

例えば、太陽を緑色に描いた絵を認めようとしなかった明治時代の画壇に、フランスの絵画を観てきた高村光太郎は猛然と抵抗して、有名なエッセイ「緑色の太陽」を書きました。所謂、地方色（日本らしい色）ばかりを意識して描けば、「芸術の墮落が芽を吹いて来る」と批判しています。日本人が油絵を描けば、自然に日本人らしい油絵になるのであって、英国人が描けば英国人らしい油絵になるのである、と高村光太郎は言っています。つまり描きたいように描かなくなって紅蓮の太陽を描き、老作家の忠告に従ってばかりいたり、冬のエジプトや春のロンドンで暮らすことばかり考えて描けば、芸術は墮落するのでしょうか。そんな風にならないためには、狼になって緑色の太陽を描くことです。絶対的な自由を手に入れている狼になって、真の現代芸術家になることです。狼は、首輪を付けた犬に言います、「「繋がっているのか。それでは行きたい処へ走って行けないのか」。狼は嬉しそうに跳ね回り、消えて行きました」と書いて、アランはこのプロポを結んでいます。

狼は、決して狼らしさを表そうとしません。只、自由なだけです。〈嬉しそうに跳ね回り、消えて行く〉処があるのです。首輪を付けていなければ自分らしさを表せない、と思っている犬と全く反対です。確かに、犬には名誉と財産があるのですが、〈行きたい処〉もなく、〈嬉しそうに跳ね回る〉ことが出来ないのです。真の幸福が犬に訪れることはないでしょう。何故なら、幸福とは意識したり考えることではなく、そうする前に行動することにあるからです。老作家のことも、エジプトもロンドンのことも考えないで自由に行動することにあるからです。そこに芸術の真の喜びがあります。そこに人間として生きる真の楽しみがあります。喜びや楽しみを様々な側面から説明することです。それ程充実した作業はありません。そこに現代芸術の神髄があります。（完）

現代の基本的な間違いは、あらゆることに速さを求めていることにあると思います、とアランは一九〇八年三月十七日のプロポを書き始めています。出勤前の時間は、労働者にとってまさに戦場と同じです。敵に後れを取れば敗戦につながりますから、何事も必死で急いで行きます。それではここでの敵とは何でしょうか。それは時間です。定時に出勤出来なければ遅刻ですから、労働者にとっての敗戦を意味します。そして、遅刻しないで済んだとしても、ペンで書くのは遅いですからタイプライターを使い、手紙で知らせるのは知らせるのでは遅いですから電話で大声を出して話をします。速い生活が求められます。

しかし、速い生活には多くの見えなくなるものがあります。活字や写真になった事物の概略しか見ていません。事物そのものを見ようとしません。何故なら事物そのものよりも、事物のサイズとか色とか到着日とか、〈概略〉しか必要でないからです。蜜蜂のように活発に活動しますが、やることは何時も同じ行為であり、花と巣を往復するだけです。思考するにも、〈準備された回路〉で走って思考します。従って、この世界が如何に作られているのかも分かりません。「通りを閉じ込めている丘々は青い靄に包み込まれて」いることも、「水溜まりが、ダイヤモンドのように光輝いて」いることも知りません。速い生活は経済状態を良くすることがあっても、「蜜蜂の愚かな行動へ、直ぐに導かれていくこと」になるのですから、本物の事物も人間も見ていません。本物の季節は決して速く進みません。ゆっくりと規則正しく進みます。それに反して「弾丸のように唸って目的地に向かって行く蜜蜂人間の彼らに、何が見えていたのでしょうか」とアランは質問しています。経済効果を追求する余り、人間の本質を見失う危険を、アランは次のように書いています。

「(蜜蜂人間の) 彼らの眼は、もう事物を見ていません。彼らは、新聞や本の中に書かれている事物の概略しか見ていません。人間たちは世界を丸薬にして飲み込み、科学を錠剤にして飲み込むのです。最早話をしませんし、暗誦もしません。言葉は貨幣のように打たれ、同じ様に流通します。熟考しようと思う者も、食料品屋のカatalogを捲ったりしないで、小麦を葡萄酒に物々交換したいと思えるくらい子供のように見えます。準備された回路で私たちは走って考えます。もしも人間的生活を生きたいのなら、もしもこの世界が如何に作られているのかを知りたいのなら、乞食のような生活をしなければならないだろうと私(アラン)は思うことが良くあります」。

〈乞食のような生活〉とは、時間に追われなくて、本物の事物をじっくりと見ることであり、本当の人間とじっくりと話をすることです。一方的で自分に都合の良い側面だけで見るのではなく、相手から何を貰えるのかを理解するのです。乞食は、自分が何を与えるのではなく、相手が何かを呉れるのを待ち続けます。つまり世界が提供するものを受容する容器を所有することが、世界を理解する方法になります。まさに乞食が行うことですが、乞食は決して速く走りません。自然を受け入れ、世界を受け入れます。

それとは反対に、物を売る人は売りながら走り回ります。その方が売れるからです。ここに販売の奥義があります。買手が考え込むと、売れる物も売れなくなります。考え込まないように速い行動が求められます。商品も手許になければなりません。従って商品も速く仕入れなければなら

りません。そして出来る限りの経費を節約します。その方が儲かるからです。利益のことが頭から離れませんから、自然を見る暇もなく、世界を抽象して金額だけで表そうとします。相対の世界なら理解しますが、絶対の世界を見ようとしなくなります。売手と買手の関係から離れられず、自己と他者と比べることから生じる喜びに専念します。競争の原理に基づく思考を目指します。売上げを伸ばすためにあらゆる創意工夫を尽くしますから、売上金額という数字の世界しか見えなくなり、事物そのもの人間そのものは無用になります。実利的目標が次から次に現れて、そこを目指して没頭します。事物の移動は速くなり、人間の思考も効率性ばかりを重視して来ます。目標達成に不必要なものは削除されて、無駄をなくした速い生活に埋没して行きます。確かに、一瞬一瞬の生き甲斐はあるのですが、幸福を感じることはありません。何故なら幸福とは、幸福を感じる感情のことであり、速い生活にはこの感情が置いてきぼりにされているからです。真実は論理のみによって把握されるものではなく、事物そのものを味わい、人間そのものに接することによって理解されます。苺の味は、実際に苺そのものを食べてみないと分かりません。けちと噂されていた人が、付き合っただけで仲良くなれば実に気前が良いのに驚嘆することも良くあります。抽象された記号や数字で思考しないことです。〈準備された回路〉で走って思考しないことです。じっくりと本物を見て正しく思考することです。そのためには即断即決せずに、同一の事物と人間を、時間を置いて再度見ることです。真実を理解するためには必要な方法です。因みに、旅先で曇った日に見た海の風景は、晴れた翌日に見ると全く別の風景に見えることは良くあります。それでも二つの風景は同一のものです。それが真実なのです。人々は同じものを幾つも見ると余裕が必要で、そこからは速い生活には不可能だった、真の理解を待む思考が生まれるのは確かなようです。真実には余裕が必要です。（完）

一九〇八年三月十三日は金曜日とのことでした。この日は、カトリック教徒が多いフランスでは、旅行や結婚式や取引の契約を避けるようです。でも宝籤を買いに走った人もおりました。何故なら、十三日と金曜日という二つの不吉が重なったことは、賭けをする人々には有利と見えたからです、とアランは一九〇八年三月二四日のプロポを書き始めています。

我が国にも、縁起が悪いから、という理由で旅行や結婚式などを敬遠する人々もおります。〈四〉は〈死〉を連想させる数字であるから、やはり縁起が悪いと言って嫌う人々もいるようです。そんなことを本気に信じている訳ではないのですが、やはり気になって〈四〉を避けようとする人も多いのではないのでしょうか。あるいは古代中国の陰陽五行説や、暦注の六輝（先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口）などの影響を受ける場合も多いようです。実際に、仏滅の日には結婚式場は休日になり、友引の日には斎場がお休みになるのですから、この様な習慣の全てが社会生活と無関係になっている訳でもありません。でも仏滅に結婚すると本当に不幸になるのでしょうか。友引には茶毘に付してはいけないのでしょうか。それらは本当に、生きている者に関係してくるのでしょうか。誰も明確に答えられないのですが、社会生活の面からそのように決定されているかの如き営みを行っているのですから、それに従った行動を取るしかなくなってきます。

本心を言うなら、殆どの人々は仏滅や友引が真の原因になり得ると思っていない。しかし、そう思わなくても未来を予想することについて、「自分の考えを支えとして事に当たれる強い人は非常に少ない」とアランは言います。十三日の金曜日についても、「素直に無視出来ますが、それでもそのことを考えると或る種の不安を感じます。それを齎すのは私たちの希望であり恐怖心ですが、それらは理性の働きよりも寧ろ観念の連合によって多くが規定されます。その上、私たちに決して苦痛を与えなかった人物が、私たちの記憶と不吉な出来事に結びつくと、悲しい出来事として理解するばかりです。如何なる理性も、この感情のメカニズムに対抗出来ません。私（アラン）は記憶が現れるのを妨げることが出来ません。記憶を取り除くことが出来ませんし、悲しい出来事の時のマントは記憶を思い起こします」。迷信についても同じであるとアランは言います。

迷信がどんなに下らないとしても、「悪い前兆であると言われると、その様な場合と悪いことが同時に起きる可能性を考えざるを得ません。しかし、私は反抗します。私はこの不条理で馬鹿らしい関係を打破したいのです。力強くそのことを考えることが、正しい行いです。従って私は強固になって関係を断ち切りたいのです」。そのためには盲信したりしないで、注意力を働かせて習慣的に行っていることを、もっと強くなって思考して行く理性と論理の道をもっと深く掘り下げることです、とアランは書いています。注意力を働かせることです。良く見て思考することです。

食卓が十三人にならないようにしたい人は、現在の陰気なイメージを追い払うことばかり考えているのであり、来たるべき不幸を避けることは思考しない人です。十三人になれば不幸になるから、十三人にならないように考えることは既に間違った考えであると言わねばならない筈

です。しかし、「間違った考えでも力を持つことが出来るのであり、考えが間違っていると解っている人でも事情は同じです」と書いて、アランはこのプロポを結んでいます。

間違った考えであると解っていても、人々はその考えが無力でないのを知っています。何故なら、不吉な思いを感じているからです。悲しい気持ちになっているからです。しかし、不吉な思いや悲しい気持ちを自分の力で克服しない限り、間違った考えを間違いであると言えない生活に埋没して仕舞います。それはやがて裸の王様を生む社会へ向かい、赤信号を皆で渡れば怖くない行動をとる生活になるかもしれません。従って、まずは注意力を働かせて、良く見て思考することです。

そもそも十三日の金曜日は何故不吉なのでしょう。それは、イエス・キリストが十字架につけられて処刑された日であるからと言われていています。それでは注意深く聖書を読んで見ましょう。「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」のいずれを読んでも、明確に〈十三日の金曜日〉と書かれていません。間接的にその日が金曜日であったらと推測することが可能だけです。つまり「三日後に復活する」とイエスが言っていたために、安息日（日曜日）が終わって週の初めの日（月曜日）にマグダラのマリアがイエスの墓を見て、復活を確認したからだろうと思われます。月曜日から逆算して三日前が金曜日であったと推測出来るだけで、十字架で死んだ日が金曜日と明確に書かれていませんし、まして十三日という日も書かれていません。私は聖書の研究家ではありませんから確かなことは言えませんが、後世の人々が聖書を繙いて、様々な書誌学的研究を通して出てきた俗説の可能性が高いように思われます。勿論、これも私の推論です。しかし、如何なる説も流布されると、それが〈事実〉の如く扱われて〈歴史〉になって行くことは良くあり得ます。そして俗説にしろ、一度流布されると、それを覆すためには膨大な労力かけて検証するための長い時間が必要になってきます。それこそ新たな証拠が必要になってきますから、極めて困難な作業になります。従って中々修正出来ないために「間違った考えでも力を持つことが出来る」のです。しかし、私たちは注意力を働かせて、良く見て深く思考することが肝心です。そうすれば間違いの原因を発見する可能性が生まれてきます。そして、陰気な感情を生む〈関連性〉が稀薄になってくる筈です。様々な精神の健全性が保持されてきます。十三日の金曜日や仏滅の日に結婚しても幸せになれるでしょうし、四の数字も不吉な数字でなくなり、逆に幸運の数字になることもあるでしょう。因みに、我が家の電話番号には四が入っています。自動車のナンバーも四から始まっていますから、何時も十分に注意して運転しようと努めています。（完）



## 九十 もしフランスが病気なら

フランスという国が病気であったなら、如何なる現象が起きているのでしょうか。アランは「危篤状態だ。長く保たないだろう」とフランスという病人を診ている医者 of 独り言を書いて、一九〇八年四月五日のプロポを始めます。医者が病人に薬を売りつけるのは、昔も今も変わらないようです。又、フランスも日本も変わらないようですが、勿論、誠実な医者も多くいるでしょうから、そんなにも心配するようなことではないかもしれません。しかし人数は少なくとも、やはり所謂悪徳医者もいるのです。その原因は何でしょうか。それは監視所の人間を間違っただからである、とアランは言います。

「医者たちは、病人であれば十分に愛しますし、先の尖った帽子を被った病人たちの一人ひとりが丸薬の缶を売りつけられているのを私は良く見ます。しかし、医者たちの中にも誠実な人が何人もいることを私は知っています。彼らが汚れて真っ黒になる原因は何処から齎されるのでしょうか。それがやって来るのは、監視所の人を間違っただけからです」。

国家や地方自治体には色々な監視機関があります。会計検査院は国家予算の無駄な支出などを監視しています。県教育委員会は学校の活動を監視しています。労働基準監督署は労働者の就業実態などを監視しています。これらは各々が、定められた領域の活動を監視する機関です。様々な機関の中にも、その活動やお金や働く者を監視する人がおります。外部監査人の公認会計士であったり、内部の監事などです。暴走や停滞や間違いを発見する人々です。行き過ぎや怠慢や錯誤を発見するために監視する人の選択を間違えると、組織は病気になるとアランは言います。そういう意味でもアランにとっては、圧制とか独裁は最も憎悪し嫌悪したものの一つでした。特定の人間を暴走させない社会が重要です。病人に沢山の〈丸薬の缶〉を与えて儲けようとする医者たちを監視する人は、適切に働いているのでしょうか。

残念ながら我が国には、そういう監視機関は殆どが機能していないように見えます。つまり人間の体内に譬えれば、悪の根源である病原菌を退治する白血球の役割が殆ど機能していないのです。その結果、不正や怠慢や無気力という病気が巣くっているようです。赤字で病院が閉鎖されないために、沢山の薬が病人に与えられているとすれば、最早犯罪に近い行為です。何故なら人間を間接的に殺すことになるからです。病院や学校などは本来、儲ける処ではない筈です。そういう機関に効率性を導入させた政策そのものが、既に監視人の不在を証明しています。

又、一日八時間労働を守らずに、労働基準法の趣旨を弁えないで長時間労働を可能にする脱法行為が日常化している企業も少なくないようです。労働は本来、生活を豊かにするためのものであるのに、長時間労働によって人間を疲弊させています。最悪の場合には自殺する者も出てきます。これも人間を間接的に殺しています。我が国の毎年の自殺者数は、近年になって約二万人から約三万人に増加しています。この人数は、交通事故死亡者数の約三倍です。

人間の生活は量よりも質が大切です。幾ら長生きしても、寝たきり老人として長生きするのでは、やはり人生の核心や本質を喪失している場合が多いと思います。勿論、俳人の正岡子規のように病床に伏せていながらも、なお創作し続けて立派に生きた人間もおりますが、その様な人間は例外中の例外でしょう。人間の生活の質を良くする方法には、やはり自然や昔からの健康的

な生活が重要であることをアランは言っています。病人になっていると見做したフランスという国を治療する医者たちのことや、その治療についての感想を、アランは次のように述べています。

「友人のフランスは偉大です。もしも私がお前にそのフランスの場所に美しい夜を与えたなら、そしてもしもお前を小鳥たちが沢山いる小さな森の端にある小さな丘の斜面に降ろしたなら、そこからはゆったりと流れる河が見え、霧に包まれて町は煙っていて、大地は犁で耕されて黒褐色をしていて、お前は美しい朝を毎日見るでしょう。枯れる花瓶の花とは違う花を見るでしょう。実を結ばない花の情熱ではありません。... (中略) ...解剖を行っていた階段教室から出てきた医学生が次のように言っているのが聞こえるようです。「人間は腐敗するしかない」。

大都市はお前が聴いたコンサートや夜の時間を忘れる催し物とは別のものを与えます。それ自体が古くからある研究所で、全てがかび臭く、沈む夕陽は後光のように見えます。お前は、今は大衆の流れに従いなさい。ビュット＝ショーモン公園(1)まで行くが良い。お前は最高のものを見るでしょう。市内電車が唸りを上げて行く通りから二歩目に建つ七階建ての家の真ん中で、お前は密生した短い草で覆われた丘の頂上を見ます。その頂上には全く手つかずの雛菊の花が咲いていて、古代ケルト時代のドルイド僧(2)がいた時代のようなようでした」。

病人を治療するには薬は有効です。人生の時間を長くしてくれます。しかし、自然や昔からの健康的な生活は、人間の生きる質を高めてくれます。〈手つかずの雛菊の花〉や〈古代ケルト時代〉の生活も人間の精神という質を高めてくれるのです。(完)

(1) パリ北東部の十九区の高台にある公園で、第二帝政時代に整備された。

(2) 古代ケルト族の祭司で、教育や裁判にも携わった。

手品師の技を奇跡と呼ぶ人は殆どおりません。何故なら、その技には必ず仕掛があると信じているからです。その仕掛を正確に説明出来ないとしても、それは手品師が上手に隠しているからで、決して奇跡であると信じません。何故なら奇跡には仕掛や因果律を超えた、説明出来ない部分があると信じていることでもあるからです。アランは一九〇八年四月十六日のプロポに書いています。

「手品師が一瞬の動作で籠もろとも生きた鳥を消したり、手に持っているシチュー鍋から生きた鶏や兎を取り出したり、あるいは袖をまくり上げた後で長さ十メートルのスカーフを観客のポケットから取り出すのを見ると、出来事の本当の状況が分からなくなるのは明らかです。少なくとも誰もそれらが奇跡であるとは言いません。何故なら普通のやり方で手品師は動いているのであって、単に上手に隠すことに気を配っているだけであると誰もが知っているからです。」

それに対して奇跡を信じる人々は、譬え手品師と同じ現象を見ても、それを奇跡であると信じて仕舞います。フランス南西部のルルドの泉から湧出している水は、数々の難病を治癒したことから奇跡の水と言われています。事の始まりは、一八五八年二月十一日に十四歳であった少女ベルナデット・スビルーがルルド郊外のマッサビエルの洞窟のそばで薪拾いをしている時、初めて聖母マリアと出会ってこの泉を知ったとのことでした。フランスのみならず世界中で奇跡の水として有名です。カトリック教徒にとって、ルルドは聖地になっていて、現在でも有名な巡礼地になっています。

しかし、奇跡に対して慎重になっている者は、奇跡の水を分析しようとします。その結果、水素水であったことが判明しました。科学的に分析して理解出来たのですが、それでも奇跡を信じる者は多くおります。何故なら、〈奇跡が起きないようにする時が幸せ〉であるからです。不幸な時は奇跡を願います。しかし、幸せな時は奇跡が起きる必要がないのです。

「精神を呼び起こしてこの世とは別の世界の徴を探す者たちは、この様に考えて上手く自分を守ります。まさしく彼らは慎重であることを信用しません。そんなことは望みません。彼らは奇跡を望み、希望し、期待します。奇跡が起きないようにする時が幸せです、その時は人間の運命、最善の正義、そして私たちの感情の中にあるより純粋なものとしての永遠性についての考えを確信する時です。」

奇跡を永遠のものにするのは不幸な者ではありません。カトリック教徒として幸せになっている者が、奇跡の永遠性を確信しているのです。この逆説は、人間の幸福が奇跡を超えるのを証明しているとも言えます。幸福の者は、奇跡に驚嘆しません。そういう意味では、奇跡を当たり前のこととして理解しているのです。しかし、交霊術者は昔の不幸を説明しなければなりません。不幸がなければ奇跡も無いからです。交霊術者は、幸福な者の昔の不幸を、言葉巧みに思い出させる必要があります。幸福になれる筈が無いと絶望した日々を、現在の幸福な者の脳によって思い出させる必要があります。

「もしもこれらの観念（永遠性についての考え）がなかったならば、彼らは曲芸師の演技とか手品師の業とか立派な物理学者の単なる実験を見るのと同じ眼で不思議な出来事を考えるでしょ

うし、証人にもなるでしょう。何故なら結局のところ、私たちが理解しない現象には事欠かないからです。その時の私たちは、時計がカチカチいう音を聞く子供に似ています。私たちは目覚めます。喜びます。見抜こうとします。驚きます。しかし、心の底まで動かされませんでした。それらは決して交霊術者を動かす出来事でないのが明白に分かるのですが、交霊術者はそれらに説明を与えます。つまり胸の中に宿っている昔の古い観念や古い夢が、何時も脳みそに蘇って来ようとしているのです。」

この様に書いてアランはこのプロポを終えています。交霊術者は言葉と脳と科学を巧みに利用します。この世には合理的に説明出来ないことは幾らでもあります。時計の中を見たことがない子供は、カチカチいう音が不可思議なものとして受け取ります。しかし幸福を実感する者は、それを言葉で説明しようとしません。何故なら、それは不可能であることを知っているからです。〈脳みそ〉で分析しようとしません。何故なら、〈胸の中に宿っている昔の古い観念や古い夢が、何時も脳みそに蘇って来〉ることはないからです。そして、科学によって理解しようとしません。何故なら、時計の中を科学に基づいて調べても、幸福になれないことを了知しているからです。奇跡は幸福と共にあるのです。従って、ルルドの水の奇跡も、奇跡であるためにはカトリック教徒であることが条件になっている所以です。（完）

ユージェーヌ・ブリュー（一八五八～一九三二）は、演劇革新運動を行ったアンドレ・アントワーン（一八五八～一九四三）が一八八七年にパリに創設した自由劇場の代表的な作者の一人です。社会問題を題材として戯曲作品を創りましたが、コメディ＝フランセーズ初演の傾向演劇「シモーヌ」は痴情による犯罪が主題のため激しく非難されました。その他の作家も、浮気した妻を殺す夫が主題となった作品などを創りましたが、アランは一九〇八年四月十九日のプロポでこれらの殺人について論じています。

「性的欲望には、動物の裡にも同じものを見ることが出来るように、殺人にまで行き得る激しい何かがあるのは確かです。文明化された男が自分の妻を殺すのは、多分この衝動があるからです。しかし、別なものも多くあります。都会の男の裡には、欲望はそんなにも強くありません。人間の意志は、自尊心とか恐怖心によって支えられていさえすれば、容易に勝利を収めます。自分の妻を殺したこの芝居じみた夫は、五月蠅くしているよりも寧ろ欲望に抵抗することが出来るのは確かでした。文明化された人間は、何時も大変疲れていて、そこでの美德には大変飽き飽きしています。素晴らしいこととは、情念という雷雨が大変良く稲妻を放ち、欲望が混じることもなく雷を落とすことです。」

雷が落ちるのは、必ずしも性的欲望という本能からではありません。自尊心を傷付けられたと感じた時、あるいは恐怖心からじっとしていられなくなった時に、人間は激昂して行くのです。決して本能ばかりからではない、とアランは言います。夫婦間の親密な関係においても本能的に癩に障ると「今の言い方は何だ！」と怒鳴って仕舞います。原因は横柄な言い方にあり、決して重大な原因があった訳でもなかったのです。

又、強姦を企む男は、下等な欲望である本能の言いなりになっているのは明白です。しかし、妻に浮気されて復讐する夫の行為は本能からではありません。嫉妬し復讐する感情は、本能からは乖離しています。その夫の欲望の温度を測る体温計や、血液や気分の流れを測る速度計があって、その体温や速度を測れたとしたなら、その温度計は平熱であり、速度計はゼロを示していることをアランは確信していると言います。嫉妬は、思わず興奮して湧出する感情ではないのです。嫉妬が傷付け苛むのは心であると言われていますが、それは大変に上手い言い方である、とアランも同調しています。心の問題は、心で解決するしかないように思います。つまり一瞬の激情とか逆上する性質の側面を持った本能的感情や気分に従うものではないようです。時間をかけて心を作り直す必要があります。私たちの人生は、心次第で幸福にも不幸にもなるようです。妻の浮気相手に嫉妬して妻を殺す者は、妻を殺したいと願ったからです。そして自分の死も願っているからです。雷を落とすことがあっても、妻を見る眼を変えることは可能です。妻を別の感情で知覚することは可能です。殺したいと願う心を変えて、行動し、生きることは可能です。夫の嫉妬を理解するには、夫の幸福だった時を先ずは理解する必要があります。何故なら幸福がない処には嫉妬も生じないからです。

「廃位した王の激昂を理解するには、何とか王に在位するのを喜びに感じる何らかの観念を手に入れなければなりません。同様に、もしも私（アラン）が嫉妬の結果を理解したいなら、酔い

心地にさせる何らかの幸福を想像しなければなりません。その時、それは剣を振り上げる天使であって、動物ではないのです」と書いて、アランはこのプロポを終えています。天使の感情である情念で剣を振り上げることです。強姦を企てるような下等な欲望から剣を振り上げるのではないのです。前者は妻も自分も生かしますが、後者は妻も自分も殺すことになります。〈見ることは、見たいと思うことです。生きることは、生きたいと思うことです〉とアランは言います。嫉妬の中に悶々とする心から、広い空を生きるために行動することです。アランのプロポの中で最も美しいものの一つである一九〇九年五月二九日のプロポで、アランは次のように書いています。

「行動することは喜びです。知覚することも喜びであり、それは同じことです。私たちは生きることを決して咎められません。貪るように生きます。私たちは見て、触って、判断することを望んでいるのです。私たちは世界を広げたいと思います。生きる者は全てが朝の散歩者のようです。地平線まで段状に並んだもの全ては、私がそれを望むから意義あるものになるのです。さもなくば眼の奥をくすぐる位のことではしかありません。しかし、私は自問します。そこには小径があり、樹木があります。その青い線は、私が歩く丘です。劇場で良く眼にしますが、舞台装置家が一枚の布に着色して表すものです。しかし、私たちは直ぐにそれらの代わりに、遠くへ眼を向けます。最初の計画を引き出します。私たちの周りの現実世界にとっても同じことです。広い空は、眼には青でしかありません。しかし、それは私の頭の上に広がっています。見ることは、見たいと思うことです。生きることは、生きたいと思うことです」。

嫉妬という感情も動物的に扱う儘であったなら、生きることが困難になります。天使は人間を罰しません。動物的な感情が、天使の感情である情念へと昇華していく瞬間でもあります。心を変えるのは、まさに情念という感情です。（完）

我が国の華道、茶道、歌舞伎、日本舞踊、箏曲などの伝統芸術や伝統芸能には、家元制度があります。個人の感情や意見よりも、家元という伝統的な精神と技が優先される世界のです。毎年秋に開催される我が国最大の公募の美術展覧会である日展にも、もしかしたら個人の芸術表現よりも、伝統的形式的表現が優先される分野や領域があるのかもしれませんが。従って、個人よりも組織優先の考え方が強いために、公募展でありながら組織内の権力構造とか権威関係によって社会的名誉が決定されていく実態が新聞報道によって明らかにされました。

従って、近代芸術の基本である筈の個人の尊厳を基礎に置く芸術表現が、伝統や組織に基礎を置く表現によって、大きく制限されている実態が推測されます。仮に、この実態を潔しとするなら、我が国の現代の芸術は益々社会から乖離して、有用性すらも保証され得ない虚飾化された作品群の創造に埋没するしかないと考えます。翻って職人であるなら、切れ味抜群の包丁とか豪華絢爛な着物がその存在価値を担保してくれますが、所謂芸術作品を創造する芸術家にその様な有用性は曖昧であり、殆どの作者が二流の職人以上には評価されない現状が我が国には厳然として存在しているように思います。あるいは、目利きでない鑑賞家たちによって有価証券化した作品の流通しか生まれない市場の中で、真の芸術家ばかりが疲弊して行きます。

逆に、作者が死ねば、その作品の評価額が下落するという珍現象も、既に至る所で指摘されています。この逆転現象の原因は、生存中の作家の評価が自らの作品に起因するものでなく、作品そのものとは無縁である筈の地位や名誉や人間関係に基づくものであることが容易に推察出来ます。それはまさに鑑賞家たちの見識の低さと、美を観る自信のなさとか勇気のなさを証明しています。更に、鑑賞家諸氏が目利きになるための訓練を行い発表する機会も少なく、その様な環境は偏に伝統的形式的表現の温床になって行きます。美の世界には本来、裸の王様がいることは不可能です。何故なら、美は誰にも理解が可能であるからです。しかし、美を伝えるにはやはり訓練が必要ですから上手く表現することは困難ですが、美を感受することは誰にでも出来ますし、誰にでも分かっていることです。従って、鑑賞家も作者と同じ立場で行動すべきです。美しいものは、先ずは美しいと言えば良いのです。

「美は正しいものである」とアランは言います。作者にとっての美は、鑑賞家にとっての美と同一です。従って、間違った美は無いのですから、鑑賞家も作者と同じ立場で行動すべきです。一九〇八年四月二六日のプロポでアランは、フランスの家庭で父親が子供にいう金科玉条として次の言葉を挙げています。

「もしお前が人々の立場にあつて、人々がお前の立場にあつたなら、お前と一緒に人々が行動して欲しいように、お前は人々と一緒に行動しなさい」。

公募展の日展の話に戻します。審査員は何故作者ばかりなのでしょう。優れた作品は描いた者でないと解らない、と信じているのでしょうか。伝統と形式という要塞に囲まれて擁護された象牙の塔にいないと美は理解出来ない、と信じているのでしょうか。学生やサラリーマンや主婦に美は理解出来ない、と信じているのでしょうか。もしもそういう先入観を持った人々の集団であるなら、我が国の芸術はガラパゴス化されて発展することなく、やがて化石化し風化して行っ

て仕舞います。芸術が風化して行って、全てが博物館や美術館に入って仕舞っても社会は存続していくでしょう。しかし個人の眼で見て、美しいもの正しいものを把握し切れなくなる現象が危険であると考えます。そういう意味で、個人の尊厳を堅守し切れなくなり、健全な人間の精神を育む見識を喪失させるようになる現象が危険であると考えます。そういう危険を回避するために、外国人の公準しか信用出来なくなる現象も危険であると考えます。何故なら、自らのことを自らが判断出来なくなる先に用意されているのは、真の喜びや楽しみを忘却した不幸と不信ばかりであるからです。アランはこのプロポを次の様に結んでいます。

「金融業者は証券取引所で賭けをしています、殆どの賭けに勝ちます。他の人が知るよりも早く知った重要な情報によっているからです。彼を見倣ってご覧下さい。「もし誰かがあなたのカードを見てから賭けたとしたなら、あなたは満足していられますか」と彼に言ってご覧下さい。彼は次のように答えるでしょう、「誰もが私のように情報を待ち伏せして待っているし、自分の手の内は隠して、私のものを見ようとしているのは分かっている。出来るものなら私の皮を剥ぎたがっている。私はそれに同意する。この闘いは公明正大なのだ」。

これらの例から、二つのことが分かります。まず第一には、大部分の人は自分の眼で見て正しくありたいと感じています。第二には、誰もが自分の行動だけは正当化されて余分な苦勞がないようにしたいのです。モラリストという言葉は私はあなたに譲りますし、あなたの金科玉条を私はあなたに返します」。

〈自分の行動だけは正当化されて余分な苦勞がないように〉するためには、〈自分の眼で見て正しくありたいと感じ〉る外に、他者の評価が必要です。社会のあらゆる人間と一緒に行動することです。それがモラリストです。芸術家もモラリストでなければなりません。（完）



## 九十四 回転テーブル

中華料理店などで眼にする回転テーブルは、考えて見れば社会の縮図のようなものです。誰かの手が右へ回転させようとする、他の人の手がそれを助けようとして同じ様に右へ回転させようとし、しかし、何もしないで只見ている人もおります。その回転テーブルに座る人々の想像力は平等ではありません。そして、私たちの行動が想像力に従っているのもどうしようもない、とアランは一九〇八年五月二日のプロポで書いています。「例えば指を上げるのと同時に、下げることは想像するのも全く不可能です。それ故に私はテーブルが回転し始めるのを期待する時、つまりテーブルが回転するのを想像する時、うっかりして私はテーブルを押します。立会者全員が平等に想像力を生き生きと持っていませんし、平等に固定させる能力も持っていません。それ故に彼らは、或る時は一つの動きを想像しますし、又或る時は別の動きを想像します。その結果、先駆者の震えを全ての人が熱心に指摘します。続いて、彼らの中でもっと頑固な想像力を持っている人が、その動きに一つの意味を与えますし、指の先から全ての人が見抜き、動きの概略を想像します。その時はテーブルがワルツを踊り始める時です」。

実を言えば、社会の動きも一人ひとりが判断して行動することは稀有なことです。独りの首相の想像力のみによって、社会という回転テーブルを右に回り出すと、独りの首相の想像力に沿うように動き出すことは十分に考えられます。取分け官僚たちの思考形態は長年の習慣によって、自ら思考し判断するための抵抗力を喪失していますから、首相の想像力を様々な社会の規定に整合させるための理論武装に邁進します。意を汲んで思考し行動することが、優秀な官僚と見做されて行きます。一度回転テーブルが動き出すと、皆が一つの意味をそこから汲み取ります。料理を一人ひとりに運ぶことであつたなら、その意味を汲み取ります。仮に〈集団的自衛権〉という料理を運ぶことであつたなら、それと逆の動きをとることは想像しなくなります。ところがアランが反対の回転を想像すると、想像した方向へ回転して行くこともあったのでした。回転テーブルに指を触れて反対の方向へ力を入れるためには、やはりその方向への回転を想像することで始まるのです。「殆ど全ての場合に私（アラン）は、想像した感覚でテーブルが回るようになります。想像力の結果によって、全ての場合に私が反対の回転を想像した瞬間に、そのテーブルは乱れ、震え上がり、停止し、屢々私が想像した方向へ新たに從って行くのでした」。

その時、一人の協力者がいればより早く新たな方向へ回転して行くことでしょう。一生懸命に手に力を入れて新たな方向へ回転させる人は、混乱を招くだけです。同じテーブルに着いている人々に了解を取り付ければ、もっと容易に回転させることが可能になりますから、予め前口上としての言葉で説明して納得して貰うことが重要になります。「...もっと決定的なのは前口上を操作した時のことでした。私はその時、目的とした前口上は大変に弱い一本の指を動かしながら、私の意に誠実ではっきりと理解して適用してくれた一人の協力者に満足することが出来ました」。

力尽くで行動するだけでは上手く行きません。右回転のテーブルを左回転にするのですから、そこには当然に皆の理解が必要になって来ます。そして、先ずは右回転を停止させることです。〈集団的自衛権〉の社会の動きも、先ずは停止させることです。幼稚なナショナリズムに基づく

団結力は想像以上に強力ですから、まずは冷静に思考し判断する環境を提供することです。情熱に言葉を預けてはいけません。情熱は競うことから容易に湧出して来ますが、味わうことを忘却します。例えば走りながら物を食べても味わえませんから、食べる時は必ず肉体を静止させます。もっと正確に言うなら、肉体と同様にテーブルが回転している時も、味わうことが疎かになって仕舞いますから、テーブルの回転を停止させようとしみます。回転を停止させる方法は一つしかありません。それは皆がじっくりと料理の味を楽しむことです。テーブルが回っていては落ち着いて食べる事が出来ません。

〈集団的自衛権〉の話も、戦争の話も、余り夢中にならないことです。日本という国、米国という国、中国という国、韓国という国、そしてあらゆる国を良く知り味わう努力をすることです。〈集団的自衛権〉の話だけに固執しようとする思考は、その国の全てを良く知ることは不可能であり、その様な人々にとっての社会も面白くない筈です。その国を良く知るためには、その国の言葉を勉強することも大切ですが、それ以上に実際にその国を訪問することも効果的です。それが味わうことに繋がる筈です。自然と国際交流が生まれて来て、テーブルも左回転に回り出すに違いありません。右回転の時は強力な指導者が必要だったかも知れませんが、左回転の時はそれ程強力な指導者は必要ではありません。市民の豊かな想像力が自然な力となって、一人ひとりの指先で回転させて行くことが可能になります。（完）

社会の中で生活する私たちは、時間を何時も気にしています。反対に、ロビンソン・クルーソーのように独り無人島で暮らすようになると、時間を気にすることは少なくなります。それ程極端な状況を想定しなくても、似たような経験は誰でも持っていると思います。例えば、都会から田舎へ行って暫く暮らした時も、似たような経験を持ちます。あるいは休日のため、サラリーマンが出勤しないで良い日の朝も、時間を気にしないで済みます。時間を気にする度合いが少なくなればなる程、社会との関わり合いも小さくなるのかもしれませんが。一九〇八年五月五日のプロポの初めに、アランは時間のことを次のように書いています。「日、週、月、年を数えるのは大変に簡単なように見えます。何故なら、私たちは社会の中で生活しているからです。何処へ行っても至る所で、時間を小刻みに細かく切る時計の針を眼にします。小ポケットには懐中時計があり、無意識に時間を見ます。この様にして私たちの想像力が、流れる時間から顔を背けることは決してありません。一日の各瞬間でも、私たちは何時何分なのか分かっています。そして、夜に目覚めても、時間や時刻のことを直ぐに考えます。私にはチクチク、タクタク、トクトクと音を出す懐中時計や置時計や掛時計があり、まるで何本もの糸で時間の巣を張っているようです。私の傍にある掛時計は、タペストリーの大輪の花のようであり、一時間毎に大きな音を出します。その上、十五分経ったことも私には分かります」。

ところが日や月のことは、都会で暮らす人も田舎で暮らす人も、同じ様に気にするようです。何故なら、種蒔きや収穫などを行う農業の仕事には季節が重要になってくるからです。無人島で暮らしていても、今日は何月何日であるのか、必ず認識しようとする筈です。しかし、ロビンソン・クルーソーのように独りだけで何年も暮らし、外部からの情報が一切得られない場合は、今日が何月何日であるのか、その認識が怪しくなってきました。アランは書いています。

「日々を数えるのに、懐中時計は殆ど使いません。しかし皆は数えており、その数え方は沢山あります。家計を計算する主婦は、或る種機械的に日々を数えます。というのもお腹が減ると食欲は間違いなく生じるからで、食べることや飲むことが忘れられることはありません。公務員の計算も日々を正確に数えます。それはお金という砂を流す砂時計のようなもので、流れて行くにつれて月になります。会計係は、全て帳面に日々を記載して商売をします。更に日々には記念日の名前が付けられ、記帳は数珠のように繋がって行きます。何かはその請求を邪魔するとしても繋がります。... (中略) ...もしロビンソン・クルーソーのようであるとか、少なくとも自然の中において町の中にいないとすれば、私たちは日々を数えるのに大変苦勞するでしょう。それというのも小石に日々の印を付けて行くのは、間違いを犯し易いからです。孤立した人間の記憶は、躊躇するばかりで迷って仕舞います。私は全ての日々を付けたのでしょうか、あるいは付けなかったのでしょうか。孤独な人間には解けない疑問です」。

時間を抽象した月日の正しい認識は、社会と共に可能になると言えます。この様にして曆（カレンダー）は、社会との関わり合いそのものでもあります。社会は時間を抽象します。ベルグソンが言ったように、抽象された時間は、カレンダーのように空間化されます。時間を知性によって抽象することによって、社会の共通項を産み出します。従って、そこから抜け落ちたものを想

像する行為も、実は社会にも個人にも必要になって来ます。過去に対しては〈歴史〉になり、未来に対しては〈計画〉になり得るものです。しかしアランの思想は、現在を抽象化した儘では決して許さないものでした。つまり現在を感じる行為と思考する行為を、恰も暦の中で合体させていたかのようでした。

「潮の満ち引きに時間や月を読むことでしょうし、太陽や星々や、取分け月の規則正しい満ち欠きの繰り返しは、驚く程の月々を数えています」。〈孤独な人間〉は、何とか自力で正しい暦を見出そうとします。そのための暦として太陰月が採用されたのである、とアランはこのプロポの結びに書いています。そして「赤い月は花にとっては恐ろしいと農家の人々が言う時、秋分の日から始まる太陰月は夜が寒くなると言いたいのです。しかし、夜を寒くするのは月であると言いませんし、そのことを考えもしません。彼らはそんなにも愚かではありません」と書いて、このプロポを結んでいます。

月は指標でしかありません。実のところ、指標が事物の原因になるのではありません。この場合の原因は太陽です。ところが太陽のことをすっかり忘れて、月が夜を寒くするのである、と錯覚することは意外と多いのです。温度計が高いから暑いと思えば、湿度が低いから木陰では涼しいのです。中国の船が日本の船にぶつかって来るから戦争になると思えば、私の友人のように北京で日本語を教えている熱心な日本人もおります。韓国の大手電機会社や自動車会社の製品は世界中を席卷していると思えば、その資本の半分以上は外国資金であるため配当金などで多くの利益が国外へ流失しているようです。更に労働者は低賃金です。失業率も高く、実質的には五人に一人は失業しているとのことです。（完）

フランスの郵便局へ行くと、絵葉書一枚出すにも、列に並ばなければなりません。各人の用件は区々であると思いますが、時間がかかりそうな人もそうでない人も同じ列に並ばなければなりません。従って、誰もが自分の順番が来るまで辛抱強く待っています。窓口の郵便局員が数人で全てを熟しています。奥にも局員がいるのですが、列に並んでいる人に対応して手を貸そうとする局員はおりません。当然と言えば当然ですが、もう少し効率的に捌いてくれないものかと苛々した経験があります。

同じ様な経験は、シャルル・ド・ゴール空港の売店でもありました。私は飲み水を一本買うだけでしたが、色々なパンを選んでから温めて貰う人も同じ列に並んでいましたから、なかなか順番が来ません。そのうちに新しく黒人女性の店員が一人増えました。すると私の後方にいた米国人らしき男は、待ちきれずに新しい店員の方へさっと思いましたが、順番を守るように諭されていました。あくまで従前の列の順番どおりなのです。黒人女性の店員のその毅然たる態度は、列に並んでいる他の人々の権利をまるで守っているような印象を受けて、或る種の爽やかな風のようなものが流れているように感じました。しかし、それにしても何故フランス人は効率が悪いのでしょうか。まるで役所のような仕事ぶりです。一九〇八年五月六日のプロポでアランは書いています。

「役所は、あべこべで非常識な世界です。役職が上がれば上がる程、力がなくなり、責任は大きくなります。軍隊では、上等兵が全てを行います。事務所では、最終の発送係が全てを行います。彼らの上には伍長がいて、軍人とか市民がおり、その仕事は次の二つの言葉の中にあります。監視することと、要約することです。その上には監視する人を監視したり、要約する人々を要約する人間たちの階級制度というものがあります。

事件というものには関係があります。官僚は、十ある関係を一つに凝縮することが仕事と見做しています。このやり方によって、十の関係が一つに合併させられます。各々の独自の性質が失われます」。つまり、〈各々の独自の性質〉を斟酌しないことが公平であるようです。飲み水を一本買う人も、パンを選んで温めて貰う人も、買う順番としては同じ列の中で抽象されて同一のものに見做されます。兎に角、早く並んだ人が早く買うことが出来る制度が、厳然と確立されているのです。

しかし、アランはそこに平等主義の欠点も認めています。購入する結果ばかりを見ないで、どういう理由で購入するのかその原因も見なくてはいけないのです。原因によって公平を確保する方法も必要です。

「複数の事件を同時に記述したくなるや否や、内容の無い型に嵌まった表現に陥ります。主義主張は無くなります。

統計の美德とはそういうもので、お役所的報告書の典型です。例えば百件の火事のうち三十件は放火で、五十件は過失で、二十件は工場からの出火であると私が言う時、そういうことを私が言っても何にもなりません。何故なら放火や過失には色々な場合があり、色々異なる原因が多くあるからです。これらの内容の無い報告書は、曖昧な法則によって表され、笑って済みます

しかない上等兵まで段々と降りて来ます。

その原因を把握し処方箋を見付けるために、自分から動いて事件まで行かなければなりません。自分の仕事に精通していない警視總監は、その騒ぎに関する報告書の作成を自分で行いません。彼はそこまで走って行き、命令を出します。そして、その交差点で車が衝突するかどうかを知るために見に行きます。このやり方は少しずつ行われて来ていますが、役所ではそれに抵抗して、上司の監視と行動の間で無駄なことが行われています。以上は、管理することが難しい理由です。物事の自然な流れによれば、権力と行動は切り離せません。杓子を持つ者は、スープを作る者でもあるのです」

と書いてこのプロポは終わります。

先程の黒人女性の店員に話を戻します。この店員の公平さは、それなりに爽やかなものでしたが、やはり列に並んでいる人々の〈原因〉に基づいた処理の仕方を創意工夫すべきであった、とアランなら言うだろうと思います。即ち、パン以外の物だけを購入する人だけに対応することです。「その原因を把握し処方箋を見付けるために、自分から動いて事件まで行かなければなりません」から、出来れば列の中に入って行って、短時間で処理出来る人だけを選別して、その人たちの列をもう一つ作ることだったのです。〈米国人らしき男〉がとった行動も、とっさにその合理性を感じ取った結果のものであったのだろうと思います。

しかし、パンを買う人々にとっては黒人女性の店員の〈恩恵〉は余り受けられなくなります。購入出来る順番という結果だけを見た公平性か、原因となる〈杓子〉を見ての公平性か、〈正義〉であるためのその選択は一筋縄では行きませんが、行動には権力が自然と結びついているとアランは言っています。〈米国人らしき男〉がとった行動が、実は世界中の多くの紛争の元になっているようにも思います。原因ばかりを見ようとするために、戦禍という結果であるスープの味が非常に不味くなっている場合が多過ぎるようになります。スープの味が不味くなった時は、暫くは誰にも分かり易い結果の公平性を尊重して、原因ばかりを見ないで、皆が少しずつ我慢して一列に並ぶことが〈正義〉に繋がる場合もある筈です。（完）

二十一世紀の我が国日本も、男女同権について様々な考えや意見が公表されていますが、大きく分けて二つに分類されるようです。一つは、肉体的物理的側面からの相違を除いて、全ての面において平等であるべきとするものです。もう一つは、肉体的物理的側面の外にもお互いの長所を重視して、それに相応しい活動をすべきであるとするものです。前者の考えは女性が多く、後者の考えは男性に多いようです。ところが女性でありながら、後者の考えを持つ者がいることもアランは一九〇八年五月八日のプロポで紹介しています。次に述べるのは、フランスの当時の婦人参政権論者の女性の意見です。

「女性たちの要求は少し滑稽と思います。自立した女性は或る種の怪物なのです。その女性は生まれた儘の自然に従っているのです。彼女は保護され大事にされる必要があります。子供の面影を見るという役割の他に、もしも彼女がそのことを幸福に思うのであれば、彼女の自然な役割は家庭を美しくするでしょうし、それは男性がそこに喜びと安らぎを見出すためでもあります。あるいはこう言った方が良ければ、それは奴隷の仕事です。しかしこの奴隷の仕事は、もし余り愚かでないならば、彼女を女王にします。説得力や微笑や阿諛や幾らかの自尊心によって支配しますが、それは彼女の最も貴重な化粧でもあります。そして、彼女には産婆とか電話交換手には決してない実際の自由を多く持っているとして強く信じて下さい」。

確かに、〈平等〉には自由を不完全なものにする側面があります。その良い例は労働時間です。近年まで我が国も、女性の午後十時以後の深夜労働は原則として禁止されていましたが、男女平等の原則に基づいて法律が改正され、女性の深夜労働も可能になりました。その結果、終電で帰宅する女性の人数も多くなり、お花やお茶を習う時間もなかなか見付からないようです。ところが、そのうちに男性から求婚されれば、女性は「家庭を美しくする」ことに励み出し、男性もそこに「喜びや安らぎ」を見出すことでしょう。そして女性の仕事は奴隷の仕事であっても、女性を女王にします。家庭という城壁の中で、全ての実権を握るようになり、「実際の自由」を手に入れます。〈平等〉に氣をとられていたなら、決して手にすることのなかった自由であり、まさに幸福な女性になりますが、そのためには夫や子供や自分自身への「説得力や微笑や阿諛や幾らかの自尊心」が必要です。決して無垢な心ではないそれらは、「最も貴重な化粧」である、とアランは言います。〈平等〉を熱心に求める無垢な心には無い、大人の女性としての〈化粧〉が女性を美しく見せるのです。大人には大人の幸福があり、幸福であればそれで良いと男性たちは言うことでしょう。

しかし、その様な幸福な女性ばかりではありません。アランは言います。

「しかし、全ての女性があなたと同じ様に幸福ではありません。全ての女性がそんなにも優しい男性と一緒にすることはありません。多くの女性はその様な幸福にはなれません。多くの女性は自分の心に忠実になりたいでしょうし、愛されれば愛される程、愛したいと思うでしょう。多くの女性は実際に一緒にになりたいと思いますし、愛を受ければ受ける程、与えたいと思います。多くの女性は、彼女の主人が支配している奴隷としてのこれらの策略を軽蔑します。以上が、もしも彼女たちに財産が無かったならば、財産を得るように仕事をしたいと思う理由になるので

すが、それは彼女たちが期待したり、選択したり、夫を追いかけないでいるようになれることなのです。そういうことは課長とか経営者とか顧客との依存関係の中に身を置くことであるのは、大変に明白です。少なくとも彼女たちは自分の課長たちを愛する必要がありません。彼女たちの仕事は決して気に入ったものではありませんが、要するに彼女たちは遊女というものには決してなりません。女性はそのことを望むことができますし、私は滑稽ではないと信じています」と書いてこのプロポを結んでいます。

この様にして、女性が何時までも幸福であり続けることは不可能です。従って、何時までも「養われている女性」として存続出来る保証もありません。課長や経営者や商店主となって働く必要があります。それらの仕事は、お茶やお花のように優雅で上品な振舞いではなくなりますが、「夫を追いかけないでいるようになれること」であり、自立した思考が出来る個人として、社会のあらゆる面に意見を述べる権利を手に入れます。真の民主主義社会の前提になり、所謂共和制社会の基本的な生活態度を生んで行きます。何故なら夫に「養われている女性」であったなら、夫の上司や社長へ正当な意見であっても言うことはまず出来ないからです。天皇制とか君主制とか封建制にとっては、連帯責任が必須であるからです。妻には当然のこのように夫との連帯責任が課せられます。

又、会社や団体などの我が国の組織には、殆どが精神的天皇制があり、精神的君主制があり、精神的封建制が巣くっています。個人には真の自由が抑えられます。つまり連帯責任の思想が、チームワーク、協同、目標、活性化などという観念の影で根を張って行きます。まさに初めに組織ありきの思想に雷同して行き、幸福という化粧をした平等の思想が生活の味付けをして行きます。しかしそこに真の自由は無い、とアランは言っているのです。女性が真の自由を手に入れるためには、二輪車にならなければならないようです。女性にとっての現代は、未だ男性のように何もしなくても立っていられる四輪車であってはならない時代なのかもしれません。つまり男女同権を意識し唱えて前進し続けなければ、多くの女性は自立して立ってられない時代なのかもしれません。「実際の自由」よりも真の自由を求めて絶えず前進することが、個人としての真の幸福へ繋がっているようにも見えます。そこからは、組織の意識から離れて、愛されるから愛するのではない自発的で自由な真の愛の姿が見えて来る筈です。（完）



二〇一四年九月二七日に起きた御嶽山の突然の噴火による死亡者は、行方不明六名を含めると六三名の多数にのぼり、火山災害としては戦後最悪とのこと。犠牲者は、殆どが噴石よっての即死であったようです。山頂付近から生還出来た人々もいますが、彼らは「奇跡のようだ」と言います。何故なら、噴石が運良く当たらなかったからです。一步間違えれば死ぬことになっていたからです。軽トラック位の大きさの石が落下して来るのですから堪ったものではありません。その様な時には神のことを考えます。自分の意志や考えを超えたものを感じる時、私たちは神のことを考えます。「生き残ったのは神様のお陰である」と自然に考えます。

或る男が交通事故に巻き込まれ、かすり傷だけで済んだ時も、「奇跡のようだ」と私たちは言う、とアランは一九〇八年五月十日のプロポを書き始めます。「それというのも、もしも右側に座っていたら死んでいただろうと考えるからです。直ぐに私たちはこの事故を神学者になって読もうとしますし、何か隠された意志があると思います。それは事故が人間の生活に関係して来るからです」と書いていますが、「隠された意志」を感じた時に、そこから神の意志を想定し、そして神の存在を確信するまでになって、まさしく神学者になってその意志を読もうとします。明確に神を見たこともないのに、何故神の存在を信じる人々が多くいるのでしょうか。そこには偶然を偶然と思わない人間の意志とか思想というものがあります。偶然を納得して証明することは困難ですが、そこに一つの定数のような存在を仮定することによって、因果律の必然性を証明すれば、事は容易に理解しやすくなります。そうしてみると、神を信じる人々は物事を容易に理解しようとする人々であるのは自明です。宗教は、〈直ぐに信じる人々〉のものに違いありません。

しかし、他方には容易に神を信じない人々もおります。色々な状況が違っていたなら、又違った結果になっていたかもしれません。全ては偶然に起こったのですから、結果も偶然のものであり、因果律の枠外へ抛擲されて行くばかりです。こうなれば原因も結果もありません。これからも何が起こるか分かりませんから、秩序の維持が困難になり、不安と恐怖が増大します。つまり予定が立たなくなり、人間への信頼がなくなります。又、信頼や信用がなくなれば契約行為も不可能になります。

しかしその様なことにならないように、社会には秩序が確立されています。偶然ばかりでは済まないように、物事は繰り返し行われるように強制されます。物事は疑わしくても、そこに自らの行為の必然性を確立させます。アランは次のように書いています。

「私が書いているこの紙も、何処かの森の樹木でした。如何にしてこの様な紙の繊維となって、他でもない私のペンで書かれることになったのでしょうか。何故このペンはペンであって、大地に還っていないのでしょうか。全ての出来事は等しく疑わしく、等しく必然性があります。塵という雲を箒で掃く時に出来る渦巻は、一つ一つが奇跡であると言えるのです。これら二つの粒子が衝突しないで渦巻になるためには、出来事という驚くべき一致がなければなりません。もしもこれらの塵の粒子が家に住んでいたなら、若い天文学者たちはそのように考えたことでしょう。そして、もしも彼らが大変な学者になったなら、恐らくその箒を崇めることになるのでし

よう」と書いてこのプロポを結んでいます。

〈大変な学者〉になるから崇められるのであって、箒に必然性はありません。そういう意味で言うのですが、偉大な人物の記念館のような建物の中に、その人物の数々の所縁の品が展示されていますが、その人物の偉大性とは殆ど関係が無い筈です。ところが愛用していたペンとか机などが、恰も必然性があるかの如く展示されています。そのペンや机を使用する者は、誰もが偉大になれる訳ではないのですが、誰もが神を見ているかの如く錯覚して仕舞います。「不信心から信心への関係は、聖人たちの誘惑が率直に表しているように、信心の秘めたものです。聖人の誘惑が寧ろ信じることの誘惑であるのに反して、楽しむための誘惑は寧ろ賢者のものです」とアランは『神々』の「尺度」の章で言っていますが、信じることは決して賢明に真実を掴んで楽しむことではないのです。信じることとは、真実を忘却することでもあります。真実とは、疑うことであり、疑うことによって真実が把握出来るようになり、楽しみも自らのものになって来ます。神と共に楽しむことなどはあり得ません。人間の真の幸せは、自ら意識して疑い、何が楽しいのかを意識して見出し、そして自らの意志と共に楽しむことにあります。偶然によって楽しむことは決して長続きせず、まして運命によって幸福になることなどはあり得ないのです。(完)

恋愛は青春のシンボルですが、一般に友情は生涯のものです。そして、結婚のことを話すとするなら、アランはこの恋愛と友情のことについて話すだろう、と一九〇八年五月十四日のプロポに書いています。そして、「蜜月の愛は一か月以上ももたないと言っても、誰もが賛成します。多分、例外もあるのですが、そういうことは良くあることで話すには苦勞しません。殆どの場合、もしも結婚が夫婦にとって養老院のような隠れ家を望むなら、友情は少しずつ恋愛に代わるものでなければなりません」とアランは先ず書き始めます。実際に友情と恋愛とでは大きく違っているのです。友情が恋愛に代わるには、その困難は小さくありません。「友情は信頼と誠実という二人の姉妹であることを前提にしています。自分の友人の長所を見て好きになるのは恐らく本当でしょうが、欠点を見ないで好きになるのも本当です。そこから友情の素晴らしい力が齎されます」とアランが書いているように、友情は欠点を見ないようにする努力が必要です。従って友情には議論は必要ありません。お互いに議論して切磋琢磨してお互いに向上しよう、と言われますが、議論することによって失われるものも沢山あります。「議論は全てが私たちの最も確実な考えを危険にする」とアランは『わが思索のあと』の「プロポ」の章でも言っています。つまり友情は、各自の〈確実な考え〉に基づいて〈私〉のことを私以上に知っている者との間に架橋されている関係です。そこには厳しさはありません。何故なら理解している者にあるのは安心であり親切であり、決して厳格さや厳密さでないからです。

「友情が一杯になれば、そこは本当の天国です。そこでの会話は決して止みません。退屈知らずです。悲しみさえも喜びに変えます。それは恋愛という嵐の後の港です」とアランは言います。

それに対して、それでは〈恋愛という嵐〉についてアランは何と言っているのでしょうか。

「ところで恋愛は、阿諛や嘘がなければ前進しませんから、困難があります。何よりも気に入られようとします。雄弁家が喝采や口笛で迎えられるように、彼らの話は相手の微笑に合わせて決められて行きます。その上、人は愛したいと思います。愛することが幸せなのです。決して見られたくないことや見られないことがあります。詩人が言うような恋愛は、目隠しをされているのです」と言って、恋愛が盲目である点を指摘しています。恋愛は、お互いに嘘でも良いから口先で褒めることから開始されます。陸上競技選手の練習のように、褒められることによって最大限の能力が発揮されて来ます。より一層魅力的な人間になろうとします。〈相手の微笑〉が自分のあり方を決めて行くのです。「私はあなたを愛します」と言いますが、もっと正確に言うなら「私はあなたの微笑を愛します」ということです。そして、私はあなたの全てを愛するのではなく微笑だけを愛するのですから、〈愛したいと思い〉ますし、〈愛することが幸せ〉になって行きます。恋愛とは自然と生まれた自主的な感情の表れであると思うのは錯覚です。恋愛とは極めて人工的に創り上げられた感情であり、全てをさらけ出した感情ではありません。〈決して見られたくないことや見られないこと〉は幾つもある筈です。結婚すれば否応なしに殆ど全てを見られたり見たりするので、恋愛感情も殆どの夫婦には稀薄にならざるを得ません。歳を取っても恋愛関係のような感情を保持している夫婦とは、実際には〈見られたり見たりすること〉が十

分でない儘、お互いに隠しているものが沢山残されている夫婦であると言っても過言ではないと思います。詩人が表しているような恋愛は、美しい言葉で表現していても全てを見ていないのであり、目隠しをされているようなものである、とアランは言っているのです。

それでも、歳を取っても仲の良い夫婦は沢山あります。彼らの感情とは、恋愛ではなく友情へ発展したもののようです。アランは言います、「もしも友情へ到達したいなら、詩から散文へ上手に移行しなければなりません。詩の称賛から何かを取り出さなければなりません。率直に話さなければなりませんし、顔付きや精神を信じた日のことを明らかにしなければなりません。そのことは決して後悔や苦悩なくしては行われません。「昔、あなたはそんなことを言うてはいなかっただろうに」。殆ど何時も雄弁家は、昔の話に戻ります」。

歳を取れば誰でも雄弁家になります。隠して置けなくなって全てを話し出します。しかし、何でも話せば良いものでもないのです。感情に流されることなく、理性的に思考することです。あるいは、昔から決められていることから新しいことも発見出来ますから、無視する必要もありません。従って昔からある礼儀のようなものも大切であるとアランは言います、「従って、礼儀の一覧表は広げて置きなさい。儀式の横暴さから逃れること、人が言っていることを考えること、人が考えたことを言うこと、それが結婚における水先案内人のやり方というものです。そこには迂回しなければならぬ嵐の岬があります」と書いてこのプロポを結んでいます。

勿論、〈結婚における水先案内人〉は、昔から決められている儀式にあるものではありません。しかし、儀式が優先されて夫婦や個人の自由にとって都合が悪くなって来ないように、礼儀だけは大切にされた方が良いのです。そして、自由を保持する夫婦にとっての真の愛は、〈人が言っていることを考えること、人が考えたことを言うこと〉によって導かれて行きます。それは人と人とが誠意ある関係で結ばれている友情でもあります。恋愛は、健全であればやがて友情に変わるようです。（完）

我が国において大学で学ぶ者は、二十歳前後の若者ばかりではなくなりました。最近では社会人入学があり、公開講座などが活発に利用されて、大学キャンパスで学ぶ高齢者が沢山いるようです。それはそれで結構なことですが、気懸かりなこともあります。それは純粋に学問を研究するためでない場合もあるようです。つまり学士・修士・博士という学位を取得して、社会的地位の向上に役立てようとする者も多くいるようです。つまり出世や肩書きに利用したいと思う者たちです。勿論、如何なる動機であっても大学で学ぶことは、それなりに意義があることですから、社会人や高齢者の学習を排除しろと主張するつもりは毛頭ありません。

しかしながら大学とは、学生は教員から教育を受ける処であり、教員は自らの学問を研究する処です。極論を言うなら、大学は直接的に政治や社会から影響を受けることがなく、又影響を与えることがなくても十分にその目的を遂行出来る処です。大学に自治が認められている所以でもあります。決して出世や肩書きのために設置されているものではありません。従って、純粋に学問を追究する処ですから、追求する学問が無い学生、あるいは見付からない学生にとっては非常に不似合いな場所でもあります。更に、漠然と教養を深めたいと思って入学する学生にとっても、我が国の場合は益々不都合な場所になりつつあります。何故なら、一九九一年（平成三年）の大学設置基準の大綱化による一般教育と専門教育の基準緩和は、教養教育の衰退を齎しているからです。

そのような意味から公開講座は、出世や肩書きとは殆ど関係のない純粋な学問だけを目的とした講座かもしれません。ところがアランがソルボンヌ大学の公開講座を聴きに行き、予想と違った内容に大変びっくりしたようです。一九〇八年五月十九日のプロポは、二十年ほど前にソルボンヌ大学へ公開講座の最初の授業を聴きに行った時の感想から書き始めています。

「教授は、話すのと同時に考えたことを信じさせるために語っていましたが、俳優のようでした。教授が言ったことは、大変に物足りないものでした。彼は、プロシア人の哲学者であるカントのことを話しましたが、用心しているように話をしました。震える声で辺鄙な田舎で祈っているように小声でした。彼は、自分の講義の中でフランクフルト対独講話条約の承諾をカント哲学から決して理解しないように懇願していました。この思索家がプロシア人であることを忘れるお願いをしていました。結局、彼は進行中の軍隊の騒音や国旗の戦きに言及したのです。聴衆は何度も繰り返し拍手して立ち上がり、最後には感激するまでになりました。私はといえば、劇場のようなその部屋から出て教室へ這入って、最早あの部屋には戻るまいと思いました。何故なら、問題が混乱していることに我慢ならなかったからです」。

フランクフルト対独講話条約の承諾とは、普仏戦争（一八七〇～七一）の休戦のために、アルザス・ロレーヌの割譲と五十億フランの賠償金を三年間でフランスがドイツに支払う条約で、パリ・コミューンが成立していた時に行政長官のティエールが一八七一年五月十日にフランクフルトで署名したものです。つまり、その公開講座はカントの哲学についてのものでしたが、この教授は普仏戦争で破れたフランス人に対して、勝利したプロシヤ人としてのカントのことを思い出させたのです。勿論、カントの哲学と、普仏戦争やフランクフルト対独講話条約の承諾とは関係がありません。ところが、カントが〈プロシア人であることを忘れるお願いをして〉、逆説的ではありますが、カントの哲学とは関係のない人種や戦争のことを持ち出したのです。この教授には、公開講座の場合は政治や社会と関係づけて話す方が聴衆に歓迎され喝采されるという魂胆があることを、アランは見抜いていました。良く言えば、この教授にはサービス精神が旺盛だったのです。しかし、アランは〈問題が混乱していることに我慢なら

なかった) のです。「カントは真実を言っているのか間違っているのかを知るのが重要であるなら、その問題と同時に領土の防衛を論じるのは止めましょう」とアランは書いています。

「彼(教授)は劇場で言うように大袈裟に言いました。劇場であるなら、それで良かったでしょう。ここでは情熱が女王です。笑いや叫び声や口笛が全てを決定します。講師は大衆の奴隷です。作品の質を落とさないように、悪ふざけする人が少しでもいてはなりません。最も小さな出来事でも注意を逸らせます。真面目な聴衆が沈黙しようとしても、他の者が再びそれ以上の大声を出します。新聞が加わります。管理者はうろたえます。そこでの講演は失敗です」。カントの哲学について語る公開講座であったのに、講座は演劇に化し、講師は俳優に化しているのです。その様な教授は、政治家に成れば良いのです。一流の学者や小説家が、政治的発言をしている講演が良く行われています。それはまさしく政治活動であって、文化活動でも教育活動でもないようです。そういう混乱が多くなればなる程、学問や文化が政治に利用されて来ることは明白であり、学問や文化が本来の姿でなくなって来ます。アランも「全ての公開講座は廃止すべきだろう」と結論を下しています。「聴講する人々が叫ぶ権利を持つや否や、最早そこに教育はありません」と明瞭に書いています。教育を受ける者は叫んではいけないものであり、叫ぶ者は質問もしないものです。従って、教授も「歌手や俳優のように」聴衆のご機嫌を取ろうとすると、真の学問の話が出来なくなることは眼に見えています。アランはそのことを知っていたためでしょうか、ソルボンヌ大学で決して講座を持ちませんでしたし、教授の肩書きも終生固辞していました。(第Ⅱ巻・完)

アランと共に（Ⅱ）

（2015年5月登録）

<http://p.booklog.jp/book/98276>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98276>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98276>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ